

東洋建築史概説

一 亞細亞に於ける希・羅系藝術

ペロポネス半島に發祥した希臘藝術は時と共に發展し、波紋を描いて四方に擴がつた。其の西するものは羅馬となり、佛蘭西を貫通して西班牙に至り、其の北するものは深く北歐に入り、其の南するものは直ちに埃及に入り、更に北アフリカの全部に瀰漫し、而して其の東するものは西亞を捲席して印度及び中亞に入り、其の餘波は遠く蒙古支那に及び、我が日本にまで其の痕跡を留むるのである。

茲に西亞方面に於ける希・羅系藝術の経歴を考ふるに、希臘民族は既に有史以前に於いてエーゲ海を渡つて小亞細亞に殖民し海岸地方に文化を布いたことは、例へばトロヤ戰役の神話的傳説に考ふるも、將た又各地より發見されつゝある遺物に徴するも明かである。爾來、希臘民族の東方進出の國策は強大なるアッシューリアの爲に阻止されたが、其の後波斯の西方經略の政策と衝突して終に國運を暗したる大戦役を醸した。其の結果波斯の惨敗に由つて希臘文化は深く小亞細亞の内地に進出した。歴山大王は更に叙利亞、埃及を征服し、轉じて波斯を占領しなほ長驅して今の露領トルケスタン及び阿富汗國を蹂躪し、終に印度に闖入して五河地方に到達した。彼は印度

征服の雄圖を遂げずして軍を還へしたが、彼の足跡を印した地方にはクラシック文化の種子が播かれ、やがてそこに萌芽し發育し、一派の藝術として現はるゝに至つたが、其の様式は地方に従つて異同を生じたのである。

歴山大王の歿後、其の廣大なる領土は三分せられたが、其の亞細亞地方全部は彼の宿將セロイコス・ニカトルの所領となつた。セロイコスはメソポタミアのセロイキアに都したが、次代から此叙利亞のアンチオキアに遷都し、此處にアンチオキア朝の叙利亞王國が興つたが、其の藝術は殆ど純然たる希臘式であつたことは、其の遺物に依つて明瞭である。併しメソポタミア以東の地は叙利亞王國の威令が行はれず、アムダリア流域及び阿富汗國の北部を包有する地方には希臘民族の殖民に由るバクトリア即ち大夏國が興り、裏海の東南より波斯内地に亘る地方にはバルチア即ち安息國が興つた。大夏に就いては健馱羅藝術總説に就いて其の概要を述べたが、其の消息は漢史の上にも傳へられ、支那との交渉が明かに認められるので、大夏の藝術が希臘を基調とする以外に、また若干支那藝術との關係があるべき筈であるが、憾むらくはこれを立證すべき的確の資料に接しない。今日知られるたる範圍に於いては、バクトリアが印度の五河地方に進出して印度民族と觸接し、佛教藝術の感化を受けた後の藝術、即ち印度バクトリア王國及びこれを繼承せる大月氏の貴霜朝藝術に於いて、貨幣、石彫、寺塔の廢趾等若干の實例があり、尙ほ其の性質を推知するに充分なるものがある。

安息は其の民族はチュラン族であるとも云はれ、又アールヤ族であるとも考へられてをり、其の地域も甚だ明確を缺くのである。始め西曆前一五〇年、アルサクスが建國した當時の領域は裏海の東南に接する地方に限られ、

首都はヘカトンピルスであつたが、漸次に擴大され終に今の波斯の全部、メソポタミアの殆ど全部、阿富汗國及びバルチスタンの大部分を包有するに至つたが、西曆二二六年に至つて薩珊朝の新波斯國の爲めに亡ぼされた。安息國の消息もまた漢史上に明記されてをり、屢々漢に朝貢してゐるが就中安世高の傳は最も顯著である。彼が佛教徒であつたといふところから、安息にも佛教が行はれたと解する説が成立する譯であるが、一方に於いて安世高の傳を否認する學説もあつて未だ定論が無いと認めねばならぬ。安息國に佛教が行はれたとすれば當然印度藝術が潜在してゐたことになるが、果して然るや否や。今日バルチア藝術の遺物と認められてゐた物件の中に印度趣味の存在を發見することは寧ろ困難であり、一見直に其の希・羅系に直屬することを感ずるのである。

安息と支那との交通の行路を考ふるに、其の初期即ち支那の前漢以前に於いては當然大夏國を通過せねばならず、其の後期即ち支那の後漢時代には當然貴霜朝の大月氏の領土を通過せねばならぬ。然らば安息が後漢時代に佛教を支那に傳へたといふは、畢竟大月氏國の佛教を取り次いだと解することも出来る。又安息國の政體は地方分藩の制であり、諸藩は殆ど獨立國の如き有様で、互に統一聯絡は無かつたと信ぜられてゐるので、安息の一部の印度に近い方面に於いては佛教が行はれてゐたかも知れぬといふ想像も可能である。併し又別に、印度の亞育王が佛教を四方に弘布して遠く埃及に迄も及んだといふ事は信すべき理由の存することである以上、安息の一圓に佛教が行はれたに違ひないと推測するのも強ち無稽とはいはれぬと思ふ。斯く考へ來る時、吾人は安息藝術の眞相を闡明することが甚だ困難である。安息藝術は希・羅直系なるは論なしとするも、これに佛教藝術の加味が

認めらるゝや否や、これは尙ほ將來の探検研究に俟つこととし、茲に所謂安息藝術として一般に認められてゐる數例を擧げて其の性質を考へて見よう。

第一の遺跡はチグリス河の上流、モスルから西南直徑約五十哩の沙漠の中にあるアル・ハドル Al-Hadur の宮殿である。これは夙に世に知られた遺跡で、六つの大なる廣間とこれに附屬する小室とより成り、後に神祠の壇と覺しき跡がある。廣間の中には小壁の面に僅かに太陽神及び其の左右の鳥、其の下にアカントスの彫刻が残存するに過ぎぬが、其の希臘系の手法は明瞭である。羅馬皇帝トラヤヌスは西暦一一六年にバルチアを攻めアル・ハドルを圍んだといふが、此の宮殿は其の後西暦二〇〇年頃に出來たものらしいと認められてゐる。然るに茲に興味あることは、メソポタミアの南部のワルカ Warka といふ處からもアル・ハドルに於ける手法と全く同型の斷片が発見され、同時にバルチアの貨幣が発見されたといふのである。建築の殘片としては二種の柱頭が紹介されてをり、一はイオニア型、他はコリント型であるが、コリント型のものの中心に、これ或は土地固有の宗教上の神像であるかも知れぬが小さき人像が見える。或はこれ健駄羅の柱頭と同系のもので、人像が佛陀であるかも知れぬと假想して見たいのであるが、何分現物を見ないので明瞭でない。近頃メソポタミアの發掘は非常に進展してゐるが、其の中に少からずバルチア建築の遺跡と見るべきものがあるといふ。兎に角バルチア藝術には希臘と羅馬との素因が等分に混在してゐるが如くであるが、さて羅馬藝術の東方進出の状態はどうであつたか。

羅馬が希臘、小亞細亞、叙利亞等を併合した勢を以て安息を侵し、安息亡ぶるの後は薩珊と戰鬪を繼續したこ

とは周知であるが、既に西暦一六六年即ち後漢の桓帝延熹九年に支那に通じたことは興味ある事實である。時の羅馬皇帝マルクス・アウレリウス・アントニヌスは漢史に大秦國王安敦と記されてゐる。蓋し支那と羅馬との交通が何時から開始されたかは知らぬが、交通の主なる目的は支那から西亞及び羅馬に絹を輸出するにあり、西亞殊に薩珊波斯は其の仲介者であつたが、絹に染織の加工を施して逆に支那に輸出したと認められてゐる。即ち羅馬藝術は當然波斯以東にも關係があり、遠く支那まで何分かの影響を與へたと信ぜられるのである。

結局四方乃至中央亞細亞に於いて希臘文化の勢力の及んだ範圍は主として歴山大王の征服した地域であり、其餘波は印度内地、支那トルケスタン、支那塞外地方にまで及んでゐる。而して羅馬文化の普及した地方は、小亞細亞、叙利亞等の羅馬の領土となつた部分は勿論、更にメソポタミア、イラン高原、中央亞細亞、印度までも進出し、希臘文化普及の地方と重なり合ふのである。此の間に國を成すものは興亡相踵いで多數に亘るが、就中藝術史上大夏、安息、大月氏が最も重要であり、薩珊は又自ら別系に屬するものである。而して此の各地方に現はれた希臘藝術は勿論純粹なるクラッシク式でなく、地方的色彩がそれ／＼加味せらるゝに依つて特殊の性質が現はるゝのである。若しそれ西亞以外に希臘藝術の微細なる痕跡までも追究するならば、それは恐らくは殆ど亞細亞の全部を覆ふであらう。

二 初期サラセン建築

サラセン建築はムハメッドが回教を唱へてより急速に發展したが、其の根柢は遠い太古からアラビア民族の間に伏在してゐたのである。此のアラビア民族の固有の建築と其の四圍の他の民族の建築とが相融和して特殊の様式を大成したものが即ち所謂サラセン建築である。

即ちサラセン建築の發生發達を考へるには、第一にアラビア民族固有の建築を知り、第二にこれに交渉したる他の民族の建築を知らねばならぬ。さてアラビア民族固有の建築は、元來石と泥とから生れた原始的建築で、材料構造の關係上、當然始めは一塊の中空の橢圓體の如きもので、丸いプランの壁體が其のまゝ延長して橢圓形のドームになつたやうな形であつた。其の後漸次に進歩して、橢圓體の下に四角な臺が發育し、此の臺が立方體の房室となり、橢圓體は其の上に冠せらるゝ球蓋となつたので、これがアラビア建築の原型である。

さて次に其の四圍の民族の建築に就いて考ふるに、太古の事情は姑く措き、基督紀元直後の頃に於けるアラビア民族の分布は、アラビア半島全部は勿論、其の一部族はメソポタミアに入つてヒラ國を建設した。即ちラクミードと稱する民族である。他の一部族はシリアに入つてハウラン地方に建國した。即ちセリヒードと稱するものである。然るにイエーメン地方から北上した第二の部族がセリヒードを亡ぼして其の地を占領した。これが即ちガサニードである。要するにアラビア民族は基督紀元直後に於いてシリア及びメソポタミアに進出してゐたのである。

當時のシリア及びメソポタミアを繞る他の民族は何者であつたか。第一にシリア地方は羅馬の領土となり、其の首府は西暦一〇五年にハウラン地方のボスラに定められ、アラビア人は羅馬の主權の下に保護せられ、ガサニードも其の保護國の位置に在つたのであるから、羅馬文化の感化を受けたことは自明である。

メソポタミア地方は西暦前二五〇年から西暦二二六年までは安息國の領土であつたから、アラビア民族は當然安息の主權の下に在つて其の感化を受けた筈である。而して安息文化は希臘羅馬系のものである。以上の事實から考へて、基督紀元直後から二三百年間は、アラビア民族の建築はクラッシク系の建築と交渉しつゝあつた事を推知するのである。

西暦第四紀に至つて四圍の状態は一變した。即ちシリア方面は東羅馬の領土となつて、ビザンチン文化が流れ込み、メソポタミア方面は薩珊朝の波斯の領土となつてサッサン文化が扶植され、別に埃及にはコプチック文化が起つてアラビアと密接の交渉を開始した。斯くてアラビア民族の建築は、ビザンチン、サッサン及びコプチックの三方からの交渉を受け、茲に互に相練り交ぜられて特殊の様式が出来たのである。尙ほ詳言すれば、アラビア民族固有の原型なる骨格の上に、ビザンチンの筋肉や、サッサンの皮膚や、コプチックの裝具などを附けて、新しい形を造つたのである。其の後ビザンチン帝國も衰へ、コプチックもサッサンも振はず、アラビア民族は最早これ等の民族に依頼する必要を感じない迄に成長したので、猛然と起つて、これ等の諸民族に對して反抗を試み、終に覇を世界に唱ふるに至つたのが即ち大成せるサラセン建築である。

以上の経過から考へて、ムハメット以前のサラセン建築なるものの性質は自明である。それは當然アラビア民

族固有の骨格の上に何等か四圍の他の民族の筋肉や皮膚を装うたものでなければならぬ。此の實例は不幸にして極めて乏しいので、具體的に前述の推理を證明するに充分でないが、尙ほ若干の徵證となるべきものは南シリアのハウラン地方及び北シリアの一部に發見されてゐる。メソポタミア地方には未だ資料の發見を聞かぬが、必ず早晚何等か消息があると思ふ。

遺跡の第一は北シリアの沙漠にあるピソスの墓と稱するもので、立方體の一室の上にやゝ楕圓體に近いドームを冠したもので、西曆第六世紀の建築と認められてゐる。これは所謂北シリア式として特別に取扱はれてゐるが畢竟アラビア的骨格を有するものである。

第二は南シリアの死海の東方沙漠内のラバート・アモンの薩珊國王ホスルー第二の宮室で、これは西紀第六紀の終りから第七世紀の初めにかけて造られたものであり、造營の技師等は總てアラビア民族なるガサニード人であつたと傳へられてゐる。此の建築に對して古い案内書に「こゝに一字の廢殿がある。アラビア建築であるが回教の禮拜堂では無いやうである」と記してゐるのは、如何にも面白いことである。

次に埃及のコブチック建築との關係に就いては未だ的確なる徵證を得ないが、元來コブチック藝術はビザンチン藝術の一派であり、或るものは殆ど彼此區別することが出来ぬからであつて、初期サラセンの遺物を見ても果してビザンチン系から感化を受けたか、將たコブチック系から影響を受けたか判斷が出来ぬのである。只だ遺物の所在に依つて其の何れかを推斷するに過ぎぬのである。

要するにムハメット以前のサラセン建築は、アラビア内地には原始的状態で残つてゐるのであり、ビザンチン、サッサン及びコブチックと交渉の間に在る地方に於いては、其の實例が極めて乏しいのと、假令實例があつても、以上三種の他民族の藝術が互に入り亂れて結び付いてゐる爲めに、的確に其の真相を知ることが甚だ困難なる状態にあるのである。

三 サラセン建築

サラセン建築は即ちムハメッド教(回教)建築である。サラセンの語原は詳でない。或はサーラ即ち沙漠の義から出たと云ひ、或は西亞沙漠に住める一部族の名から出たと云ふ。元來アラビアのヘヂアス地方に發祥し、漸次に北上して一はメソポタミアに入り、一はシリアに入り、其のシリアに於けるものは東羅馬帝國の保護の下にガサニード侯國を建てたが、西曆六二二年を紀元として回教の教祖ムハメッドがアラビアに起り、西曆六三二—一六三九年先づシリアを占領した時にこれを併合した。回教徒は疾風の枯葉を吹くが如き勢を以て西曆六三八年には埃及を征服し、鋒を東轉して六四一年には薩珊朝の波斯を亡ぼし、六四三年には土耳其斯坦を併呑し、更に六四七—七〇九年の間に北アフリカ一帯を席捲し、其の一派は西班牙に渡つて茲に回教國を建設した。西曆一〇〇一年には阿富汗の回教國は印度に侵入して阿富汗朝の回教國を建設したが、分れて無數の小邦を生じ、一五二六年に莫臥兒朝興るに及んで漸次に統一された。

波斯では幾度か王朝の更迭があつたが、土耳其民族のセルジューク朝代に至り、其の一部族は小亞細亞にルーム國を建てた。ルームはやがて同族のオスマンに亡ぼされ、オスマンは一四五三年に東羅馬を亡ぼして歐土に入り、バルカンの全半島を奪取して更に露西亞の南部に進出した。これより先きトルケスタンの回教徒は葱嶺を越えて支那に入り、海路廣東に上陸した一隊と相應じて支那全土に蔓延して滿洲に及び、一方後印度の南部及び印度諸島の殆ど全部に波及したのである。

斯くて回教弘布の範圍は亞細亞に於いて西伯利亞の大部分、蒙古、西藏、朝鮮、日本及び後印度の大部分を除く外は悉くこれを包括し、アフリカは中南部を除く外は殆ど全く其の領土となり、歐洲は西班牙、地中海の若干の諸島バルカン半島の全部、露西亞の南東部が其の占有に歸した。此の驚くべき廣大なる地域に回教が行はれ、回教の行はれた地域には即ちサラセン建築が現はれたのである。

サラセン建築の領土が此の如く廣大であるが爲めに、其の建築も亦土地に従ひ時代に依つて同じくない。併し總てに共通する特殊の性質も認められる。試に其の重要な數個條を列舉して見れば、第一に其の趣味が東西建築の中間に位することである。理性の働きの鋭い處は歐洲的であり、茫乎として寛濶な處は東洋的である。濃厚煩瑣な點は歐洲味に近く、奇巧超脱の點は東洋味である。即ちサラセン建築は東西建築の性質を兼有するものと稱することが出来る。

材料構造に就いては、サラセン建築は元來アラビア沙漠に發祥したものであるから、生れながらにして石造で

ある。他の民族の如く木材から生れて石材に移つたのでは無い。即ち石を以て壁を築き上げ、石を以て屋根を蓋ふ方針で進んだ爲めに、當然壁本位拱式の建築となり、屋根は球蓋となつた。其の拱は多くは尖拱であり、稀に馬蹄拱や半圓拱を混用する。其の球蓋は普通楕圓體又は卵形の頂を掴み上げたやうな形であるが、それが時代や地方の關係で、或は平低となり或は細高となり、椎實形となり、薑形となり、千變萬化するのである。

壁本位の建築であるから、柱は比較的發達しないが、それでも特異の意匠を發揮して奇巧人意の表に出づるものを創作してゐる。壁面裝飾の技術に至つては眞に天下無敵であり、從横奔放端倪を許さざるものがある。殊にアラベスクと稱する特殊の文様は到處に反覆賞用され、建築に限なき興趣を興へてゐる。文様の種類は普通の動植物や幾何學的のもの外に所謂鐘乳文様や文字文様などがあつて人目を驚かしてゐる。其の材料は木、石、金屬、陶瓦等夥しい種類があるが、就中釉瓦と石の象嵌は其の得意とするところである。

建築物の種類は禮拜堂を主要とし、これに附屬する光塔を以て最も特殊のものとする。其の意匠の豊富にして變化に富めることは、恐らくは世界の古今を通じて他に比儔を見ないであらう。墳墓はこれに次いで重要な一科をなす。其の他學院、僧房、水舎、病院等は宗教建築に數へられ、都城、宮殿、住家、旅舎、賣店、市場、浴堂以下非宗教的建築も亦異彩ある物が多い。

サラセン建築の分類は甚だ困難である。これは餘りに範圍が廣大であるからである。多くは已むを得ずこれを地方的に區分して説いてゐるが、若しもこれを様式的に分けるならば、フランツ・パシヤの式が適當である。そ

れは第一、ムハメッド以前のサラセン建築・第二、アラボ・ビザンチン式(又ビザンチン・サラセニク建築)・第三、純正サラセン式・第四、混成サラセン式の四階級である。第一のムハメッド以前とは、前記ガサニードの建築の如きもの、第二のアラボ・ビザンチンとは初期サラセン建築で、ビザンチン式からサラセン式に移り行く道程に在るもの、第三の純正サラセンとは埃及、シリア等に於いて大成した様式、第四の混成サラセンとは波斯、印度、支那等に於いて、其の國の既往の建築と結合して一種の混血的様式を作つたものである。

地方的分類は當然サラセン建築發祥の順序により、アラビア、シリア、埃及、波斯、トルケスタン、阿富汗朝印度、莫臥兒朝印度、支那等に進み、一方北アフリカより西班牙に至り、更に一方セルジュークからオスマン・トルコに及ぶのである。而して彼の様式的分類と地方的分類とが、經となり緯となつて互に織り重なるのであるから、事は頗る紛糾するのである。

サラセン建築は元來熱國に發祥した熱國氣分のものであつたが、其の各方面に普及するに及んで巧に其の風土に同化し、其の東西兩洋に跨る關係から、殆ど世界行くとして可ならざるは無き融通性を發揮してをるの、蓋し建築界の偉觀である。惜むべし、其の國土が殆ど總て亡國となつた爲めに古來餘り世に尊重されなかつたが、近頃其の眞價が漸く闡明せらるゝに至り、往々古今東西に冠たる名建築の存在が認められるやうになつたのは、斯界の爲めに喜ぶべき事である。

四 マウル建築總説

マウルは民族の名である。元來ローマ人が北アフリカのモロッコ、アルジェリア、チュニスを横斷して北アフリカの北岸に亘るアトラス山脈の麓に住する民族に與へたる名稱である。然るに西暦第七世紀の後半に至り、アラビアから起つた回教徒が此の地方を征服するに及び、マウル人は回教に歸依すると同時にアラビア人と雜婚した結果、アラビア人もマウル人も一括してマウルと呼ばれるに至つたのである。第八世紀の初に至り、マウル人は西班牙に侵入し、先づ七一〇—七一三年にコルドヴァを奪取して此處に獨立の回教國を創建し、サラセン文化を弘布したが、其の藝術はマウル藝術としてサラセン藝術界に一種の異彩を放つたのである。

マウル族のコルドヴァ王國が漸く没落した頃、其の別派なるアルモラヴィード及びアルモハード朝が起り、西班牙及びモロッコを領してゐた。其の後西班牙に基督教徒が勢力を扶植し、相對抗したが、一二二二年回教徒は終に敗衄した。しかも猶ほ南方にグラナダ王國を保ち、燦爛たる文化を誇つてゐた。然るに一四九二年アラゴン及びカスチリア軍の爲めに撃破されて全滅し、其の基督教徒に改宗せるものはモリスコと呼ばれて西班牙に留まつたが、改宗を肯はざるものは國外に追放された。斯くて回教王國は西班牙に其の跡を絶つたが、多年扶植した回教藝術は容易に失はれず、殊にマウルの熟練なる工人はよく名作を成就し西班牙の爲めに貢獻してゐたが、一六〇九年に至りフィリップ第三世は、此の天才的工人等五十萬をアフリカに放逐したので、爾來西班牙に於けるサ

ラセン的藝術は漸次に衰へ、以て今日に至つたのである。

マウル建築の分布は西班牙を主とし、モロッコ、アルジェリア、チュニス、トリポリ、バルバリー等の北アフリカ沿岸の各地に亘り葡萄牙にも若干其の影響が認められる。併し北アフリカの建築には特色がやゝ少く、西班牙に於けるものが嶄然異彩を放つので、普通マウル建築と云へば直に西班牙の回教建築を指すが如き事態である。而して西班牙に於いて何故に斯くの如き特色が大成したかは頗る興味ある問題である。

西班牙には既に遼遠なる太古に於いてフェニキア人の殖民があり、カルタゴの侵略があり、次いで羅馬の領となり、西ゴートの版圖となり、東羅馬の勢力圏内に入り、回教徒の統治以前に於いて複雑なる文化の基礎があつた。これマウル藝術が埃及シリア等の回教藝術と大いに其の性質を異にする一原因であらう。次に西班牙の國土は埃及シリアの如く乾燥單調でなく、荒漠峻角でなく、山河草木濃やかにして往々豊なる畫趣がある。これ亦西班牙回教建築の特徴を大成せしめた一原因であらねばならぬ。更に他の原因は中古以來の歐土の基督教藝術との交渉であり、其の結果はゴシック建築にサラセン趣味を點じたと同時に、サラセン建築にゴシック趣味を添へたと見るべき理由がある。勿論マウル人の特殊の思想や技巧がこれを成就すべき根柢の原動力であることは言ふを俟たぬ。

マウル建築の特色は甚だ鮮明である。第一に埃及シリア地方の如き、重厚乃至無頓著の氣分が少く、寧ろ輕捷にして過敏である。サラセン建築の通性として表面裝飾に全力を注ぐは當然ながら、埃及シリアの如き坦々たる

平面上に平面的文様を作るに非ずして、好んで彫刻的意味を有する凹凸文様を作るのであり、其の文様は多くは艶曲なる細かき曲線より成るもので一種の煩はしさを感じしむる。しかも其の文様は隅から隅まで徹底的に充填され、其の間に毫も間歇の餘地を與へぬのである。埃及シリア方面の實例は、往々茫乎として愚なるが如き風貌を示すが、マウルの實例は殆ど常に忙乎として慧なるに似る。畢竟埃及シリアは所謂東洋的であり、マウルは所謂西洋的であると言ふことが出来る。此の原則は建築の總ての細部にも適用し得る。例之ば拱でも、柱頭でも、羽目でも、小壁でも、マウル建築に於いてはそれは寧ろ器機的精巧さを示すが、何處かに硬い感じがあり溫情に乏しい憾がある。尤も初期マウル建築には此の傾向が少く、年代を降るに従つてますます増大するのである。

建築の實例の最古のものはコルドヴァの伽藍である。手法に奇矯な點があるが、亦た純眞の情味もあつて面白き。セヴィリヤのアルカサル(西曆一三五〇—一三六九年)及びヒラルダ(西曆一三九五年)、グラナダのアルハンブラ(西曆一二三二—一四〇八年)等は殊に有名であるが、既にマウル建築の末期に屬して生氣が充實してをらぬ。其の他西班牙の各地方にマウル式、準マウル式、マウル趣味の建築が甚だ多い。其の情力は今日に至つて尙ほ幾分痕跡を存してゐるのである。アフリカにも可なり多數の重要建築があるが多くは世に知られてをらぬ。其の二三を舉ぐれば、アルジェリヤのトレムセン、コンスタンチン及びアルジェーに於ける寺院、光塔、墳墓等は殊に觀るべきものである。モロッコには案外顯著なる例は少いが、チュニスには若干の好例がある。要するにマウル建築は東半球の極西に立つサラセン藝術で、中堅の埃及シリア、東方の波斯、印度と相應呼して世界の建築界に氣を

吐くものである。

五 突厥民族の藝術

突厥は即ちトルコの音便の假名である。トルコ民族はアジアに於ける重要な一大民族で、ウラルアルタイ語族に屬し、其の分布は今や西方亞細亞より中央亞細亞一帯に及び、歐土の一部並に北部アジアにまで浸入してゐる。其の民族の種類は非常なる多數に上るが、現今獨立の國を立つるものは僅かにオスマン・トルコだけで其の他は或は滅亡し、或は他の附庸國となつてゐる。併し既往に於いて相當なる勢力を保ち、相當なる文化を有したものは若干ある。茲に解説を試みるのは、即ち主として西曆第八九世紀及び其の以前に於いて、今の西部トルケスタン即ち露領トルケスタン地方に建國したトルコ民族、即ち突厥の藝術の概観である。

此の問題は實は、現今の研究の範圍に於いては甚だ難解であり、的確なる斷案を得るに足るべき資料に乏しいのであるが、今試みに予の現在に於いて推考する處を略述するのである。先づ一般的にトルコ民族の發祥から第八世紀に至る推移の状態を説いて見よう。

これに就いて先づ考ふべきことは、匈奴族とトルコ族の異同の問題である。これに就いては東洋史専門の諸家が久しく研究を續けてゐるが、未だ氷解されてをらぬが如くである。茲では、匈奴はトルコ族と極めて密接であるが同一でないとは假定してこれには觸れぬこととし、一般に確實にトルコ族であると認められるものに限定する。

るのである。

トルコ族の發祥の地は勿論確實に指定し難いが、大概今の支那の北境即ち内外蒙古に亘る地方であると考へられてをり、白鳥博士等の研究に據れば、漢代の雲丁即ち魏の高車は最も古く知られたトルコ族の一で、後の回紇の祖であり、同じく漢代の堅昆は後に唐代の黠戛斯となり、史上顯著なるものとなつた。又漢代西域地方の唐居、烏孫、大月氏もトルコ族であり、大月氏に次いで興つた嚙噠もトルコ族であつた。併しトルコ族中最も重要視されるものは大月氏と共に突厥である。

突厥は正しくはチュルクと發音するので今日のトルコの名は其の轉訛である。元來エニセイ河の水源地附近の山地を原住地とするが、六朝時代から史上に活躍し來り、やがて今の支那の北方塞外の全部を占有したが、別れて東西二國となり、屢々唐に入寇した。東突厥は唐の太宗に亡ぼされ、西突厥は今の露領トルキスタンの殆ど全部を領してゐたが、これも唐の高宗の時(西曆六七九年)に亡び、別に北突厥もあつたが西曆七一六年頃から衰亡した。而して西突厥の分散したものは、中央に幾多の王朝を建てたが、就中史上に重要なものはホラズム(花刺子模)、ガソニ(鶴悉那)、セルジューク等であり、更に西遷したのがオスマンである。而して更に茲に興味あることは、彼の帖木兒も亦た突厥の遺血を繼ぐ者であり、其の後裔は終に印度に入つて莫臥兒大帝國を建設したことである。

さて中央亞細亞に於いて藝術の遺跡を留めたトルコ族の諸王朝の顯著なるものは、健駄羅の大月氏を始めガツニ、セルジューク等があり、支那トルケスタンの遺跡にも、當然トルコ族の經營にかゝるものが有るべき筈であ

るが、これ等に就いては、別に解説さるべきに依り、本編に於いては西突厥に属するもののみを擧ぐることにする。然るに西突厥の遺物と確認さるゝ遺物は、未だ發見されぬのであるが、姑く予の所信を以て立論するのである。

さて西曆第七八世紀に於ける西トルキスタンの状態を考察するに、既往に於いて此の地方に住つてゐたトルコ民族は文化が甚だ低かつた爲めに、常に外國文化の影響の下に在つたので、殊に地理上の關係から、波斯の感化が深かつたと思はれる。即ち大夏、安息、薩珊の文化を連続的に攝取したが就中薩珊に負ふところが最も大きかつた。其の薩珊は西曆六五一年に回教徒の爲めに亡ぼされて以來、當然回教藝術の風潮に干渉されたのである。併し元來甚深なる根柢を有つた薩珊趣味は牢乎として消滅しないことは、亦た幾多の他の實例に徴して自明であり、一方漢時代から漢民族の勢力が此の地に扶植された關係から見て、當然漢藝術の要素が重大なる部分を占めてゐたことも自明である。斯くて西突厥の藝術は、薩珊、回教及び支那の三種の原素が互に相交錯してゐたものと考へねばならぬ、此の三派の交錯が果して如何なる様式を作り出したであらうか。それは本編に掲げられた二つの銅器に依つてほぼ窺ひ知られると思ふ(略)。尙ほ唐の玄奘が第七世紀の初めに渡天の際通過したる西トルキスタンは西突厥の領土内であつたが、其の諸國の事情は大唐西域記に記されてをり、假令それが藝術に關する具體的の記事を缺くとも、これに依つて若干の暗示を得ることは可能である。

西トルキスタンの第七乃至九世紀の製作と認められてゐる他の銅器の實例を以て見れば、寧ろ薩珊氣分が濃厚

であり、漢趣味に乏しいものである。勿論西トルキスタンの範圍は甚だ廣大であるから、其の地方に従つて其の性質の同じからざるは勿論である。若しも上記の遺品の製作地が判明したならば、實に一段の光明が認められるであらう。

由來トルキスタンは東洋藝術界の謎の地方である。東トルキスタンは近時著々調査研究され、漸次に謎が解かれんとしてゐるが、憾むらくは西トルキスタン方面の祕密は尙ほ深く閉されてゐる。これが開かれた時始めて暗黒なる東洋藝術史界に一閃の曙光が現はれて來るのであらう。予は本編所載の二點の實例が此の曙光を導くべきものであると信するのである。

六 莫臥兒朝の印度建築

印度の莫臥兒朝 Moghul の名は元とモンゴル Mongol の轉訛であると云ふ。即ち蒙古族の後裔であるが爲めに與へられた名である。今其の發祥の歴史を考ふるに、第十四世紀の後半に於いてサマルカンドを居城として威を西亞に揮ひたる帖木兒の後裔にババルと云ふ者があつた。彼は中央亞細亞を統一するの雄圖を抱いてゐたが、帖木兒歿後國內紛糾して叛亂相踵ぎ、ババルも終に國を脱して阿富汗國のカブールに據つた。彼は此處に勢力を扶植し、進んで印度に攻め入り、當時デリに都して印度の北半を領してゐた阿富汗國の回教王國(ロチ朝)を亡ぼし、デリを其の儘居城としてロチ朝の領土を奪つたのである(西曆一五二六年)。然るにババルの子フマユンの代にな

り、阿富汗朝の殘黨シュル・シャールの爲めに反撃され、フマユンはデリを捨てて阿富汗國に遁走した。フマユンの子アクバルは不世出の偉才であつたが、捲土重來の勢を以て印度に逆襲し、シュル・シャールを破つてデリを奪還し、父フマユンを帝位に即かしめ、後これに代つて帝となつた。時に西曆一五五六年である。即ちアクバルは莫臥兒朝の眞の開祖であり、ババルは其の基礎を作つたのであつた。

アクバルは文武兩道に卓越した名君であり、其の領土も漸く南方に擴張せられた。西曆一六〇五年其の子ジャンギールは父を毒殺して位に即きます。領土を擴張したが、彼は父帝程の明君ではなかつた。彼は西曆一六二八年其の子シャー・ジャハンに廢せられた。シャー・ジャハンは甚だ聰明ではあつたが偉大なる政治家ではなかつた。但し其の領土はますます擴張せられ、國はますます富み榮えた。正にこれ莫臥兒朝の最高潮の時代であつた。しかも彼は、西曆一六五八年に其の子アウランゼブ(又アラムギール)の爲めに幽閉され、七年間懊悔を續けて悶死した。アウランゼブの時、國威絶頂に達したが同時にまた衰頹の兆を示し、それより國運は急轉直下して底止するところを知らず、アウランゼブより莫臥兒朝滅亡までの十一帝は悉く暗愚であり、國土は四分五裂した。其の隙に乘じ英佛が其の勢力を扶植し始めた。英のロバート・クライブ(西曆一七二五—一七七四年)は東印度商會の書記から身を起し、よく奮闘して終に英國の爲めに盤石の基礎を築いた。西曆一八五七年、デリに排英の反亂が起つた時、英人は奇貨措くべしとなし、これを印度皇帝の使喚に依るものとして終にこれを廢し、莫臥兒朝の帝國は茲に終焉を告げたのである。

莫臥兒朝の印度建築は一般に印度サラセン建築と稱せられ、サラセン建築界に於いて嶄然一異彩を放つものとせられてゐる。其の系統は、一面に於いて土耳其斯坦傳來の素因あるべく、他の一面に波斯乃至阿富汗の感化あるべく、而して其の主要なる根柢となるものは即ち印度建築でなければならぬが、事實果して斯くの如きか。然り、予は實に斯くの如きものあることを認めるのである。

會つてファーガッソンは、莫臥兒建築は回教建築の一派で、其の様式、手法、裝飾等は西亞回教藝術より傳へたものであると説き、ハヴェルはこれに反して、莫臥兒建築は印度建築の一部で、其の様式、手法、裝飾等は悉く印度固有のものから出たもので、決してサラセン的干渉は受けてはをらぬと云ふ。其の孰れが正しいかは、各人觀る處を異にするのであらうが、予を以て見ればハヴェルの説が大部分正しいと思ふ。即ち根本は印度であるが、細部の手法や裝飾にはサラセン的意匠の加味を否定することは出来ぬのである。

莫臥兒朝の諸建築、殊に回教關係の建築の特色は、大體に於いて前期阿富汗期の建築と似てゐるが、更に一變した形跡が明かに認められる。其の第一は其のドーム、拱、楣式開孔、表面裝飾等であるが、ドームの形は一見土耳其斯坦や、波斯や、阿富汗のドームとよく似てをり、彼地から輸入したのであるかの如くであるが、莫臥兒建築のドームは殆ど常に辣蓋形であり、底と頂に蓮瓣があり、更に頂には、水瓶や其の他の印度固有の思想を表現する物件がある。然らば莫臥兒建築のドームは、印度に於いて西紀以前から儼存してゐたドームが漸次に發育したものであらう。

莫臥兒建築の開孔には楣式と拱式がある。楣式の場合には明瞭に料拱の式に倣つてをり、古代印度の意匠を忠實に踏襲してゐることを見る。拱式の場合には、其の拱は殆ど總て尖拱であり、同時に多瓣拱を賞用してゐる。しかも、其の拱の輪廓の線の性質は古代印度の拱から出たもので、決してサラセン發祥地の尖拱と均しく無い。これは頗る微妙な問題であり、餘程注意して見ないと彼此の相異を鑑別することが出来ない。

裝飾に關しては、印度固有のものとサラセン傳來との兩様があると思ふ。蓮を縦横自在に取扱つた文様、卍や輪寶などを組合せて複雑な圖を作つたものなどは、勿論古代印度から繼續し來つたのであるが、サラセン文様に獨特とせらるゝアラベスクや、波斯の起原と解せらるゝ釉瓦の表面嵌裝や其の他の細部に於いて、慥に外國の起原と認むべきものがある。これ等をも併せて悉く印度の自發的技術とするのは如何にしても首肯し難い。

要するに莫臥兒建築の本質は、假令それが用途に於いて回教の建築であつても、依然として印度建築であり、印度の工人がこれを作つたのである。しかもそこにまた回教藝術から若干の寄與を得てゐることを否定し難い。斯くて印度の熱烈なる感情とサラセンの超然たる詩趣とが適當に融和された時、茲に非常な美しい建築の出現を見るのであらう。彼のタージ・マハールの如きは即ちそれであると解すべきものであらう。

七 古代極西亞細亞建築

世界最古の文化が埃及にありとするの説は既往に於いて久しく承認されてゐた事であるが、今やメソポタミア

の文化が決して埃及より新しいものではないとせられてゐる。兩者の間に介在する幾多の近似民族の文化も、其の年代に於いて彼等と大なる運庭は無いと考ふことが妥當であらう。それは例へばヒッチット、ユダヤ、フェニキア、フリギア、リキア等であり、其の研究は未だ徹底的に成就されてをらぬが、大體に於いて或はメソポタミア系と認められ、或は埃及系と考へられ、或は兩者の中間にありと解せられ、或は別に希臘の先驅をなすものと認識せられ、古代文化史上甚だ興味が多いものである。

埃及、メソポタミア及びヒッチット藝術に就いては既に解説されてゐるに依り、茲には其の他の藝術に就いて略説を試みるのであるが、先づバレスチナのヘブライ民族に關しては、其の歴史甚だ複雑であるが藝術上遺蹟の考ふべきはダヴィデ王がイェルサレムを創建した時に始まるといふべく、其の子サロモに至つて都市は宮殿や祠堂を以て飾られた。此の藝術の様式は、やゝ不合理ながら便宜上一般にユダヤ藝術と稱せられてゐる。サロモの宮殿の趾は、今もイェルサレム城内の東端に存してをり、其の建築の性質に就いては學者互に見解を均しくせぬが、大體に於いて埃及系に屬するとするの説が妥當であると思ふ。其の他イェルサレム附近に残存する若干の遺構に就いて檢するも、其の年代の新古に従つて何れも多少の埃及趣味と他の異元素、例へば希臘系の素因を帯ぶるのである。要するにユダヤ藝術には嶄然たる獨創が明示されぬ。畢竟強大なる隣接民族の藝術を攝取し綜合し折衷したものと認めねばならぬと思ふ。

フェニキアはレバノン以西の狭小なる海岸地に據つたので、其の民族は頗る慧敏であり、諸種の重要な發明

を遂げ、地中海沿岸の各地及び島々を股にかけて活躍し、東西物資交換の媒介者として商權を握つた。畢竟其の本土が甚だ狹隘であるが爲めに、勢ひ海外發展の策を採らねばならぬ立場に在つたのである。其の結果一方に於いて埃及と深き交渉を生じ、他面に於いて希臘民族と密接なる關係を結び、而して後方アシシ、ローリアと鞏固なる聯絡を保つてゐたのである。即ち其の藝術は當然三者の感化を受け、終に其の混成の如き性質のものを生ずるに至つたのである。今日シリア海岸のベールートやシドンやマラトスやチロスの故地に殘存する墳墓建築、地中海のキプロス島やロドス島から出た建築の斷片、或は又彫刻、陶器、玻璃作製品等に就いて觀れば、此の間の消息は自然に闡明せられるのである。

リキアは小亞細亞の西南海岸の一部に據つた小國であり、文化史上餘り重要視されてはをらぬが、建築史上には甚だ興味が多いのである。それはミラ及びアンチフェロスに於ける石窟の墓の構造様式が希臘クラシック建築の先驅をなすものと解せられるからである。勿論希臘建築が必しもリキアから暗示を得たものといふのではないが、希臘建築の發生發達の道程を考ふるに當りて、リキア建築はこれを説明するに絶好の資料となるのである。換言すれば、希臘建築の發生當時の様式は當然またリキア建築と同工同型であつたと感得せしむるのである。蓋しリキアの地は北境山地の森林から豊富なる木材が供給され、其の建築が久しく木材本位であつたらしく、其の木造の型が後世石材に移されてミラやアンチフェロスの様式となつたのである。其の構架の方式は、土臺、柱、貫、梁、桁から垂木、軒材に至るまで一切木材を切り組み、組み立てた形其の儘である。但し上記のリキア建築

は埃及やアシシ、ローリアとは縁が遠くなり、其の手法の混在を認めないが、尙ほ深く他の方面を調査したならば、恐らくは或る程度に於いて其の關係が發見されるであらうと思ふ。

フリギアは小亞細亞の中部、ハリス河の中流の西部地方に建國したもので、歴史上には一貧弱國のやうであるが、其の遺した建築や彫刻は頗る面白いものである。此の地方は既に太古に於いてヒッタットの勢力範圍に觸れてゐた筈であるから、其の前期に屬する遺構は何處かにヒッタットの殘影が認められるのであらう。併し又それが希臘の先住民として傳へられた所謂ベラスギのミケネ藝術とも近似の性質があるので甚だ妙である。フリギアの後期に屬するものはこれに反して著しく希臘的手法に富むのは、或は希臘の手法の先驅をなすが爲めと解すべきもあり、或は逆に希臘から影響を受けた爲めと認むべきもある。要するにフリギアはメソポタミアからアルメニアを通過し小亞細亞を縦斷して希臘に渡つた文化の一派の中に當るもので、埃及方面からの影響は絶無とは云はれぬが甚だ稀薄である。

以上諸派の藝術を綜合して太古に於ける西亞文化の系統を考ふるに、其の起點はユルの河口とメソポタミアの二個所にある。これを連絡する幹線は、これを西よりすれば埃及のメンフス及びテーベからパレスチナ(その中心はイエルサレム)シリア(その中心はダマスカス)を通過し、内地に這入つてタドモル(即ちバルミラ)邊を經由し、エウフラテスに沿うてバビロンに到るものであり、ユダヤ藝術は即ち此の中に含まれる。次にパレスチナから地中海に沿うて北進したものはフェニキアとなり、折れて西に進んでリキアとなつて希臘に至つた。バビロンから

北西に走つたものはニネーヴェのアッシューリア文化となり、チグリスを遡つてアルメニアに入り、ヒッチット、フリギア等の小亜細亞藝術となり、更に西して希臘と連絡した。別に埃及、フェニキア、希臘等は地中海上の覇を争つたが、其の最も遠く進出したのはフェニキアで、希臘以西はマルタ、シチリアの諸島からアフリカの北岸カルタゴに殖民し、更に西班牙まで足跡を印したのである。此の事實から推測しても西亞諸派の藝術の性質は自ら明瞭であり、其の歐洲古代藝術との關係を會得せられるのである。若し其の東方亞細亞との交渉に至つては更に重大なるものがあるが、それは別問題として茲には言及しないのである。

八 薩珊建築總説

古代波斯(アケメニード)が歴山大王の爲めに亡ぼされた後、幾何もなくして此の地方は大王の宿將セロイコス・ニカトルの領土となつたが、セロイコスの後裔がシリアのアンチオキアを都としてシリア王國を建設するに及び、波斯の故地には安息國が起つた。安息國は西暦二二六年にアルタセルセス(又の名アルダシル)の爲めに亡ぼされ、新に興つたのが薩珊(ササニード)朝の波斯國であり、西暦六四一年回教徒の爲めに亡ぼされる迄四百十五年間續いたのである。

薩珊は新波斯國と呼ばれ、支那の六朝及び唐時代の文獻には單に波斯國と記されてゐる。元來イラン民族に屬し、アケメニード波斯と同民族で、即ち古代波斯の再興の意義を有する。従つて其の文化は大體に於いて古代波

斯の繼續であり、宗教も古代の拜火教が根柢となつてゐる。但し薩珊時代には時世の推移と周圍の他民族との關係が古代と大いに異なる爲め、其の藝術にも著しい變化を生じたが、尙ほ若干古代波斯の俦が残つてゐる處に深い味がある。

薩珊は建築及び工藝に於いて特殊の獨創力を有してゐた。古代波斯の再興と云ふと雖も其の建築の様式には特殊の性癖があつて、世界古今を通じてこれに似たものは無い。工藝の圖案も、其の根柢に於いて古代アッシューリア及び波斯の素因が認められるが、既に一變して全く斬新なものとなり、それが東方に波及して今も全世界に其の餘波を止めてゐるのは實に偉觀である。

建築の一般の性質は、壁體は主として石造であるが、大小不同の石片を積んで表面を漆喰塗に仕上げたものが多い。古代波斯では重要な建築は切石で積み重ね、亂石で積む場合には表面を釉瓦で貼装し、繼手には土漚質を用ひてゐたが、薩珊では繼手に石灰を用ひてゐる。尙ほ壁面の凸出裝飾にも漆喰細工を賞用してゐる。開孔は殆ど總て拱であつて、古代波斯の楣式本位と反對である。但し拱は半圓形ではなくして殆ど常に橢圓類似の形である。窓は極めて少く、光線は主として屋根から採る。屋根はドーム又は陸屋根である。ドームの形は矢張り橢圓體に近く、四角な室の上にペンテンチーフの手法を以て架けるので、所謂ピザンチン・ドームである。ピザンチン建築に慣用せらるゝ此の手法は、薩珊から傳習したと考へる説は蓋し妥當であらう。

細長い室の上には筒狀の穹窿屋根を架ける。一般に穹窿でもドームでも棟飾は無く、無造作な坊主頭でありそ

れに無造作な採光の窓を明けるのである。軒には鋸齒形の煉瓦を賞用するが、其の尖端を外に突出せしめ、數段重ねて相當に軒を深くするのが多い。總じて鋸齒形は剝形にも反覆して用ひられる。軒の上には、雉堞形のバラベツトが慣用された。遊離して立つ柱は稀有であり、従つて其の手法も詳でない。凡そ柱は殆ど常に壁面に突出する片蓋柱で、柱頭の無いものが普通である。稀に發見された柱頭を見るに、其の性質は希・羅系のクラシック趣味は殆ど皆無であり、或るものは寧ろビザンチン式であり、或ものは却つてサラセン氣分を帯ぶるのである。建築全體の調子は、平板なる壁面、僅少なる剝形、簡素なる穹窿屋根、何處となく茫洋として迫らざる趣があり、幾分ビザンチンに類似した點があるが、クラシックとは非常な相違がある。古い建築史に、薩珊建築をクラシックの餘蘖として羅馬建築の後に附けたり、古代波斯の復興として其の後に編入したのもあるが、何れも非常な錯誤である。薩珊建築は獨立した東洋の一大様式を作すものである。強ひて範疇を求むるならばサラセン建築の先驅として取扱ふか、然らざればビザンチン建築と兄弟の關係に置くのが至當である。薩珊朝の歴史を通觀すれば此の解釋の當然なることが自明となる。薩珊はシャプール第二(西曆三〇八—三八〇年)の時セルビスタンに都を築き、ヘロセス又はフィルス(西曆四五八—四八二年)の時ファルザバードに都し、ホスルー又はホスロエス第一(西曆五三二—五七九年)の時クテシフォンに都し、ホスルー第二(西曆五九〇—六二八年)は南シリアのラバート・アモン及びマシタに宮殿を造つたが、これ等の都城が漸次に移動して行くのは即ち薩珊が漸次に勢力を西に擴張した爲めでなければならぬ。薩珊と東羅馬とは、元來エウフラテス河を境としてゐたが、薩珊

は寧ろ優勢であり、往々河を越えて遠く小アジア及びシリアに進出し、或る時は東羅馬の首府コンスタンチノポリスを脅かし、或る時は埃及に侵入したので、其の通路に當るアラビア民族は當然薩珊に服従したのである。即ち薩珊と東羅馬、埃及(コプチック時代の)及びアラビア民族との交渉の密接なるべきは自明である。

西曆六四一年、アラビアから起つた回教徒は薩珊を亡ぼしたが、回教徒は却つて薩珊の文化を攝取し、其の藝術を模範として今日に及んでゐる。薩珊と支那とは始めから親交があつたので文化の交換は顯著であつた。薩珊が回教徒に攻められた時、援を唐に求めたので唐は援軍を送る計畫を立てたが終に間に合はなかつた。滅亡した薩珊國の若干の國民は逃れて支那に亡命し、支那の爲めに藝術上若干の貢獻する處があつたと認むべき理由がある。それは我が國の天平時代の藝術品に薩珊系のもが少からず存在するからである。薩珊人の一部は又印度にも亡命し茲にも其の藝術を傳へた形跡は歴然として明かである。其の他各方面に亡命し流寓した薩珊人の子孫は、一括して今これをバルシーと稱してゐるが、バルシーは今日と雖も尙ほ嚴重に拜火教を奉じ、其の屍は默塔(ター・イ・オウ・サイレンス)の内に投じて鷲鳥の餌とするの風を守つてゐるが、彼等の中には今日も甚だ明敏で、且つ事業の才に長ずるものが少くない。要するに薩珊は東洋藝術界に異彩を放つもので、其の影響は東洋全體に及んでゐるばかりでなく、埃及、東羅馬は勿論、深く歐土の中にも侵入してゐるのである。

薩珊建築の遺例は甚だ少いのみならず、僅かに殘存するものも甚しく荒敗してゐる。岩壁に施された彫刻は案外に少くない。技巧精妙と云ふよりは雄渾偉大の氣魄に富んでゐる。若干の絹織物、陶磁器、金工、石工等の遺

例も既に世に知られてゐるが何れも藝術味の豊富なもので、滋味の津々として竭くる處を知らぬのである。

九 北シリア建築總説

始めマケドニアの亞歴山大王が東征して印度に入つた時、西亞の諸國は悉く其の領土になつた。大王歿後其の領土は三分せられ、其の西亞方面は大王の宿將セロイコス・ニカトルに屬した。セロイコスは始めメソポタミアのセロイキアに都したが、次の代から北シリアのアンチオキヤに遷都し、茲にシリア王國が建設されて一時隆盛を誇つたが、西曆六五年に羅馬の爲めに亡ぼされた。斯くて叙利亞は羅馬の一郡となり約三百年間無事であつたが、羅馬が東西に分裂するに及んで、叙利亞は東羅馬の領土となつたのである。然るに東方の薩珊ペルシアが東羅馬と覇を争ふに至り、叙利亞は當然其の影響を受けたのである。而して他の一面に於いては、アラビア民族の北上し來つたものが著々勢力を扶植し、叙利亞の文化は漸次に複雑となつたが、第七世紀の前半紀に至つて終に回教徒の占領するところとなり、爾來今日に至るまで回教文化の重要な地點をして繼續した。第二十世紀の初に、ハワード・グロスビー・バトラーが叙利亞の古蹟を探検して其の詳細なる報告を發表したが、それに依ると北叙利亞地方、就中ハマ、ハレブ、アンタキエ(古へのアンチオキヤ)を三點として描いた三角形の部分の内には無數の古建築の殘趾を見るが、其の年代の最古のものはアンチオキヤ朝の北叙利亞建築の斷片であり、次いで羅馬時代に入つては其の前半にはクラシック趣味に富む土地固有の墓及び祠堂の類があり、其の後半にはクラシッ

クと土地固有の様式と混合して一種のシリア式と名づくべきものを大成した遺構が多く、それは墓、基督教會堂、公私の邸館等である。而して其の最後に現はれるものは既に若干アラビア趣味を示し、サラセン建築との聯絡を暗示してゐる。バトラーは、此の珍奇なる特殊の叙利亞建築を分類して四期としてゐる。第一期は即ち第二世紀で、殆ど純然たるクラシックであり、第二期は第三世紀で、均しくクラシックでも既に著しく粗野に流れて來る。第三期は第四世紀で、基督教の勃興と共に建築も亦た一變して過渡期に入る。第四期は第五世紀で、土地固有の趣味とクラシック系の趣味の混和、即ちバトラーの所謂グレコ・シリア式の發生時代であり、第五期は第六世紀で、グレコ・シリア式大成の時代である。

元來北叙利亞建築の或る實例には既にバトラー以前に世に知られ、例へば第六世紀のカラット・シマンの建築の如きは、或はこれを初期基督教建築の中に編入したものもあり、或はこれをロマネスクの初期に加へんとするものもあり、更に或はこれをビザンチン建築の一派に擬するものもあつた。右の如く其の所屬は區々であつて、一定してをらなかつたことは、即ち最も雄辯に其の一種特別のものであることを物語るものであり、これを北シリア建築として獨立せしめんとするバトラーの提案は蓋し最も適當であると思はれる。併し其の様式の性質は、其の初期に於いては明かにクラシックの系であり、其の後期に於いては初期基督教建築とビザンチン建築との中間に位するものの如くであるから、これをグレコ・シリア式と名づくることは如何かと思ふ。寧ろ北叙利亞建築と呼ぶことが簡明であると思ふ。

地方的要素は可なり顯著である。其の材料構造に就いて見れば、第一に、此の地方は殆ど總て岩磐より成り、沃野もなく森林もなく、満目只だ磊々たる岩石と矮小なる雜草のみを見る許りであり、稀に河流に沿うて柳樹の列を見るに過ぎぬのであるから、建築は當然石から發達してをり、石壁石柱はよく研究されてゐる。大小不同の石を不規則に積むことや、切石の隅を故らに切り缺いて隣接の石と咬み合せて積むことなどは甚だ巧である。又入口の上に横に石の楣まどを冠し、其の下端を拱の形に割り取る手法が實用されてゐる。即ち拱形楣である。眞の拱を作る場合にも、拱石は必ずしも規則正しく割り付けられるのでなく、矢張り大小不正形の拱石を用ふるが、勿論其の目地の方向だけは中心に向ふのである。穹窿もよく用ひられる。四角な房室の上に半球體のドームを冠するものや、教會堂のアブスの上に半ドームを作る例は澤山ある。半筒形の穹窿も勿論多くある。オーダーにはタスカン、ドリア、イオニア、コリント何れも行はれてをり、ピザンチン型のものも少くない。其の外ピザンチンから出て更に變化した珍種も少くない。制形はクラシック型から出て粗野になつたやうなものであるが、また別に奇怪なる種類のものもある。

裝飾文様はクラシック系のものが多く、アカントスや、ハネーサックルは勿論、葡萄から草などもある。中央に花瓶を置き、其の中から草が左右均齊に出て其の中に孔雀が左右相對して配置せらるゝが如き構圖もあるが、これは波斯系と見るが適當であらう。此の外紋章類の圓盤が隨所に附けられてゐる。其の種類は幾十種に上るが、就中アッシューリアの日神即ちアースール、四乃至八稜の紋即ち星神イシュタル、太陽の略章シャマン

ユなどは古代系の信仰の符であり、十字架を種々に變形した紋章は基督教以後のものである。これ等の紋章は多くは入口の楣の上に附けられるが、悪魔を禁厭する爲めであると解せられる。要するに、北叙利亞建築は東西の交叉點として多大の興味ある特殊の建築である。

一〇 印度建築の發生と發達

印度建築とは、狹義に於いては印度の本土に發生發達せる特殊の建築を稱し、廣義に於いては、其の感化を受けてこれと同系の様式を大成したる印度以外の地方の建築を總稱するのである。

抑々印度建築の發祥地は信度河シンドの上流なる五河地方(パンジャブ)に在り、此處に不可測の太古よりインド・アールヤ民族が居住したが、此の民族の故郷は恐らくは中央亞細亞邊であらうと推定されるが、的確なる證據は無し。彼は白哲隆準にして軀幹長大、サンスクリット語を常用した者で知能も決して低級でなかつた。彼は人口の蕃殖に伴ひ、文化も漸次に進み、其の勢力は東南に發展して殊伽河ガガの流域に侵入し、終にベンガル灣に達したのである。これより先き、此の地方に住んでゐた先住民はアールヤ族の爲めに滅され、或は驅逐せられ、或は同化され、終に今や僅に其の痕跡を留むるのみである。

然るに印度半島の南部、即ち所謂デッカ高原地方には別にドラヴィダ民族が割據してゐた。此の民族は根本的にアールヤ族と相異なるもので其の系統は今以て不詳であるとせられてゐるが、いつしか北方文化の感化を受

け、終に同化した。只だ地方的色彩に於いて南北相異なるものがあるのである。

さて印度建築の發生は、一般に竹から起つたと解せられてゐる。即ち二本の竹を適當の間隔に於いて地中に突き刺して垂直に立て、それを向ひ合せて内方に曲げて相交せしむれば竹の性質上自然に尖拱が出来る。これを幾列が並べて其の上を覆へば尖形穹窿となる。即ちこれ印度拱の發生の道程であると云ふのである。現に今日に於いても、トダと稱する原住民の住居は尙ほ此の式の佛を存するのである。而して此の拱は處理の手法に依つて或は楕圓形ともなり、或は馬蹄形ともなり、無窮の變化を生ずるが、眞圓狀をなすのは其の特別なる一状態である。従つて圓拱は印度に於いては普遍的には現はれぬのである。

斯くて印度建築の入口、窓、屋根等は以上の印度拱や印度穹窿より成るが、壁體は主として壁本位であり、熱き日光を避ける爲めに其の外に廣い椽を作り、柱を以て其の屋根を支へたのであるが、其の他屋内の廣間にも賞用されてゐる。此の柱の起源は、或は古代波斯傳來と認むべきものもあり、これと關係なした草木から暗示を得て自然に發達したものと考ふべきものもあり、兩者相融和して特殊の形を大成したと解すべきものもあり、實に多種多様であるが、古代建築に在つては、其の柱頭に靈獸即ち象、獅、牛、馬、鳩等を置き、時として輪寶を載せたものもある。壁體には好んで幾何文や、から草や、男女の像を彫刻し、又は畫いたのであるが、勿論これは太古の植物建築から、漸次に發達して石造となつた後のことであり、時代を経るに従つて、それがますます濃厚煩縟となるのである。

さて此の現象を具體的に説明せんが爲めには、印度に於ける宗教を考察せねばならぬ。何となれば印度の建築の主要なるものは總て宗教建築であり、其の建築を構成する總ての道具は、悉く宗教的意義を示すものであるからである。印度宗教を離れて印度建築を説明理解することは到底不可能である。

印度に發生せる最初の宗教は即ち自然崇拜であつた。印度民族は其の偉大なる自然の現象を讚美し謳歌した、ヴェダは即ちそれである。それから更に進んで此の自然を創造した神を想像して、これを崇拜するに及んで宗教の形が出来た。ブラーフマイズム即ち梵覺摩教又は婆羅門教がそれである。此の宗教に於ける最高の神が即ちブラーフマ即ち梵天であり、宇宙を主宰する者である。次にシーヴァ即ち濕縛(大自在天)は宇宙を造り又宇宙を破壊する神であり、後には生殖の神として尊崇され今日に及んでゐる。次にヴィシヌ即ち毘濕拏は宇宙を保護する神であり、シーヴァの猛烈に對して平和の神である。シーヴァとヴィシヌは權化と稱して、幾通りにも其の姿を變へて現はし、其の又眷屬が甚だ多いので、結局多神教の形となつたのである。婆羅門教は即ち後世の印度教である。

婆羅門教が起つて幾千年の後に、これに反抗して起つたのがジャイナ(闍伊那)教である。更に後れて西暦前五六世紀の間に釋迦が出で、均しく婆羅門教に反抗して佛教を説いた。一時は甚だ隆盛であつたが、教理が高遠であつた爲めに一般に普及されず、次第に印度教化されて、西暦第八世紀には殆ど滅亡したが、印度の邊陲や後印度、支那、日本等には歡迎されて今日に及んでゐる。西暦第十一世紀から回教が侵入し、爾來印度の主要なる各

王朝が回教を奉じた爲めに、急速に發展して今日に至つたので、現今印度の人口三億有餘の中、約二億は印度教信者であり、約八千萬が回教信者である。

乃ち印度建築の根本は婆羅門教建築であり、ジャイナ教及び佛教建築は一時的若しくは附隨的のものであるとも言へるのである。曾つてファーガソンは印度建築を印度教、ジャイナ教、及び佛教の三様式に區別して、おのの其の特徴の異なることを論じたが、今やこれを信する者は無い。要するに印度建築は一つの様式を以て一貫してゐるので、宗教に依つて互に異なるのではなく、其の一貫した様式は一貫せる印度思想即ちブラーフマイズムから出てゐるのである。これはハヴェルの力説するところで、彼の説には多少の疑義もあるが、大體に於いて是認さるべきものである。

さてハヴェルの主張するところに依れば、先づ第一に印度建築の起原とする竹から出た尖拱は、其の形の蓮瓣を現はすに依つて一般に用ひられたのである。蓮は太古から印度民族の崇拜した植物である。柱も元來蓮房を戴く莖の形から出たので、古代波斯式の型は古く印度に於いて發生し、却つてこれを波斯に傳へたのである。建築の細部に用ひられる道具も皆印度思想の表徴である。輪寶や卍は終に幾何的文様にまで發展した。殆ど總てのから草は蓮から出た。其の他鐘、水瓶、欄、靈獸等も一切信仰の對照として建築に適用されたのである。以上蓮以下の諸道具は、昔は佛教に特殊のもの如く誤解されてゐたが、實は印度に於いては一般に太古から信仰されたので、佛教の専有物ではない。佛像を彫刻する技術は、西北印度に發達した健駄羅藝術から學んだといふ學說も誤りで、

實は印度人自ら創案したのである。要するに印度藝術は他の民族から傳へられて發達したのでなく、自發的に發達して、却つて他の民族に感化を及ぼしたのであると云ふのである。印度建築の外觀、其の細部、其の裝飾等が甚だ奇異である爲めに、往々其の藝術的價値を疑ふ者があるがそれは當らない。印度建築は、印度民族の熾烈なる宗教に對する信仰の具體化である。其の煩雜なる裝飾的手法の如きも、元來裝飾の目的ではなくして信仰の對象としての取扱である。例之ば彼の驚くべき壁面彫刻の如きも、印度教祠堂に於いては多くは神話を材題としたもので、ラーマヤーナ又はマハーバータが賞用され、佛教の堂塔に於いては多く本生譚や佛傳が材題とされてゐる。世の印度藝術を論ぜんと欲する者は、先づ印度民族の根本の宗教、即ちブラーフマイズムに對する心理を考察して、これを理解せねばならぬ。

一一 印度教建築總説

印度建築の根柢は、印度思想を以て一貫せられたる一元であり、宗教の種類に従つて其の建築法を異にするものではない。併し宗教の異同に依つて其の設備、其の裝飾、其の細部の特殊の手法等に異同を生ずるは當然である。印度の主要なる宗教は、内的のものに印度教、闍伊那教、佛教があり、外的のものに回教があり、兩者を折衷したるものにシク教等がある。併し印度に於いて古來最大勢力を占むるものは即ち印度教であるが故に、印度建築中最も重要なものは亦た印度教建築であると謂ふことが出来る。

印度建築の發生發達は既に概説したところであり、印度教建築も亦た他の宗教建築と均しく發生發達の道程を共にしてゐるのであるが、今日現存する印度教神祠の建築には第六世紀頃より古いものは無く、それ以前の遺構は佛教及び闍伊那教に屬するのである。これ會つて印度に於いて先づ佛教及び闍伊那教建築が發生し、遙かに後れて印度教建築が發生したと誤認された所以である。假令遺構として今日に存する印度教建築が比較的、新らしくとも、其の發生が印度の最古の時代に溯るべきは既記の如くである。

さて印度教建築が示すところの遺構に就いて觀るに、印度本土の内に三種の類を別けることが出来る。一はアールヤヴァルタ又はインド・アールヤ型と稱し、信度河及び殑伽河の流域に屬する地方に於けるもので、主としてアールヤ民族の間に行はれてゐるのである。二はチャルキア型と稱し、今のハイデラバード及びマイソール國を中心として其の附近に及ぶ地方に行はれたもので、民族は矢張りアールヤ系である。チャルキアは古の王朝の名で今は勿論絶滅してゐる。三はドラヴィダ型と稱し、今日のマドラス州全部に亘る地方に行はれてをり、其の民族は即ちドラヴィダ民族と稱する一種獨特のものである。

さて第一のアールヤヴァルタ式即ち北方印度教式の建築は、普通本殿の前に拜殿が密接して立ち、大規模のものには更に其の前に舞殿、贄殿があり、此の一群を繞つて一面乃至二面の牆壁があり、各々四方に門が開かれるが茲に最も重要な本殿の形式である。それは一般にシカーラ又はヴィマーナと稱せられ、大地から湧き出したやうな四角な塔の如き建築で、其の輪廓が外に向つて凸曲線を描きつゝ、上に至るに従つて漸次に縮小し、頂部

はアマラカと稱する扁平なる球體となり、更に其の上に若干の道具を加へて終に一點に終るのである。内部の形はほど外輪と竝行し、弧線より成る丈け高き方錐形を作してゐる。本尊は此の内に安置されるのである。

シカーラは普通の建築の如く基壇、壁體、軒、屋根等の部分を有せず、地上より尖端まで殆ど一氣呵成に同一手法を以て處理するもので、世界無比の異形を示すものである。此の形式が如何にして成立したかは古來の疑問であり、今日に於いても未だ明確に解答が與へられてをらぬ。會つてフーガソンは構造説を唱へ、内部の天井に穹窿を用ひずして、壁の水平材を少しづつ漸次に積み出し、内部の徑間を次第に減少し、終に一點に終らしめる爲めには、當然丈け高き錐形を成すと主張したが、その他これを以てスツーパー(傘塔)の變形と解せんとする説あり、別に又アッシューリアの石彫にシカーラと殆ど同様の圖様が見出さるゝので、シカーラは恐らくはアッシューリア傳來であらうと云ふ想像説もある。兎に角、其の形に一種の神祕的魅力があるのは畢竟宗教に對する熱烈なる信念の現れで、吾人の深く研究を要する問題である。

シカーラは時代の推移と共に漸く煩雜となる。始めは單純なる弧形方錐體であつたのがおひ／＼四方に第二次の方錐形の突起が附着し、更に第三次第四次の小方錐形が簇出し、終に方形體の結晶の如き奇觀を呈する。同時に表面彫刻等の手法も亦た煩雜濃雜となる。而して其の近代に屬するものの中には、シカーラの本來の意義は全然忘却され、下部は普通の建築に於けるが如き壁體となり、其の上に軒を加へ、更に其の上の方錐體の屋根を冠するので、アマラカは極端に退化したのである。

茲に注意すべきことは、印度に於ける佛教建築の構造に於いて未だ曾つてシカーラの實例を見ないことである。但しブダガヤの大塔はシカーラ類似の形であるが、元來それは創立當時の形ではなくして後世の改築にかゝるのである。然るに緬甸のカラギャウン・カン・パイヤと稱する有像の塔の上部などに、シカーラ類似、若しくは同型の手法が適用されてゐるのは注意すべき現象である。

第二のチャルキア式即ち中央部印度教建築は、其の最古の遺構も西暦第十世紀以前に溯らぬらしく、其の最新の實例も第十五世紀を降らず、其の期間が甚だ短いのみならず、其の分布の範圍も甚だ狭い。併し其の特色は可なり鮮明であり、北部の手法と大いに其の調子を異にする。其の本殿と拜殿との關係は彼此殆ど同工であるが、本殿のプランが、壁の内部に於いては大體に於いて矩形であるが、外輪に於いては星形をなすものが多いのは奇觀である。しかも此の壁體の星形のプランが、其の儘延びてシカーラの各部のプランとなるのである。シカーラは、初期の北部建築の如く地中から湧出した形でなく、明かに垂直なる壁體と直線の方錐體の屋根とが軒に依つて區別されてゐる。勿論チャルキア式の發生の根本は北部と同型であつたので、時代の推移に伴つて斯く變化し了つたのであらう。チャルキア式に特有なる他の重要な點は、其の方錐形の屋根が水平に幾段かに區劃され、明かに多層の外觀を示すものであることである。總じてチャルキア式の建築には水平線が非常に多い。柱の如き當然垂直線を以て構成さるべきものでさへ、殆ど水平の剝形を積み重ねたやうな手法に成るのが多い。建築彫刻、裝飾文様等にも特殊の癖がある。人像や動植物も北部地方の如き鷹揚にして豪宕な氣分に乏しく、甚だ煩雜

にして繊細である。神像の彫刻の中には、腰に纏へる瓔珞を彫り抜いて其の後に滑なる皮膚を露はしたものがあつた。總じて文様には細かい曲率の變化に富める曲線が多く、人目を強く刺戟するが如き感を與ふるものである。其の工作の精微にして繊巧なることは、慥かに北部地方に優るのであるが、これ畢竟土地に特産する石材の精良緻密なるが爲めである。

第三のドラヴィダ式即ち南部印度建築は現今マドラス州の域内に限られてゐるかの如くであるが、其の根本は勿論印度建築發祥地と見るべき北部地方にあつたのである。それが南方に普及されて若干地方的色彩を加味したのであるが、其の最古の實例と認められる第六世紀頃マハバリプラム(マールマレプラム)の石寶殿を見れば、それは明かに佛教の多層乃至單層の僧房と同様であり、大體に於いて同型であることを示すものである。即ちそれは中部及び北部のシカーラとは又相異なるもので、下部は柱本位と見るべき軸部の構成であり、軒以上は數層相重なつて方錐體を造り、一小ドームに終るのである。此の手法はチャルキア式と類似するが、實は其の間に混同すべからざる相異がある。それはチャルキア式は寧ろ水平的氣分であるが、ドラヴィダ式はこれに反して垂直的である。これ故にチャルキアは平面的にやゝ發達したが、立面的には發達しなかつた。ドラヴィダはこれに反して立面的に大發展を遂ぐると同時に平面的にも發展し、終に印度に於ける最大規模の建築を現出するに至つたのである。

ドラヴィダ式の神祠建築が異常の發展を遂げたのは、其の一大原因として祭神が殆ど常にシーヴァであるに依るとされてゐる。シーヴァは猛烈にして偉大なる神であり、人民はこれに對して狂的な信仰を有するのである

から、其の如何に發展すべきかは自明である。果して第八九世紀に至つては、既に秀高なる多層のシカーラを生じ、第十三四世紀のタンジョールの大神祠に於いて十六層二百尺の最大限度に達したのである。しかし爾來神祠の規模は一變したかの觀がある。境域はますます擴張され、其の周囲の牆壁はこれに應じて幾重にも増加され四方の門はますます高大となり、城内の殿廊はますます充實されたに拘らず、其の本殿は却つて退化して、また昔日の高層シカーラを現出せず、人をして本殿の所在を知るに苦しましめるに至るのである。これ或は本尊の所在を神祕にするの目的に依るのであるかも知れぬ。

細部の手法の煩瑣にして猥雑なることは、またチャルキア以上である。これも恐らくは祭神の能力の多方面にして極大より極微に亘り、通ぜざるところ無きを暗示するものか。チャルキアは繊細であるが後期ドラヴィダの如く猥雑ではなく、アールヤヴァルタは精到であるが、チャルキアの如く繊細ではない。即ち北部は比較的堅實であり、中部は繊細であり、南部は猥雑であるのは、畢竟土地の状態、殊に其の氣候の干渉に依る處が多いのであらう。結局印度教建築の三地方に於ける三様の式は、即ち濃厚なる地方的色彩で其の根本の主義に於いては一貫して相通するものがあると認められる。而して其の一貫せる精神は即ちブラーフマイズム、即ちヒンドゥーイズムでなければならぬ。此の精神はインドアールヤ民族の間に、太古から現代まで徹底し來つたのであり、他の民族にも感化を及ぼしたのである。後印度及び東印度諸島の民族は即ち其の好例であるが、我が日本民族も、佛敎を通じて間接にブラーフマイズムの感化を受けてゐることを知らねばならぬ。

一二 ガンダーラ藝術總説

ガンダーラ(健駄羅)は西北印度の一隅、信度河とカプール河の合流點附近を中心とする一小區域の地名である。ガンダーラ藝術とは、これを狹義に解すれば、此の區域の間に大夏及び大月氏國の代に榮えた藝術であるが、これを廣義に解すれば、希臘藝術と印度藝術の融合に依つて發祥した特殊の藝術及び其の亞流であり、其の區域は今のパンジャブ及び西北境州の殆ど全部を占め、西南は信度地方の大部分を包括し、西はカプール河の流域に屬する阿富汗國を掩ひ、其餘波は露領トルケスタンのアム・ダリヤ河の南方及び支那トルケスタンの殆ど全部に及んでゐる。而して其の年代は、マケドニヤの亞歴山大王の印度侵入直後から、西曆六〇〇年頃に至る期間である。今其の歴史の概略を叙すれば、亞歴山大王が印度のパンジャブを蹂躪して西歸した後、希臘人がアム・ダリヤの上流南岸の地から阿富汗國の北部邊までの間に殖民してバクトリヤ國を建てた。漢史の所謂大夏は即ちこれである。大夏は其の後印度のパンジャブに入り、更に進んでヤムナ河の西岸の邊まで進出し、西曆前一七〇年頃、エウクラチデスは都をタキシラ(大唐西域記の且叉始羅)に定めて國威を揮つた。所謂インド・バクトリヤ王國が即ちこれである。然るにこれより先き漢の塞北に居つた大月氏が匈奴に逐はれて西走し、葱嶺を越えて今の露領トルケスタンに逃げ込んだが、漸く勢力を得て終にバクトリヤ王國を併呑したのである。元來大月氏には五つの部族があつたが、其の中の貴霜族が最も優勢で他の諸族を壓服し、終に貴霜朝の大月氏國を建てたのが西曆第一世

紀の頃である。貴霜朝の諸王の中で最も有名なのは即ち迦膩色迦王^{カニシカ}で、中印度の亞育王と併び稱せられた人であり、殊に佛教を篤信し、多數の伽藍や佛塔を作つた。王都は今へのシャワルで、當時はプロシャプラと呼ばれ、其の領土は最大限度に達したのである。其の後國威の衰ふるに乘じ、北方の嚙唎^{クラリット}が來り侵して大月氏國は殆ど破壊された。それは西曆四五〇年頃である。其の後中印度に戒日王(西曆六〇〇年頃)起り、嚙唎を國外に驅逐すると同時に、大月氏をも亦たこれを擊退した。斯くて大月氏は完全に滅亡したのである。

以上の歴史に徴して、インド・バクトリヤ及び大月氏の藝術の性質を考ふことが出来るが、只だインド・バクトリヤ時代の遺物が極めて少く、僅かに貨幣等に依つて其の希臘系の文化を保つてゐたことを推知するのである。これに反して大月氏時代の遺物は甚だ豊富であり、現今尙ほ各地方の探検や發掘に依つて續々新しい發見が世に紹介されつゝある。吾人が普通、ガンダーラ藝術と稱するものは即ち此の種のものである。

さて大月氏藝術即ちガンダーラ藝術の性質を見るに、其の建築に於いても彫刻に於いても、其の年代の古きに從つて、クラシック趣味が濃厚であり、年代の新しきに從つて印度趣味が著しくなり行くのである。別に又羅馬乃至東羅馬趣味の可なり鮮明なるを見ると同時に、古代波斯及び薩珊波斯^{ササン}の趣味の明かに潜在するのを認めるのであり、此の意味に於いて、ガンダーラ藝術をグレコ・インディア藝術、又は希臘佛教藝術と唱ふるの一派には賛成し難い。要するに、ガンダーラ藝術は幾種の藝術の混成であり、印度、希臘、羅馬、東羅馬、大夏、安息、波斯等の元素が或は化學的に融合し、或は機械的に混合したもので、決して單純なる希臘と印度との混和に成るが

如きものでない。それは幾多の實例に依つて證明せられるのである。

建築の様式に就いてこれを見るに、ガンダーラ建築の徵すべき實例は殆ど全部佛教に屬するものである。主として伽藍と塔とであるが、其の印度式を基調とするは勿論である。印度拱、印度彫形、印度文様等は至る處に現はれるが、またクラシック式の柱頭や、オーダー類似の手法も見える。其の他柱に古代波斯系の双獸を柱頭とするものが甚だ多い。細部には又、薩珊波斯の影響らしい鋸齒狀の刳形文様や動物文様も見える。若しこれを大體より見れば、ガンダーラ建築は他の何れの地方にも見ざる特殊の性癖を現はすもので、必ずしもそれが善美とは云へぬが、歴史的には極めて意義の深いものである。只だ其の規模が餘り壯大でなく、堂々たる巨宇の存在は認められぬ。尤も迦膩色迦王が作つた雀離塔の如きは高さ四十丈と記録され、或は七百尺とも傳へられてゐるくらいで、塔に於いては相當の巨構が成就されたものと見える。

ガンダーラ藝術に於いて古來世の驚異的となつてゐるものは、其の建築に非ずして寧ろ彫刻である。今日までに發見された彫刻は實に夥しい數に上り、尙ほ續々發見されつゝあるが、それは或は佛、菩薩等の像である。或は佛傳又は本生譚を示す群像であり、或は其の材題の尙ほ確實に決定し難いものもあるが、何れも佛堂内又は佛塔の表面に刻出されたものである。其の様式は時代に從つて差があるが、大體に於いて希臘趣味の濃厚なるものは古代に屬し、印度趣味の鮮明なるものは後代に屬すと見て大差は無いと認められる。元來希臘民族は彫刻に就いて大なる趣味と手腕とを有してゐるので、大夏時代既に印度から佛教を迎へ、佛像を作つたと考へられてゐる。

る。即ち印度で佛像を作る技術は、大夏乃至大月氏から傳習したと考ふる説が一部の學者の間に信ぜられてゐる。くらゐである。さてガンダーラに於いて作つた彫像は當然多大の希臘趣味を有し、其の容貌も印度人に似ずして寧ろ希臘人の骨相を帯び、髻髪の如きも波狀を畫いた寫實的のもので、印度の如く螺髪や渦卷狀の髻は作らぬのである。著衣及び其の衣紋の手法に於いても一種の特色があつて、中印度式とは大いに其の趣を異にするが、此の餘波は支那トルケスタンから支那を貫通して我が國にまで及んでゐる。

併し、ガンダーラ彫刻は、藝術的に見て必ずしも優秀なるものとは認められぬ。勿論若干の傑作もあるが、概して洗練を缺く感があり、又雄大なる巨作もない。これ一つには、其の材料が綠泥片岩で、材質の粗軟な爲めもあると思ふ。但し、バーミアンに於いて發見された摩崖の巨像の如きは高さ百五十尺にも達するが、技巧に於いては決して精妙なものでない。結局ガンダーラ彫刻も亦た歴史的及び佛教史的價値に於いて殘されてゐるので、藝術的には世に喧傳されてゐる程の優秀なるものでは無いと思ふ。結局、これ大夏及び大月氏の民族性の然らしむるところであると思はれる。

一三 毘多朝以前の印度建築

世の印度上半期の藝術史を説くもの、往々其の太古より毘多朝に至る間を、初期と名づけて藝術發達の時代とし、毘多朝を中期と名づけて圓熟時代とし、毘多朝以後を後期と名づけて衰頹時とするが、私は此の説に賛同し

難い點がある。古代印度藝術の實例は今日のところ、亞育王以前に溯るものはこれを知らぬが、それより毘多朝の興るまで、即ち西曆第三世紀の末頃に至るまで約四百五十年、其の間に於ける遺構を検するに、或は佛教に屬するもの、或はジャイナ教に屬するもの、或は印度バクトリア系に屬すると認められるべきもの、素より多種多様であつて一律に論じ難く、其の藝術的價値に至つては更に批判の困難なるものがあるが、概して眞摯熱烈の氣魄があり、假りに其の技巧に於いて圓熟を缺くものがあるとするも、決して未熟稚拙としてこれを毘多全盛時代に劣るものとするは出来ぬと思ふのである。

印度の歴史時代は一般にシャイシュナーガー朝(西曆前六九一—三三五年)より説き起され、此の間に釋迦が現れて佛教を宣傳したのであるが、彼の在世中に創建された笈の鹿野苑精舎や祇園精舎は今や全く廢滅に歸し、近頃漸く其の遺趾の發掘に依つて其の規模が闡明されつゝあるが、それも釋迦在世當時のものではなくして遙に後世の經營に屬する。シャイシュナーガー朝に次いで起つたマウルヤ朝(西曆前三三五—一八八年)の遺跡は、第一其の首都パタリプトラ(今のパトナ)市即ち華子城の發掘に依つて、其の規模の一斑、及び其の建築に若干希臘乃至西方亞細亞の素因が含まれてゐることが闡明され、亞育王時代の銘文の存在に依つて其の年代の確認を得たる石柱や石窟の研究に依つて當時の藝術が證明され、更に傳説口碑に依つて若干の暗示を得べき資料がある。マウルヤ朝の後を受けたシュンガー朝(西曆前一八八—七六年)、又其の次のカーンヴァ朝(西曆前七六—三二年)の時代に屬するものは、石欄、石門、支提、精舎等に少からざる實例がある。次いで南方より起つて中印度に覇を唱へ

たアンドラ朝(西暦前三一年頃より第三世紀の終頃まで)に於いても支提や精舎に好個の類例がある。而してこれ等の實例は概ね今のベハル及びオリッサ州、又はナルバダ河以南の孟買州及びハイデラバード領内に在り、其の性質は印度固有の理想の上に若干の西亞の感化を加へたものと思はれるが、其の真相に至つては議論區々にして未だ解決されてをらぬ。

ジャイナ教に屬する遺物は、一はオリッサのブヴァネシュワラの郊外なるウヤダギリとカンダギリに一群の石窟建築があり、他は聯合州のマトラから發見された多數の建築の斷片と彫刻とがある。其の建築は殆ど全く佛教建築と同工であるが爲めに、往昔に於いてはこれを佛跡と認めてゐたのである。併し其の後研究に依つて、それが佛跡でないことが確認された。畢竟、ジャイナ教と佛教とは其の發祥の時代に於いて殆ど前後なく、其の教義に於いても大差がない爲めに、其の表現するところの藝術に酷似するところが在るのである。特殊の現象として、例へばジャイナ教に於いては、其の本尊が全然赤裸であり、これに屬する僧侶も古は全裸であつたので、ジャイナ教の彫刻には兎角裸形が多く、所謂舞女と俗稱せらるゝ女人像に陰部を覆はざるものが少くない。勿論此の傾向は佛教及び印度教の彫刻にも決して稀ではないのである。

マトラは謎である。其の地點は今の聯合州の西境ヤムナ河の右岸に近く、大月氏の貴霜朝の領土が最大に達した頃は、其の東境に編入されてゐたので、貴霜朝の統治下に在つた關係上、當然貴霜藝術即ち廣義の大月氏藝術、尙ほ換言すれば所謂健駄羅藝術の感化を受けてゐるべき筈である。然るにマトラ發見の建築的斷片又は彫刻を見

るに、其の確實に或は恐らくはカニシカ時代に作られたものにして、殆ど全然健駄羅趣味を有せず、却つて古代中印度固有の重厚剛健なる氣分を示してゐるのである。健駄羅藝術の盛時は一般にカニシカの頃にとせられ、カニシカは今や西暦第二世紀の前半の人と公認せらるゝに至つたが、當時の健駄羅藝術は曾つて希臘印度式又は希臘佛教式と稱せられた程、希臘的分子が明瞭に認められ、中印度の重厚に比して著しく輕敏であつた。然るに今やマトラの藝術が這の輕敏さもなく、希臘的分子も認められぬのは何故であらうか。或はマトラは貴霜朝の領土に屬してはゐるが、其の藝術は中印度式を保つて健駄羅の干渉を拒否したのであらうか。或はカニシカ時代の健駄羅藝術は既に希臘趣味から脱却したのであるか、未だ確乎たる斷案を下し難いが、私は前説を採るを妥當と信ずるのである。

マトラ藝術に就いて別に又他の見解がある。それはマトラの藝術は一種特別のもので、王舎城や華子城を中心とする笈伽下流地方の藝術とは自ら其の性質を異にし、又信度の上流地方に於ける所謂健駄羅藝術との交渉も顯著でなく、畢竟兩者の中間に位するヤムナの流域に獨立して一派をなすものであるとするのである。私は此の見解に與するものである。

斯く觀察し來ると、邇多以前の印度藝術は、それは勿論南方印度を除外してであるが、大體三つの分野に別たれることになる。第一は笈伽の下流地方を根據とする純印度式、第二はヤムナ流域を中心とするマトラ式、第三は信度の上流を占むる貴霜式である。而して純印度派は亞育王時代より發展し、西は中央印度を貫いてアラビア

海まで進出した。マトラ派は恐らくはこれよりもやゝ後れて發達し、東は笈伽の下流まで侵入したことは、鹿野苑精舎の遺跡からカニシカの彫像が発見された事實に依つて立證され、西はラジュプタナからグジャラート地方に瀰漫したやうである。貴霜派は印度バクトリヤ王國の後を承けて、南は信度地方を通過してアラビア海に出て、東は中印度の中に突進し、東北はカシユミールを越えて西藏まで竄入し、西及び北は阿當汗地方より中央亞細亞に躍進したのである。斯くして以上の三派は互に相錯綜して混合し融和し、種々なる變化を生じたものの如く、其の消息を具體的に語るものは、即ち各地方の遺物であるが、今日に於いて其の遺物の發見が尙ほ充分でない。恐らくは他年豊富なる遺物が提供されるの後、始めて諸般の疑問が解決せられて行くのであらう。

一四 毘多朝及び其の以後の印度佛教藝術

中印度の毘多朝は西曆三二〇年、チャンドラ・グプタ第一世によりて建設された。毘多種族に就いては、或は希臘バクトリヤ人の印度化せるものなりとするの説もあり、印度人はこれを異人種と認めてゐるとも云はれてゐる。然し矢張り印度アールヤ族に屬すると考ふる説が普通であると思ふ。毘多朝は其の後漸次に發展し、サムドラ・グプタ(西曆四三〇年頃)の時殆ど中印度の全部を占領し、西曆四〇〇年頃チャンドラ・グプタ第二世即ち超日王(ヴィクラマディトヤ)の時、其の領土は最大限度に達し、東はアサム、ベンゴール地方に及び、西は今のグジャラート半島に進出したが、尙ほ、南印度を征伐して其の諸國を屈服せしめた。波斯や錫蘭も其の威に恐れて朝

貢したのである。其の王都は即ち曲女城(今のカノーシ)であつた。然るに西曆五〇〇年頃、嚙唎が西北から侵入し來り、大月氏を撃破した餘勢を驅つて毘多王國を襲つたので、毘多是終に西北の地方を放棄して東南方面に轉退しなければならなかつた。毘多朝は其の後國威日に蹙り、西曆八〇〇年の頃終に滅亡したのである。

これより先き、西曆第六世紀の末頃ラジュプタナにブラバーカーラ・アウルダナなる者起り、嚙唎を撃退して西印度を奪ひ、更に中印度を占領したが、二傳してハルシャ即ち戒日王(シラハーヂトヤ)に至つて都を曲女城に奠め、佛教を興隆し文學藝術を奨勵し、國運甚だ盛大であつた。其の領土は東は恒河の河口より西北は五河州に及び、南はナルバダ河に至つたのである。唐の玄奘三藏は親しく第二世戒日王に謁して優遇を受け、歸來印度の富強を唐に傳へた。戒日王は特使を唐に遣して交を修め、唐の太宗も亦た王玄策を答使として派遣したが、此の時印度に内亂起り、爾來國勢漸く衰へ、終に諸邦分立の有様となつたが、第八世紀の初に第一回の回教軍の侵入があり、印度は混沌として暗黒時代に陥つた。爾來約二百年間印度の歴史は甚だ朦朧として詳かでない。此の暗黒を破つて印度に新らしい光明を興へたものは即ち阿當汗王マームドの印度征伐である。

戒日王亡びて佛教も共に滅亡に瀕したが、今のオリッサ地方にパーラ朝があつて、僅かに佛教の餘命を保護してゐたが、それも西曆第十二世紀限りで滅亡し、佛教は茲に全く死滅したのである。第七世紀初め玄奘が印度諸國を歴訪した時も、佛教は殆ど瀕死の状態であつたことは西域記に依つても知るのであるが、東晉の法顯が第五世紀の劈頭に來訪した時は、中印度は丁度毘多朝の盛代であつたので、佛教も未だ相當に榮えてゐたのである。

さて毘多朝時代の建築は、其の今日残存するものは殆ど全部佛教に属するものであるに依つて、當時佛教の隆盛であつたことを推知することが出来る。殊に健駄羅に生れた無著、世親の兄弟(第五世紀の初より終り頃迄の高僧)は中印度方面にも巡錫して佛教の宣傳に偉功を立ててゐる。建築の實例の主なるものは、アジャンタ、エローラ、ナールンガ等に存在するが、其の様式手法の中に最も注意すべきことは、即ち一面に於いて大月氏の希臘印度式を完全に印度化せしめ、他面に於いて所謂波斯印度式を巧に換骨して特殊の形式を作つたことである。換言すれば、毘多以前の中印度建築には若干の希臘、波斯乃至西方、亞細亞の影響の存在が認められるが毘多以後は全く其の痕を絶ち、純正なる印度特殊の様式を大成したのである。而して其の細部の手法の如きも、時と共に漸次に洗練されて精緻となり巧妙となつたが、其の代り雄渾堅實の氣魄は逆比例に減退した。世の美術史家が、毘多藝術を以て古代印度藝術の最高潮に達したものとすることは、一面に於いて理由もあるが、未だ悉くこれに賛意を表し難いのはこれが爲めである。

戒日王朝の藝術は、印度文藝の黄金時代の産物としてこれを禮讃するものも少くないが、予を以て見れば、既に墮落の域に陥つてゐる。其のアジャンタやエローラの諸建築や諸彫刻を見れば、多くは放縱に流れ嚴肅莊重の氣分が失はれてゐると思ふ。殊に注意すべきは佛教藝術の特色が著しく減退して、漸次に印度教化して行く現象である。佛教藝術と印度教藝術とは元來同根であり、其の様式手法の上に根本の差異が無いのは勿論であるが、其の精神に於いて佛教藝術は高遠にして雄健であるべく、印度教藝術はこれに比して幽晦にして神秘的であるべ

き筈であるが、西曆第七世紀以後の佛教藝術には高邁の氣分著しく失はれ、印度教的の猥雜なる分子が加はつて來るのである。

パーラ朝に至つては藝術は甚だ不振であつたらしい。建築に於いては其の實例の見るべきものを知らぬが、僅かに小さき供養塔の類がある。しかも、これ等は何れも様に依つて胡蘆を描くもので、特に獨創的努力の見るべきものは無い。彫刻に於いても同様で、多くは只だ傳統に従つて外形を作る迄で、充實した精神は感得することが出来ない。要するに印度の佛教藝術の盛衰と歩調を共にすることは勿論であり、而して佛教の盛衰は歷朝の佛教に對する信仰の如何による。マウルヤ朝に亞育王が熱烈なる信仰を佛教に捧げた結果、佛教藝術は勃如として隆興した。貴霜朝迦膩色迦王が佛教を篤信した結果、健駄羅に特殊の佛教藝術が發達した。然るに毘多以後の王朝は寧ろ波羅門教即ち後の印度教を扶助し、保護したのである。偶々諸王の中に佛教を篤信した者があつても、大勢は既に決したのである。斯くて佛教は漸次に印度教化して其の存在を失ひ、終に印度の邊陲及び外國に去つて、其の處に安住の地を求むるの運命に至つたのである。而して佛教藝術は亦た當然これに殉じたのである。

一五 緬甸建築總説

緬甸の國民は其の語系と共に所謂西藏緬甸族に屬し、其の太古の歴史は不詳であるが、中印度のアシカ王は既にソノ及びウッタラの二人を緬甸に送つて佛教を弘布せしめたと云ひ、又西曆前五〇〇年頃に婆羅門王印度よ

り來つてイラワチ河の下流に建國し、其の子孫は一はアラカンの祖と、他はシャンの爲めに亡ぼされたが、別に印度から刹帝利種の王が來て復活し、バガンに國都を作つたと云ふ。アルマの國名は蓋し婆羅門の音の轉訛なるべく、太古より印度文化の感化を受けたことは確實である。然るに其の後アショカの傳道に依つて佛教が一般に普及され、今日に至るまで國民の殆ど全部が熱心なる佛教信者である。支那との關係は、晋魏の間に驪國として知られ、唐の貞元十八年(西曆八〇二年)始めて支那に通じ、爾來屢々入貢してゐる。恐らくは其の特産物なる象牙や寶玉や、良材珍木等を獻じたのであらう。而して一面に於いて支那の文化、例へば建築の如きも若干支那の感化を受けたと想はれる。

バガン王朝は西曆第二世紀に始まるといふが、今の都市を作つたのは第三十三代のピイン・ピア王の八三九年であるといふ。西曆一二八三年蒙古の相吾答兒がバガンを陥れ、緬甸は元の領土となつたが、西曆一三六四年に至り新たにアヴァを國都とした王國が起つた。爾來幾波瀾があつて、西曆一七八三年に更にアマラプラを國都とした新王國が出來たが、西曆一八五七年に都はマンダレーに移された。西曆一八八八年英國は終に緬甸を亡ぼして其の領土とし、以て今日に至つたのである。

此の歴史から考へて、緬甸の建築が明かに前後兩期に區別されることが分る。前期は太古からバガン朝の終りまで、印度趣味の濃厚な時代であり、後期はアヴァ朝以後現代までで、印度趣味が漸く薄らぎ、一種獨特の緬甸式が大成した時代である。

前期の代表的建築はバガンの古趾に累々として立つてゐる。それは印度氣分が濃厚ではあるが、矢張り緬甸特殊の形式を備ふる佛塔や佛堂の類である。後期の實例に至つては實に夥しいもので、何人もこれを擧ぐるに勝へぬ。或る地方では、佛寺の数が民家よりも多いと謂はれてゐるからであるが、其の高級伽藍の塔や堂が黄金を以て塗られてゐるので、絢爛人目を眩するものがある。總じて近古に至つて大成したらしい緬甸の伽藍の規模は、勿論印度の古代の伽藍から暗示を得たもので、其の中心となるものは即ち巨大なる佛塔である。佛塔にも二種あり、中空にして内に舍利を藏するものをセチと云ひ、中空にして内に佛像を安ずるものをカラギ・ウン・カ・ン・パイアと云ふ。兩者は其の外形に於いても部分的手法に於いても大いに異なり、前者はほど印度のスツーパーの原型を保つてゐるが、後者は重層又は單層の佛堂の上にスツーパーから轉化した高い錐形の屋根を冠したかの趣がある。此の外に別に佛堂がある。屢々小さい多數の佛堂がある。それは多くは方形の小建築でピラミッド形の屋根を有する。これをパイアと名づけるのは、佛爺の漢音の轉訛であるといふ説もある。佛塔の前に屢々木造の多層塔の形の建築が立つが、これは塔ではなくして寧ろ拜堂の性質を有し、パイアサットと呼ばれてゐる。其の他の附屬建築又は建築的物件を擧ぐれば、伽藍には正門があり、門の左右に稀に一對の獅子が立つ、これをシンチといふ。境内に高い木桿が立ち其の絶頂に普通迦樓羅の像が立つ。桿は二本又は四本の控柱に依つて其の腰部を堅められ、控柱の頂は或は寶珠を以て裝ひ、或は二天又は四天の像を置く。桿には又上部に登り得べく足かゞりを設けたのがあり、桿の全高は數十尺に達する。タゲンチンは桿の緬甸名である。境内には又屢々鐘架又は鐘

堂がある。鐘架は普通二本の柱を建て、それに横に貫を通し、これに鐘を懸けるので、別に屋蓋ある建築を作らない。柱の頂は精巧なる寶珠を以て飾られてゐる。次に珍らしいのは傘である。傘は元來佛像の上に懸けられる天蓋と同意義であると考へられるが、茲に所謂傘は、獨立して立つ石柱の上に金屬製の傘を冠したものである。柱は比較的太く短い堅實なものであり、其の上の傘は透し文様のある精巧なものである。此の外稀に巨大なる佛像を見る。それは多くは石彫であり、降魔、成道の印を結んだ釋尊の姿で、大きき六尺乃至二丈以上のものがある。涅槃像にはベグー附近に一塊の巨岩から刻出した偉大なものがある。其の長さ約百八十尺に達し、埃及の大スフィンクスと共に世界第一の巨像と稱せられてゐる。

緬甸の僧院は實に華麗なるものである。全部チーク材を以て作り、特殊のプランと特殊の外観裝飾を有する。王宮も亦たこれと同工異曲である。總じて緬甸建築の最も特異とする點は、其の佛寺と宮殿たるに論なく、其の外観殊に屋根に濃厚繊細なる彫刻を附加し、其の尖端は針の如く細く空中に突出することである。獨り建築に於いてのみならず、凡ての美術工藝其の他の雜品に至るまで、此の傾向を有するのである。彫刻の題材は多くは龍、男女像、から草等であるが、何れも他の地方のものと同じく相異なる趣味を有する。

構造は極めて簡單であり、柱上に桁梁を架し、其の上に屋根を架けるので、普通柱頭や肘木の類を用ひない。軒は木造の場合には可なり深く突出するが、其の隅に反轉なく、屋根も殆ど總て直線である。只だ其の飾裝彫刻の運用に依つて、それに反轉があるかの如き感を生ぜしむるのである。屋根は一般に方錐形若しくは切妻であ

り、入母屋は極めて稀であり、四柱は絶対に無く、球蓋は除外例としてスツーパーに存するのみである。但し緬甸のスツーパーは後期に於いては總て鈴形となり了つたのである。

裝飾は彫刻を以て主とするが、稀に繪畫もあり、又近來玻璃の嵌裝を見る。併し藝術的に見て餘り優秀のものとは思はれない。何處か間の延びた、緊張味の無い、勁健の力に乏しいやうな感がある。此の傾向は一般に年代の下ると共に著しくなるのである。

緬甸の地方農家は甚だ興味が多い。それは我が國の神社建築と密接なる關係の有ることを暗示するものである。特に竹一式で作つた農家の如きは雅趣云ふべからざるものがある。竹の柱に竹の屋根、壁も窓も、梁も桁も、戸も床も悉く竹であるが、其の所に従つて巧に竹の使用法に變化を示してゐる。

一六 暹羅建築總説

今の暹羅國は古の漢史に、所謂扶南、林邑、占波、真臘等の諸國の一部であり、時としては其の全部を含むものである。太古より土著の蠻族が居つたが、其の後印度方面から移住した民族があり、カンボヂアから瀾滄江を溯つて内地に入り、土民を征服して其の間に混種を作つたのがクメール族であると言はれてゐる。梁書扶南傳に「徼國の混填なるもの攻めて扶南の女王柳葉を下し、これと婚して七子を生み七邑に王たり、范夔の世に四隣十餘國を併せて漸く大なり」とあるは、即ち此の消息を傳ふるものである。

其の後西藏緬甸族の一種なるタイ(自由の義)民族が北方より來つてメナム河の上流に現はれた。タイは分れて二派となり、一はメナム流域に進出してシヤムとなり、一は瀾滄の流域に轉じてラオとなつた。シヤムの方では第十四世紀に至つてプチボ Puchio なる者國を統一し、アユチアに都して強大なる王國を建てた。西曆一七七一一年に至つて一たび緬甸の爲めに亡ぼされたが、西曆一七七八年漢人鄭昭これを復興し都をバンコクに移した。西曆一七八六年には清の封冊を受けてゐる。斯くて暹羅は北方から起つて次第にメナム河を南下したので、其の故郷が元來支那の南境にあり、其の文化に影響が潜在してゐることは當然である。併し現時の建築及び諸藝術が著しく緬甸に似てゐるのは、近古以來緬甸との交渉が密接であるが爲めであり、アユチア時代の建築がカンボジア式に近似であるのは、此の地方が會つてカンボジアの領土であつた爲めである。

宗教は始め印度教が行はれてゐた。後佛教が渡來して漸次に勢力を増し、終に暹羅は最も強固なる佛教國となつて今日に至つたのである。佛教傳來に就いては、印度の功德鎧 Ghatavamsi が錫蘭から西曆四一〇年に林邑に入りて布教したのが最初であると認められてゐる。當時の林邑の領土は恐らくは今の暹羅の一部にまで及んでゐたらしい。次いで西曆四八〇年に僧鎧 Dāngarman が扶南に小乗を弘めたとある。當時の扶南は今のカンボジア及び暹羅の殆ど全部を包有する地域であつたと考へられる。次いで第六世紀の中頃眞諦 Paramita が扶南國に大乘を弘め、第七世紀の中頃に那提 Panya Udaya が眞臘國に大乘を説いた。又無著、世親の法門を奉じた義朗は支那から扶南に往つて法を勧めたといふ。斯くて暹羅には大小乗共に弘通したが、第十二世紀に至つて勢力最も

盛大となり、印度教は國外に驅逐されたのである。

暹羅建築の遺跡の探検は未だ充分に行はれてゐない。メナムの上流のスコダヤは最古の王都であるから何等かの遺跡があると想はれるが、未だ其の詳なることを知らぬ。アユチア奠都以前の遺構としては二三の實例が知られてゐるが、これは寧ろカンボジア式であり、未だ暹羅獨特の性質を備へてをらぬと言へる。アユチア時代の建築は既に世に知られてをり、カンボジア式を脱して緬甸式に近づき、而して又暹羅固有の趣味の發達を示してゐる。

暹羅建築の大多數の實例は皆バンコック以來の近代に屬するもので、宏壯偉大なるものが少くない。其の様式は今や緬甸と姉妹の關係にあるので、酷だよく似てゐる。暹羅では寺院をワット Wat と呼ぶ、ワットは元來寺域の周圍の牆壁であり、普通高さ十尺乃至十二尺、厚さ三尺ぐらゐである。此の域内に本堂が立つ、これをポート Port といふ。其のプランはやく教會堂の如き性質である。其の後に塔が立つ、これをフラ Phra としふ。フラに二種あり一をフラ・プラン Phra Phang と云ひ他をフラ・セチ Phra Ceti と云ふ。前者はピラミッド型の段層より成る壇の上に砲彈の如き形の塔を立てた姿で、塔内に内院を作り佛像を安置するもので、高い階段に依つて内院に登ることが出来る。砲彈形の塔はカンボジア傳來のもので緬甸には見當らぬが、印度のシカラと類似の輪廓を有する。後者は印度スツーパーの型で、中に舍利を封藏するので内院は無い。輪廓の圓錐狀にして鋭く尖る點は緬甸に酷似するが、暹羅塔に於いては相輪の輪の數が普通甚だ多い。

これに附屬して多數の建物がある。禮堂をカンブリエン Kambrien と云ひ、僧房をヴィハン Vihan と云ひ、鐘樓をホ・ラカン Ho-Rakhang と云ひ、經藏をホ・トライ Ho-Trai と云ひ、佛堂の四角にして立像を安置するものをモンドブ Mondob と云ひ、池をサバと云ふ。特殊のものでは王室の寺に限つて存在する十字形のプランを有する佛堂がある。名づけてチャッタムック Chattramuck と云ふ。暹羅寺院の有名な實例は、ワット・チャン、ワット・サケオ、ワット・ボ、ワット・ナ、ラーター等甚だ多し。

建築材料は、石及びチーク材であるが、僧房には木材建築が多い。其の様式は緬甸と近似であるが、暹羅に於いては切妻以外に入母屋もあり、屋根の流れが微かに曲線を描くので、緬甸より遙に支那趣味が濃厚である。屋根飾りも緬甸よりはやゝ簡單であるが、柱、窓、戸等の細部の手法は一般に緬甸よりも濃厚であると言へる。特筆して置き度い事は暹羅には夥しい支那人が移住して大勢力を有してゐるが、彼等の造る會館や廟祠の様式は支那と暹羅の折衷の如きもので、一種の奇異なる趣味を發揮してゐることである。

一七 カンボジア建築總説

カンボジア(柬埔寨)は今佛領印度支那の附庸國で、後印度に於ける最古の王國である。其の民族はクメール Khmer と云つて一種特別のものである。會つて暹羅のタイ民族と近似のものとせられたが、事實に於いて骨相、言語等凡ての點に於いて甚しい相異がある。會つて印度のパンジャブのカンボジア地方から流寓し來たつたもの

と傳へられたが、これは根據なき傳説に過ぎぬと認められてゐる。要するに其の發祥發展の経路は尙ほ確實ではない。カンボジアには西暦一三〇六年より以前には正史が無いので、古代の歴史は主として支那の文獻に依らねばならぬ。前漢武帝の時の所謂扶南國は必然今のカンボジアを包有するものであつたのである。其の後二百年にして外國の侵略するところとなり、新朝が立つたと云ふのは恐らくは印度からの殖民の渡來を謂ふので、パンジャブ傳説もこれに因るのであらう。西暦第二世紀に此の王朝の第四世の王が隣接諸國を併合して大國を建てた。第五世紀の頃に無鳴が佛教を傳へた。或は第七世紀に那提が佛教を傳へたともいふ。其の頃からカンボジアは眞臘國として支那に知られたが、支那と交通を開始したのは唐の武徳中(西暦六一八—六二六年)であるといふ。西暦一五五年には錫蘭のドラフラマ・パフーがカンボジアと交通したと云ひ、一時國威大いに振つて今の暹羅及び緬甸の地まで其の領土に歸したが、元の忽必烈の爲めに征服された。曠て復活する間もなく、タイ民族がメナムの上流から南下し來り、カンボジアはこれが爲めに脅威されて遂に國都アンコールを放棄し、西暦一三八八年にバッサンに遷都し、更に一時フノムベンに移つた。それから西暦一五二八年にロウエックに都し、一七三九年にウドンに轉じたが、西暦一七七一年に緬甸に征服され、西暦一七七八年に清朝の封冊を受けて獨立し、西暦一八六六年にフノムベンに都して今日に至つたのである。

カンボジアの古名扶南はフノム(丘の義)であらうと云はれてゐる。今日でもフノムの語を冠する都邑が多くある。眞臘の語義に就いて予は未だこれを聞かぬ。カンボジアは甘字智、激浦只、東埔、吉蔑などと音譯され、安

南では高聳と稱してゐる。其の文化の性質を考ふるに、元來クメール族の建國が甚だ古い處から考へても、既に二千年の昔に於いて相當の文化が在つたと想像されるが、此の文化を發展せしめた動機は即ち印度の感化でなければならぬ。次に支那文化の影響も亦た甚だ大なるものが無くてはならぬ。現に元の使節に隨行してカンボジアの國都アンコール・トムを訪問した周達觀(元の元貞丙申(西曆一二九六年)王城著、大德丁酉(西曆一二九八年)歸著)の眞臘風土記に、カンボジアの視察の記事が載せてあるが、其の中に當國の宗教は佛教、道教、儒教の三種であると書いてある。勿論道教、儒教と云つても支那のそれと同種ではない。恐らくは道教は印度教、儒教は當國固有の宗教であるかと想はれるが、今日殘存する寺院に就いて見れば、左右嚴正なる均齊を保つて、堂塔門廊を配置した調子は、印度の伽藍に依ると云ふよりは寧ろ支那の建築法に似てゐると云ふ方が近いやうに感ぜられるのである。其の建築の形や細部の手法にも若干支那趣味の潜在するのは争ふべからざる事實であると思ふ。

カンボジア建築に暹羅系の素因が見えるのも確實であるが、これは元來カンボジアから彼の地方に感化を與へた爲めで、暹羅から感化を受けたのでは無かつた。勿論暹羅の勃興は僅かに七百年前の事で、カンボジアの全盛時代が過ぎ去つた後の事である。勿論今日では、カンボジアは暹羅以上の不振の國であるから、他に感化を及ぼす丈けの力は無い。次にカンボジアの東隣占城國との關係に就いては甚だ密接なるものがある。これは別に占城國の部に於いて略説するが、兩民族は甚だ近似の間柄であり、其の文化はよく似てゐるのである。假令兩者は互に相攻伐を事としてをつても、其の文化はよく握手したのである。但しカンボジアは占城よりも遙かに強大であ

つた爲めに、彼に影響されたよりも彼に影響を與へた方が顯著である。これは實例に依つて明かに指摘することが出来る。尙ほ此の外に爪哇方面との關係も閑却することは出来ぬのである。

遺跡に關しては、劈頭に玉都アンコール・トムを挙げねばならぬ。これは西曆第九世紀乃至第十世紀に出來た驚くべき巨構である。次に第十二世紀に完成したアンコール・ワットは更に有名である。其他アンコールを中心として巨大なる寺院の廢墟は點々として其の附近に散在し、今や佛國政府は其の調査に忙殺され、世界の學術社會も一齊に驚異の眼を張つて注視しつゝある。今やアンコールの遺跡研究は東洋文化史第一の重要問題とさへ云はれてゐる。元來アンコールの遺跡は久しく暹羅の領域に屬し、深き森林の中に埋没して全く世人から忘れられてゐたが、西曆一八五八——一八六一年の間に佛人ミュオーの探檢に依つて發見された。西曆一八六三年佛國はカンボジアを附庸國とし、アンコールの研究に邁進したが、西曆一九〇二年に至り、斯くの如き重要な遺跡を暹羅の如き未開國の下に置くは世界の爲めに忍ぶことが出来ないといふ口實を設けて、終に其の地方一帯を暹羅から割讓せしめたのである。佛人の言行の是非はさて置き、佛人をして斯くの如き口實を設けしむるに至つたのを見ても、如何にアンコールの遺跡の重大なるかを想ふことが出来る。カンボジアの建築は大體に於いて印度的であるが、印度に於いて會つて見ざる特殊の手法がある。これはクメール族の先天的性癖に依るものと見るの外は無い。要するにカンボジア建築は極めて癖の多い建築であり、高雅の風韻に缺くところはあつたが、巨石を取扱ふ技巧、これに施された彫刻の鋭利、其の意匠の豊富、構造の堅實、一として驚異に値せざるは無い。彼は亦た土木工事に於

いても非凡の手腕を示してゐる。例へばアンコールを中心として諸方に開通せられたる幾百哩の舗装道路、其の間に當る石拱の橋梁等は今猶ほ其の殘影に依つて古の盛代を偲ぶに足る。これ等は今や佛領印度支那の河内に於ける極東學院に於いて著々探究されつゝある。他日事業完成するに至らば、カンボチア文化の真相が闡明せらるゝと同時に、世界の文化史上、特に東洋文化史上に新たなる大光明を放たんことは期して待つべきである。

一八 チャム建築總説

チャム Cham は民族の名であり、其の國土はチャムハ Champa (占波) である。其の民族は今日猶ほ徹底的に解決されてをらぬが、チャムの發祥地は恐らくは瀾滄江の河口附近から安南の南部地方であり、西隣クメール族と近似の關係があるものと解せられてゐる。西紀以前百年の頃に於いて既に今の安南、東京地方の海岸に擴がり、支那の廣西廣東兩省の一部にも進出したものらしく、周代に於いて越裳と呼ばれてゐた。裳は或はチャムの音譯ではあるまいか。秦に林邑と云ひ、漢には象林郡となつたが林邑の古音はラムアツプであり、象の古音はチャムであらう。ラムアツプ Lamp といふ地名は今も安南の北部海岸に残つてゐる。即ち西紀以前から漢代にかけてチャムの國土は支那の領土であつたのである。其の範圍は大略今のピンチン邊に及んだものと推定されてゐる。後漢以後は林邑と稱せられ、唐には南海寄歸傳に「驪州の南占波に至る、これ臨邑なり」とあるが、又占不勞又は占城と呼ばれた。元史には占八となり、又占波とも書かれた。日本との交渉は、奈良朝に林邑の佛僧が唐の鑑真

大和上と共に來朝し、林邑樂を傳へたことは周知の事であり、其の後は史實の徵すべきものを知らぬが、占城が安南の爲めに壓迫されて滅亡した江戸時代まで、日本にチャンパの名は傳へられてゐるのである。坪井九馬三博士は會つてチャム語と日本語とを比較して其の同根であることを力説し、日本民族はチャム族であると迄斷定せんとせられた。説の當否は姑く論じないが、日本とチャムとの間に何等かの密接なる關係があるのかも知れぬ。

チャムの最古の遺跡はヴォ・カン Voamh に於ける梵文の銘で、西曆第二三世紀のスリ・マール Sri-Mara 朝の時代であるといふ、以て如何に古く印度文化が此の國に渡來したかを知ることが出来る。此の頃ナ・トラン Na-Thrang (衙莊) 地方にカウ・ターラ Kai-Thara 國あり、フアン・ラン Phan-Lan 地方にパードランガ Pandrang 國起り、チャムの勢力は漸次に發展して北上し、終にトラキエウ Tra-kieu を首府とした大王國が成立して、ミン・ソン Mi-Son 及びドン・ドウオン Don-Duong の偉大なる祠市を建設した。

第十世紀に至つて東京の安南人が南出して來た爲めに、チャムは南方に退却し、新都をビン・チン Bin-Ding に築いて小時平和を保つたが、更に南方に退却の止むを得ざるに至つた。第十三世紀に元の忽必烈の壓迫を受けたが克く覆滅を免れた。然し國威頓に衰へ、明の成化中占城王は安南黎朝の爲めに亡ぼされ、明に通じて其の封冊を受けた。兩來占城は若干の餘命を保つたが、第十八世紀に至つて全く絶滅したのである。

チャムの古代藝術はカンボチアと密接の關係がある。それは民族上の近似性から當然の事であるが、兩國は絶えず戦争もし通商もしてゐたので、文化の融和は必然の勢である。併しチャムの祠堂は殆ど常に孤獨の建築であ

り、シカーラは軀造である。勿論入口及び其の他隨所に石材も混用してゐる。其の風貌は古代のものは簡明なる輪廓を有し堅實なる氣分を示すが、年代を下るに従つて柔弱となり、細部に怪奇なる手法が現はれ來り、甚だ異様な形を現はすものが出來た。

現存する遺跡に就いて考ふるにチャム建築には大別して二様ある。其の一は古代の様式で、即ちミ・ソン及びドン・ドゥオン時代に屬し、第七乃至第十世紀の間に在る。其の二はビン・チン以後のもので即ち世紀千百年から千七百年に降るのである。其の實例は今日まで發見されたもの丈けでも既に數十に上ると思ふが、尙ほおひおひと探檢されつゝある。東京河内の佛國極東學院に於いては此の方面の研究を持續し、既に若干の報告を公刊してをり、遺物の重要なものは同學院の列品室に珍藏されてゐる。

ミ・ソン時代以前に屬する重要發見はドン・ドゥオンに於ける第三四世紀の青銅の佛像で印度のアマラーヴァチ又は錫蘭のアヌラダプラのものに近似である。併しこれはチャムの作品であるとするよりも、後世印度方面から將來したものと見る方が適當であらう。元來チャムの宗教は既に西紀前から印度教が傳來したらしく、爾來連綿として榮えたが、佛敎は微弱であり、其の傳來の歴史も不明である。ドン・ドゥオンで西曆八七五年のインドラヴァルマン Indravarman の銘が發見され、それに依つて當時デヴァラーイー Devārājī の信仰の存在が立證されるが、此の王は佛敎の信者であつたらしく、西曆九〇〇年頃に佛寺を建立したが、これがチャムに於ける唯一の佛寺であると示はれるが、これは大なる疑問であると思ふ。既に林邑の佛僧は慥かに佛敎の僧であるが第

八世紀の人である。カンボヂアやジャヴァには第五六世紀に佛敎が傳來してゐるのに、獨り林邑のみ傳來しなかつたとは想へぬのである。併し、兎に角チャンパには、今日佛寺及び佛敎關係の藝術は殆ど無いと言つてもよ

いと思ふ。

要するに、チャムに關する研究は今日猶ほ甚だ不充分であり、其の建築及び諸藝術の真相は未だ闡明されてをらぬ。併し今日知られたる範圍に於いても、既に其の極東藝術の一派として重要視さるべき價値を認むるに充分である。

殊に日本の立場から見れば、チャム藝術は多大なる意義を有するものである。それは必ず日本文化に何等かの交渉を有するものでなければならぬ。

一九 ジャヴァ建築總説

亞細亞の南東、赤道の南北に亘つて羅列する大小無數の東印度諸島の中に就いて、古來優越なる文化を保ち、豊富なる史蹟の存在を誇るものは獨りジャヴァ(爪哇)あるのみである。此の不思議なる現象は恐らくは未だ徹底的に解釋されてをらぬと思ふが、兎に角ジャヴァの土地が獨り東西に長くして高山に富み、比較的適快なる氣候、豊饒なる地味が全島に普及してゐる事が其の自然的素因であることは疑を容れぬ。其の民族は此の天與の恩恵の爲めに獨り特殊の發達を遂げ、諸外國の文化は此の美しき小島に集中し來つて終に大成の域に進んだのであらう。

ジャヴァの太古の歴史は不明である。明外史爪哇傳は其の建國を前漢宣帝元康元年(西曆前六五年)にありとし羅馬のプトレマイオスは羅馬帝政時代にシリアの商人が印度から傳へたといふジャヴァの記事を紹介してゐる。併し最古の確實なる文獻は恐らくは法顯の佛國記であらうと思ふ。法顯は西曆四一四年にジャヴァを訪問したが佛國記には耶婆提と書かれてゐる。而して其の中に「外道婆羅門興盛、佛法不足言」とあるから、當時のジャヴァには未だ佛教が隆昌に至らず、印度教が盛んであつたことが明瞭である。尋いで西曆四二〇年頃功徳鎧(Gunava-man)が來て大乘佛教を弘め、西曆七一八年頃金剛智(Vajradhī)が印度から支那へ行く途中、此の島に五ヶ月滞在して密教を宣傳し、其の弟子不空(Amoghajit)は支那とジャヴァの間を往來して佛教弘布に努めた等の事實から推して、ジャヴァの文化が主として印度から傳來したことを知るのである。

然るに、茲に面白い傳説は、西曆六〇三年印度グジャラートの王が自國滅亡の豫籤を得、其の王子をして大船六艘、小船百艘に五千の國民を載せ、海外に新土を探らしめた。王子は四ヶ月の航海の後、ジャヴァに著してマタラムに上陸し、これを本國に通報したので、更に二千の國民を送つた。斯くて印度の殖民は漸次に繁殖し、ジャヴァに印度文化を布くに至つたと云ふのである。事の眞偽は姑く措き、ジャヴァの印度に負ふ處は甚大であり、國民もいつしか印度人と混血して漸次に優化したことは自明である。

支那とジャヴァとの交渉も亦た甚だ密接である。六朝時代には閩婆、唐代には訶陵と云はれて、屢々支那に朝貢してゐる。元の時征服せられて其の一半は占領されたが驍て又復活し、明以後に至つて再び支那と親交を結ん

だ。西曆一五二一年葡萄牙人始めて渡來し商權を握つたが、西曆一六一〇年和蘭の手に歸した。和蘭はジャガタラ即ち今のバタヴィアを根據地として極東に活躍し、日本とも通商を營んでゐたことは周知の事である。即ちジャヴァと日本との關係も重大である。況んや日本は既に遠い古からジャヴァと隠れたる關係があつたらしいと考ふべき理由もあるに於いてをや。

ジャヴァの宗教は、先づ太古に於いて印度教があつたと考へられる。次いで佛教が入り込み、第五六世紀頃から第十世紀頃まで榮えたやうである。其の後佛教は漸く衰へて印度教化され、第十五世紀から回教が勢力を得、今や回教が一般に普及されてゐる。政治的方面は茲に言及せぬが、其の建築遺跡の分布から見て文化の中心が二點にあることが看取される。一は島の中央部で、ヨクジャカルタ及びスラカルタ附近であり、他は島の東部スラバヤの南方一帯である。蓋し古來此の地方に強大なる王國が分立してゐた爲めである。

ジャヴァ建築の最も觀るべきものは即ち佛教建築で、當然第六七世紀頃から第十世紀頃のものに屬し、それ以後のものは印度教化してゐる。就中、プロブドルは夙に世界に喧傳されてゐる偉觀である。其の他其の東南のプランバナム、北方のチェン高原に重要な遺跡がある。東部にはケチリ、トゥンパン、バナタラン等に奇構多く、バリ島にも面白い例があるが、併しこれ等は時代が降るので純潔を失つてゐる。其の純潔なるものは即ちプロブドル及びプランバナムの諸寺で、即ちジャヴァの古代建築を代表するものである。

ジャヴァ佛教建築の性質は他の諸國の佛教建築と大いに異なるものがある。それはジャヴァに於いては多くは

小さき堂宇の排列又は低いピラミッド型の壇で、偉大なる一塊の巨宇が堂々として聳ゆると云ふが如き現象はない。建築は又彫刻本位であるとも言へる。殆ど彫刻の爲めの建築であり、建築の爲めの彫刻と見るべきものは無いと言つて差支へない。しかも其の彫刻は何れも豊満優麗で技巧の頗る妙なるものがある。蓋しジャヴァ人の骨相が多くは豊満であるが爲めであると思はれる。要するにジャヴァの佛寺建築は小堂、小塔、彫刻の集成で宛然一幅の曼陀羅を見るの感がある。此の不思議なる特色が那邊から来たかは未だ定説を聞かないが、藝術界に於ける興味ある問題でなければならぬ。

ジャヴァ建築の要素を分解して見れば、其の大部分は印度系であるが、殊に中印度のチャルキア式と一派の相通するものがあるやうである。塔の輪廓などは寧ろ錫蘭式に似てゐるのは、或は彼我の交通を暗示するものではあるまいか。併し又若干緬甸型に近い點も窺はれぬ事は無い。彫刻の上に現はれる細部を點検すれば限りなき資料が得られる。私はプロブドルの一部に於いて明かに支那型に屬する厨子の彫刻を見た。龍王、迦陵頻迦、緊那羅、迦樓羅等の形に於いてカンボジア、占城、安南、支那等と同工異曲の實例も少くない。更にジャヴァに賞用せらるゝ羅喉ラクスマの如きは殆ど安南に於けるものと同式であり、遙かに支那の饜登と何等かの聯絡のあるべきを想はしめる。

結局ジャヴァ藝術は元來印度から日本までの亞細亞大陸の南東部全體の文化の集中した產物であるが、更に回教時代に入つて極西亞細亞の文化までも攝取したのである。しかもそれがジャヴァ固有の手法に依つて特殊の趣

味が作り出されてゐる。ジャヴァの國土は小さいが其の藝術は偉大である。

二〇 安南建築總說

安南は一般に佛領印度支那と同意義に取扱はれてゐるが、實は廣義の佛領印度支那の一部である。廣義の佛領印度支那は今日政治的に五部の地方に區劃されてゐる。それは東京、安南、交趾支那、老撾及び東蒲塞で、安南は其の東部の支那海に東面する一小地區であるが、茲に所謂安南建築とは此の一區に限られた建築ではなくして所謂安南民族の有する建築を總稱するのである。

安南民族の本質及び起原に就いては尙ほ若干疑問が残されてゐるが、太古は今の南部支那に住んでゐたので、西藏緬甸族に屬すると言はれてゐる。それが漸次に漢民族に壓迫されて南遷し、今の東京から安南を経て交趾支那まで移動するに連れて、チャム族即ち占城又は占波人及び馬來人と混血し、勿論漢民族の血も混じて今日の安南人を作つたと考へられてゐる。即ち現今の安南人の分布は、北は東京より南は交趾支那に至る海岸一帯の地方で、老撾及び東蒲塞は其の範圍外である。

安南の文化は殆ど全然支那の感化に依つて發達したのである。秦の時、百粵即ち今の廣東省を中心とする地方に趙佗なるものが國を建てて南越と稱したが、今の東京地方は其の領域の中に含まれてゐた。其の後南越は漢に亡ぼされて其の領土となり、六朝時代には南朝に歸順し、隨、唐時代には其の領地であつたが、其の區域は遠く

今の安南の南境に達したのである。

五代十國の亂に漢土の壓迫が緩んだので、安南人は茲に始めて獨立して國號を大越と稱し、大磊に都して丁朝を興した。爾來黎朝、李朝、陳朝、黎朝を経て最近の阮朝に至つたが、其の間南よりは占城に攻められ、北よりは支那に威壓され、幾度の盛衰を反覆しつゝ漸次に萎縮し、交趾支那は占城の根據地であつたが、安政六年(西曆一八五九年)に佛蘭西に占領され、東京は明治十七年(西曆一八八四年)に其の保護的領土とされ、安南は明治十九年(西曆一八八六年)に保護國となつた。因みに東浦塞は文久三年(西曆一八六三年)に、老撾は明治二十六年(西曆一八九三年)に、共に佛國の保護國の名儀に於いて事實上の領土となつたのである。

以上の経過に依つて自ら明かであるが、安南の文化は殆ど全く支那的である。文字も漢字を標準とし、政治上の諸般の事物も總べて支那を模範とし、歴代の帝王の號稱、年號の制定、其他方孔の青銅錢を通貨とするところまで彼此共通である。宗教は安南固有の神があつて、固有の祠堂に祀られてゐるが、道教、儒教及び佛教も広く普及されてゐる。従つて安南の百般の美術工藝も亦た當然支那的でなければならず、建築も勿論支那系に屬せねばならぬ。

安南の建築的遺物の徵すべきは今日の調査の範圍では李朝からであると思ふ。それは李朝の國都大磊は即ち今の東京の河内カハチの西郊であるが、此處から多量の古瓦が発見されてゐる。それは平瓦、唐草瓦、瓦當、甍、蚩吻等であるが、何れも西曆第十世紀乃至第十一世紀のものと思はれ、漢土の唐末から宋に至る手法、朝鮮の高麗初期頃の趣味が深く漂つてゐる。

期頃の趣味が深く漂つてゐる。

建築物の遺例の古いものは不幸にして未だ知らぬが、今日知られたるところでは恐らくは四五百年以上に遡るものは無いと思ふ。それは安南建築は特殊の塔の如きものを除けば他は總て木造であり、腐朽、火災の外に害蟲の禍が甚しいからであらう。勿論支那と同じく輒も混用されるが、木材の豊富なるが爲めに當然木材本位となるのである。即ち其の反り返る軒先及び棟、彎曲せる屋根の線、怪奇極まる裝飾的手法及び文様等著々として一支那的の型を出でない。只だ色彩の處理に於いては支那の如き絢爛さと大膽さを缺いてゐる。

斯くの如く大體に於いて支那的であるが、此處にまた安南獨特の性癖があつて、何人もこれを直感するに難くない。其の第一は建築の調子が多くは何處か莊重を缺き、引き締つた氣分に乏しく、洗練の妙技が示されてをらぬことである。安南には巍々堂々たる巨宇は無い。國が狭少貧弱の爲めであらうが、安南人の氣魄の乏しいことが第一の原因であらう。堅實剛健の觀を呈する建築も稀であり、眞摯純朴なる氣分の建築も少ない。多くは怪奇にして淺薄であり、猥雜にして薄弱である。これは恐らくは安南人の性質を遺憾なく暴露したものであらうと思ふ。

併しながら安南建築は必ずしも悉く劣悪ではない。往々頗る觀るべきものがあるが、それは大體に於いて年代の古いものであり、此の點に於いても支那と歩調を共にしてゐる。尙ほ安南建築の特色として擧ぐべきは、其の近代に屬するもの内には、往々著しく歐風氣分の現はれてゐることや、細部の裝飾的物件に往々爪哇又は占波、

東埔寨等の影響と覺しきものゝあることや、屋根飾が支那よりも一層煩雜突飛であることなどである。構造に關しても支那に於いて會つて見ない奇異な方法が木材の構架に見える。

要するに安南建築は支那建築の一派であるが、其の民族性と、南洋及び印度系の若干の影響の爲めに、自ら地方的色彩を作つたものである。其の實例に依つてこれを觀れば、比較的優秀と認むべきものが少くないが、尙ほ幾多の獨創的な試みもあり、それがよく成功したのもあつて、必ずしも悉く貶黜し去るべきものでない。否、自今大いにこれを研究して見たならば或は意外なる傑作を發見し得るかも知れぬ。少くとも其の古代建築に於いて此の望は充分であると思ふ。

二二 西藏建築總説

西藏は古來世界の謎の國とも云はれ、祕密國とも稱せられ、其の國情の真相は多く世に知られなかつたのであるが、今や諸國の探検家や各方面の學者の研究に因つて、其の秘庫は漸く發かれつゝある。抑々西藏は夙に吐蕃の名に於いて漢史に現はれ、殊に五胡十六國の亂に當りては、符秦及び姚秦として中國に活躍し符堅の如きは黃河流域の全部を占領したのである。唐に至つて太宗は、其の女文成公主を西藏國王双贊甘普に嫁してこれが懷柔を圖つたが、文成公は能く國王を誘導して唐の文化に浴せしめたと言はれてゐる。双贊甘普はまた涅波羅國の公主を娶つたが、此の公主は印度文化を西藏に宣傳したと傳へられてゐる。斯くて西藏は支那印度兩系の文化を攝取

して國運大いに揚り、佛教と印度教とを自國固有の宗教に加味して茲に喇嘛教を創めたといふが、實は喇嘛教の根源は遼遠なる古代に於いて既に發祥してゐたのであるといふ。西藏に於ける支那印度文化の影響の外に別に第三の原動力のあることを見逃してはならぬ。それは健駄羅からカンジュミールを通過し、ラダークから信度河を廻つて西藏高原に達した一派であり、其の證跡は歴々として徴すべきものがある。斯くて西藏藝術は相當の複雑性を有するのである。要するに西藏藝術は即ち喇嘛教藝術であり、喇嘛教の在る處即ち西藏藝術がある。元の忽必烈は西藏の巴思八を國師として文教を托した結果、元は喇嘛教を以て國教とし、元の勢力の及ぶところ喇嘛教の影響を見るに至つた。巴思八は元の爲めに新たに蒙古文字を創作したが、これも西藏文字の變態である。明の中央に至り、西藏に宋客巴なる者出で、墮落せる喇嘛教を振興する爲め黃教を立てた。既往の喇嘛教はこれに對して紅教といふが、これは萎微振はず、黃教獨り隆盛を極めて今日に至つたのである。西藏は祭政一致の國であり、教主は同時に國王であり、主權者である。其の最高の教主は噶喇嘛であり、ラハサを首都として前藏を統治し、これに次ぐものは班禪喇嘛で、札什倫布を首府として後藏を統治し來つたのである。

喇嘛教の分布は西藏を本場として青海、新疆、蒙古、滿洲、支那本部を蔽ひ、更に西伯利亞及び露西亞の一部に侵入してゐる。印度方面はラダーク地方、涅波羅、シッキム、ブータン等のヒマラヤ地方の邦土、及びアッサムの一部にも行はれてゐる。此の廣大なる地方に於ける喇嘛教の建築は、何れも西藏式に屬するものである。假令地方に依つて若干其の趣を異にするとも、其の間に一貫した喇嘛教的約束が現はされてゐるのである。

西藏固有の建築は、其の四隣諸邦の建築とは全く異なりたる特殊のものである。普通の重要建築は何れも輒又は石を以て外壁を築き、其の輪廓は宛も現代の能率及び構造を本位とせるビルディングの如く、直線を以て限られたる立方體で、屋根も水平であり、壁面に單純なる直角形の窓と入口を穿つのである。而して伽藍宮殿の如き大建築に於いては、山腹の傾斜面に倚りて數層の高層建築の姿を現はし、壁面は垂直に非ずして往々微妙なる曲線を描いて上部に縮小し、其の風貌若干埃及建築に似たるものがある。而して支那文化攝取以後の大建築には往々其の主殿の屋根に純然たる支那式を復寫するものがある。細部には木造が慣用されるが、其の柱頭以上の手法は大いに注目すべきものがある。それは支那、印度、西藏三系の融和に成るものと解すべきものであるが、第一に其の大斗の斗切りは支那式の凹曲線ではなくして、寧ろビザンチン式を想はしむる凸曲線である。大斗の上部も普通支那式の料栱の制に據らずして、寧ろ印度式乃至西亞式に近い繪様肘木を賞用する。それより軒に至る迄の手法も支那式に似て支那式に非ず、寧ろ秦西クラシック式の變態と見るべき理由がある。それは彼のアーキトレイブやフリーズに比すべき横帯の上に、齒形帯に比すべき短い垂木の列があり、而して更に其の上に支那系の二重垂木が加へられるのである。其の手法は支那内地の喇嘛教建築に殆ど常に見るところである。

西藏の塔も全く他の地方に特例が無い。それは勿論印度のストゥーパから變化したのであるが、只著しくこれと異なるは、其の塔身が半球體に非ずして必ず常に其の肩部に於いて廣く、其の底部に於いて縮小することである。相輪にも特色があるが、それは多くは頂部に傘蓋を冠するのであり、傘蓋の上に更に小さき塔様の寶頂を置くことである。此の種の塔の重要なものは、寧ろ支那内地に多くして却つて西藏の本土に尠いのである。涅槃羅に於ける塔は別に又異なりたる條件を有する。

西藏の彫刻繪畫にも著しい特色がある。それは主として喇嘛教の教義に由る爲めであるが、常に何處にか一種の神秘的な晦さと、魔性とが、潜在するが如き感を與ふるのである。其の調子は全體に於いて支那式に近似である。元來西藏民族は廣義の蒙古族に屬し、其の容貌、言語等に於いても支那民族と近似の間に在るので、西藏藝術を支那系の裡に編入することは不當ではないが、一面から見ればこれを印度系の一部に加ふるも毫も不合理では無いのである。

東洋建築史概説終

印度建築史

印度建築史

緒言

印度建築とは印度に特發したる建築及び其の感化を受けて發達したる各地方の建築の總稱で、其の範圍は前後印度(安南を除外して)及び南洋諸島の一部を包括し、面積約四十萬方里、人口約三億七千萬に達する領域を有する東洋の一大建築系統である。

土地の斯くの如く廣大なる上に、民族の複雑、歴史の錯綜、宗教の多岐、文獻の難解、探檢の不便等の故障があつて、其の研究は甚だ容易でなく、今日猶ほ其の途上に彷徨して未だ完成されてゐない。従つて建築史家の所見も區々にして一定しないものがある。兎に角印度建築に關する最初の調査は、蓋しジェネラル・カンニングハム G. Cunningham 及びリウテナント・コール L. Cole によつて開始されたが、其の成績は今日から見れば甚だ不完全であり、年代の考定にも随分誤謬があるとせられてゐる。

ジェームズ・ファーガソン J. Ferguson は更にこれに一步を進めたが、往々甚しく獨斷的に陥り、却つて真相を誤つた點が少くないとせられてゐる。ヴィンセント・スミス V. Smith はファーガソンの足らざるを補

ひ、誤れるを正し、其の成績は頗る顯著であるが、まだく完璧の域には達してをらぬ。最近ハヴェル氏 E. B. Havell は、全然新しい見地から出發して研究を進め、創見の敬服すべきものがあるが、往々牽強に奔るの嫌ひがあるとせられてゐる。

此の外印度人の研究では、曩に有名なるラージェンドラ・ラーラー・ミトラ Rajendra Lal Mitra の數多の有益なる著作があり、ラーム・ラーツ Ram Raz の適切なる論文があり、最近クーマラ・スワミ Kumara Swami の重要な論著もあつて、印度建築史は印度藝術史及び文化史と相伴つて漸次に進歩しつつある。

併し以上諸家の所見は必ずしも一致してゐない。即ち建築の發生及び發達の學說、建築の史的分類、建築の史的及び藝術的價值等の問題に就いて、諸家の間に随分大なる距離があり、人をして其の適從するところを知らざらしめる。予輩は茲に諸家の説を参考し、自ら實地を踏査して見聞するところに據り、差し當り最も適當と思ふところを略述するのである。勿論限ある紙上に委曲を竭すことは出来ない。出來得る丈け簡単に、しかも要領を失はざらんとする予輩の微意を諒せられんことを希望する。

第一章 總論

第一節 國土

印度建築の發祥地は前印度の信度河 *Sind* の流域即ち五河地方 *Punjab* であり、それから恒河 *Ganga* の流域に擴がり、漸次に南方に瀰漫し、更に後印度及び南洋に波及したのである。

そもく前印度の地形たるや、亞細亞の南部に三角形の大半島をなして印度洋中に突出してをり、北はヒマラヤ *Himalaya* の峻嶺を以て中央亞細亞から遮斷され、西はアフガニスタン *Afghanistan* 及びバルチスタン *Baluchistan* の荒漠たる曠土を以て西部亞細亞から隔離され、東は無數の竝行せる峻岳と深谿とを以て支那領との交通が杜絶されてゐた。即ち印度には、印度固有の文化が特發すべき状態にある。而して此の大三角形の印度は、其の地理的狀態が自ら三區に分れる。第一は北方ヒマラヤ地方で、こゝは氣候溫和にし森林が鬱蒼として茂り、山紫水明の風光に富んでゐる。第二はヒンドスタン *Hindustan* の大平野で、東に恒河、西に信度、其の灌漑の及ぶところ土地豊饒にして物資は富裕であり、氣候は暑いが必ずしも酷烈でない。従つて印度の文化は此の地に於いて發達したのである。第三は南方デッカ *Deccan* 高地で、こゝは物資に乏しくはないが何分氣候が酷熱で、氣温の最高記録が華氏の百八十七度に達するのを見ても、それが國民心理上に如何なる影響を與ふるかを思はしめる。要するに印度の土地は北に世界最高のヒマラヤが永久の雪を頂き、南には焼け切つたデッカ高原が火の如き陽光を吐き、中央には二千哩の大平野が世界屈指の兩巨江によつて貫流され、其の自然物は熱帯固有の偉大珍奇なもののみである。斯くの如き土地に發生すべき建築及び藝術は、當然甚しく特殊のものでなければならぬ。それが特殊の民族の特殊の宗教と相關聯して、茲に特殊なる印度建築を成就するのである。

第二節 民族及び歴史

印度には元來幾種の先住民が有史以前から住居してゐた。然るに西暦前二千年頃、優越なるアーリヤ Arya 民族が中央亞細亞から五河地方に移住してこゝに建國し、先住民は漸次に滅亡して今は僅かに其の餘命をするのである。アーリヤ民族はそれから恒河流域を占有し、更に其の勢力を各地方に擴張したが、南方には別にドラウヰダ Dravida 民族が割據してゐた。これはアーリヤ族とは根本的に違ふので、其の系統は猶ほ不明とされてゐる。此の外ヒマラヤ地方にはモンゴル系の民族も居り、これを細別すれば數十の民族が互に言語、風俗、慣習を異にして混住してゐるので、事は甚だ複雑である。併し印度文化の創建者はアーリヤ族であり、印度の文化史は主としてアーリヤ族の文化史である。次に極めて簡単に其の一般歴史を叙して見よう。

印度有史以前の状態は不明であるが、プラーナ Purana の所載や、ラーマーヤナ Ramayana 及びマハーバーラータ Mahabharata の史詩等に依つて、ほど當時の有様を想像することが出来る。ヒンドスタンの平野には太古から幾多の王國が分立して永い間に覇を争つてゐたらしく見えるが、摩揭陀國 Magada が王舎城 Rajagaha (今のビハル及びオリッサ州ラジギール村) に據つて覇を稱へた時から、始めて有史時代に入るとせられてゐるのである。

其の最初の王朝をシャイシ・ナーガ Sisunaga 朝と云ふ(西暦前六九一—三二五)。釋迦が迦毘羅衛 Kapilavastu に生れ佛教を創めたのは此の時である。釋迦の年代は不明であるが今日の學者は西暦前五百六十五年—四百八

十五年の説を取るものが多い。此の王朝に次いで起つたのがマウルヤ朝 Maurya (孔雀王朝、西暦前三二五—一八八)で、首府は華子城 Pataliputra (今のビハル及びオリッサ州バトナ市)であつた。開祖はチャンドラグプタ Chandragupta 王で、叙利亞王國のセレウコス・ニカトル Seleucos Nicator と結び、其の女を納れて妃としたからであるから、希臘と印度との文化の交換が盛に行はれたことは自明である。セレウコスは歴山大王の宿將であり大王が印度征伐から歸途病歿した後、大王の領土中亞細亞に屬する部分を領有したのである。チャンドラグプタの孫は即ち有名なるアシカ王 Ashoka (亞輪迦王、亞育王、無憂王、西暦前二七二—二三六)で、佛教を興隆し八萬四千の寶塔を作り、傳道使を印度及び隣接諸國は勿論、更に遠く西亞諸國及び埃及にまでも派遣したことは特筆すべき事蹟である。マウルヤ朝に次いでシユンガ朝 Sunga 朝(西暦前一八八—七六)が起り、其の次はカーンヴァ Kanva 朝(西暦前七六—三一)が来るが、此の間に重大なる事蹟はない。

次にアンドラ Andhra 朝(西暦前三一—後三〇〇頃)が南方から起つて中原を平定したが、グプタ Gupta 朝(西暦三〇〇頃—五〇〇頃)が更にこれに取つて代つた。これより先き西北印度に歴史上最も興味ある舞臺が開演された。それは歴山大王の印度征伐の結果として、彼の馬蹄に蹂躪した其の跡に、今のトルケスタン Turkestan アフガニスタン及び印度の五河地方を併合せる地方に希臘人の創建せるバクトリア Bactria (大夏國)王國が出現した。然るに支那内地にゐた大月氏が匈奴に逐はれて大夏に入り、終に西暦五十年頃にこれを領有した。大月氏は貴霜朝 Kushana に有名なるカニシユカ Kanishka (迦膩色迦、西暦第一世紀乃至第二世紀)が出て佛教を篤信し盛に

堂塔を建立した。其の首府布樓沙補羅 Prashapura (今の西北境州、ハシヤツル市)に高さ四十丈の佛塔を起したことは顯著である。斯くて大月氏は一時勢力強大であつたが、中印度のグプタ朝の爲めに壓迫され、終に印度から驅逐され、更に西暦五百年頃嚙嚙の爲めに亡ぼされた。大月氏の藝術は、其の地方の名に依つて健駄羅 Gandhara 藝術と稱せられ、泰西クラシック藝術と印度藝術の融合に成るものとして特に重要視されてゐる。

中印度ではグプタ朝の衰亡と共に國內大いに亂れたが戒日王朝起つてこれを平定し、西暦第七世紀は印度全盛の時代と稱せられたが、第八世紀の始めに回教徒侵入し來り、それより國內また亂れて終に二百年に亘る暗黒時代となつた。暗黒時代は再度の回教徒の侵入に依つて破られた。それはアフガン國のガズニ (鶴那悉 Gazni) に君臨してゐたマームド Mahmud 第十一世の初めに印度に攻め入り、五河地方を占領して德里 Delhi を首府とし、印度回教國を建設した爲めである。爾來北印度は連綿として回教王朝の興亡の歴史となり、其の藝術も亦た所謂印度回教式となつたのである。併し舊來の印度固有の藝術は決して滅亡したのではない。佛敎藝術は事實に於いて印度から驅逐された觀があるが、國民大多數の信仰は依然として印度開闢以來の印度敎に集中せられ、其の勢力は牢として抜くべからざるものがあり、此の外闍伊那敎 Jainism も若干の勢力を保つてゐるので、回教以後の印度藝術も、其の根柢は依然として古代印度の傳統を失はぬのである。

要するに印度の歴史は上下五千年頗る複雑である。其の間未だ嘗つて全土が一君主の下に統一されたことは無い。それは第一に地理の關係、第二に民族關係、第三に宗教關係、第四に競争者の勢力關係の爲めである。従つ

て印度建築も亦た古來一の様式に統一されたことは無い。紛々として混亂の間に始終してゐるところが即ち印度建築史の難解であると同時に興味多き所以である。

本篇に説くところは佛敎、闍伊那敎、印度敎に屬する純印度系の諸建築のみであり、印度回教に屬する建築は、假令それが純回教式に非ずして、印度式を根柢とする回教式であるにもせよ、便宜上これを回教建築の部に編入するのである。さて佛敎、闍伊那敎、印度敎の建築を叙述するが爲めには、前提の意味に於いて茲に印度の宗教に就いて一言するの必要がある。

第三節 宗教

アールヤ民族の印度に移住するや、其の大自然の雄偉なるに驚歎し頌讚の念を禁ずること能はず、天地日月星辰山川草木禽獸等を神格化して謳歌したが、それが現はれて吠陀 Veda となり、ウパニシヤッド Upanisad の聖典となり、終に宗教の形となつたのが即ち梵覽摩敎 Brahmanism である。然るに西紀前六世紀に釋迦が出て、梵覽摩敎即ち婆羅門敎に反抗して創建した佛敎が亞育王に依つて大いに宣傳され、終に近隣諸國に弘布されたが、元來深遠なる哲理を含むので、一般國民には解せられぬ傾きがあり、いつしか婆羅門敎に壓倒され、西紀第七世紀の前半に唐の玄奘三藏が五天竺を周遊した頃には、佛敎は殆ど廢滅したかの觀があつた。其の後印度は所謂暗黒時代に入つて、佛敎は殆ど印度の本土に影を止めず、只だ僅かにオリ、サハラ Sahara 地方のパーラ Pala 朝に於いて

第十二世紀頃まで餘喘を保つてゐた。

閩伊那教は佛教よりやゝ先に現はれた。其の教義は佛教と酷似するところがあるが、其の本尊ジナ「Jina」又はチルタンカラ「Tirthankara」は全然赤裸々の姿であり、これに仕へる僧徒も亦た赤裸であるので、佛教徒はこれを裸形外道と唱へてゐた。閩伊那教は主としてグジャラート Gujarat 地方に榮え、其の他各地方にも散布され、一時は隆盛であつたが、今日は餘り揮はない。信者の數も或は三百萬と稱し或は四五百萬とも云ふやうである。

婆羅門教は、佛教閩伊那教が反抗して起つたので、これと對抗すべく陣容を整へて一大宗教の形を大成した。即ち印度教 Hinduism である。要するに印度教と婆羅門教は實質に於いて同じであると云へる。其の教義に従へば宇宙の間に三體の最高神があるとする。第一を梵天即ち梵天 Brahma と云ひ、宇宙を統御する最高神である。第二を濕縛 Siva と云ひ、世界を創造し又破壊する神である。従つて或は生殖の神ともなり破壊の暴神ともなる。第三を毘濕拏 Vishnu と云ひ、世界を保育する神である。此の三神は多くは配偶の女神と共に現はれ、又幾通りにも化身として現はれる。此の外種々雑多なる神が無數にあつてこれを説くことは容易でない。佛教も後世印度教化され、多數の印度教の神が佛教の中に同化された。今日の印度教は濕縛教が最も多く、毘濕拏教これに次ぎ、總信徒の數は印度の人口の三分の二、即ち二億に達すると云はれてゐる。此の外にシク Sikh 教と云ふのがある。回教と印度教の折衷のやうなものであるが餘り重要でない。

要するに印度に於ける宗教は始めに佛教、閩伊那教、印度教あり、後に回教があるが、前三教は畢竟同根より生

じた異種で、其の藝術の性質も根本に於いて同じである。即ちフーガッソンが三教の建築様式に區別を立てて論じたのは無理である。これを大局から見れば三教の建築様式は唯一である。それは即ち一括して印度式と名づくべきものでなければならぬ。

第四節 建築の發生と發達

此の印度特殊の建築が如何にして發生し發達したかは、難解であると同時に極めて興味多き問題である。今日一般に行はれてゐる學說に従へば、印度建築の起原は竹の構架に始まると云ふ。勿論これは中印度、殊に恒河の下流、多く竹を産する地方に就いて合理的であるが、印度各地方の各種類の建築が悉くこれから出たと解するは無理である。即ち同時はハヴェル氏の進起原說等種々なる學說の生ずる所以であるが、一面竹起原說にも亦た人をして首肯せしむるに足るべき根據は充分ある。

今若し二本のほど同大の竹を適當の間隔に地中に差込み、其の末端を取つて互に内側に向つて彎曲せしむれば兩幹一點に相交叉して尖拱を作る(第七一八圖)。即ち繩を以て其の交叉點を緊結し、同じ手法を幾個か繰り返して縦に駢列し、母屋及び棟を架し、草を以てこれを覆へば、即ち我が國の原始的建築なる天地根元宮造と同型の小屋が出来るのである。斯くの如き原始的建築は、今日も猶ほ印度先住民なるトダ Toda 族の間に見ることが出来る。

所謂印度式尖拱と稱するものは斯くの如くにして發生したと解せられ、拱のやゝ馬蹄形をなすものは、屋根の重量の爲めに竹が壓下されて、しかも其の底部が土地に固定してゐる爲めに其の地點が動き得ないので、當然馬蹄形になると解せられるのである(第七一九圖)。要するに印度建築の主要なる外觀は拱であるが、其の拱の曲線の性質は、竹の如き弾力のある材料の彎曲によりてのみ實現さるべきものであると解せられる。

此の原始的拱が漸次に發達し、石造となるに従つて、其の輪廓も變化され、おひ／＼轉々して種々なる拱も出來、又これに伴つて球蓋も穹窿も當然發生しなければならぬ筈である。

ハヴェル氏は竹起原説を否認するのではないが、別に印度拱の起原として蓮及び菩提樹葉説を唱へてゐる。彼の説によれば、印度に於いては太古から蓮に對する信仰があつた、蓮は泥より出で濁りに染まず、一莖一花の節を守り、其の色は紅白の花に緑の葉、此の清き三色は即ち梵覺摩、濕縛、毘濕拏の三位を表す。此の神聖なる蓮の華瓣の形が印度思想の象徴として拱の形に用ひられた、これが即ち尖拱である。圓い形の拱は蓮葉から出たのである。上部に鋭く尖つた拱は菩提樹の葉から出たので、これも印度思想を現はすものである。要するに印度の拱は宗教的思想の表現であつて構造的必要から起つたのでは無い。其の證據には、印度の拱は拱石を放射狀に積み重ねて、いつも水平材を拱の形に積み重ねる。即ち拱は形の爲めの拱で、構造の爲めの拱ではない。佛像の背にある背光の形は即ちこれを雄辯に説明するものである。後世印度に種々多様の拱が發達したが、畢竟其の根本は茲に在る。

印度建築の柱も全く特殊のものであるが、ハヴェル氏はこれも蓮から發生したと説く(第七二〇圖甲・乙)。併しこれも俄に首肯し難い。現に印度に現存する最古の柱には、所謂波斯型と云つて、柱頭に背合せの二頭の獸形を載せ其の下に鐘形の部分をつける(第七二二圖)。これは古代波斯のヘルセポリス Pasargadae や Susa の遺構に見る處と同工異曲で、これを年代の上から考へても、波斯傳來と認めることが至當のやうに思はれるが、ハヴェル氏はこれを否定し、却つて波斯型なるものは元來印度から出たものであると逆襲を試みてゐる。勿論印度に於いて古來靈獸を建築や彫刻に實用するの風があり、殊に象、獅、馬、牛、鳩は五靈として尊重されてをり、鐘は一種の宗教的靈器とせられ、柱礎の蓮は勿論宗教の表徴であるから、波斯型の柱が印度に特發したと考へるのは一理あるが、古代波斯の柱は西曆前六世紀から實例を示してゐるに拘らず、印度の同系のもは前二世紀の實例よりも古いものが無い。今後印度に於いて前六世紀より古いものが發見されたらば、其の時始めてハヴェル氏の説が是認せらるゝのである。今日に於いては印度の柱は一部は波斯より傳來してそれが漸次に印度化せられ、一部は印度に於いて特發したのであると考へるのが合理的である。これ等の詳細に就いては後章各論の部で説明するのである。印度建築の細部の手法や裝飾の多くは實際宗教的意義を有するものである。ハヴェル氏は、佛龕の形は即ち拱で、蓮又は菩提樹の葉から發生し、建築や彫刻に到る處に見る玉垣の圖案は元來惡魔の襲來を防止する意味を有し、細部に反覆費用せらるゝ蓮、鐘、輪寶、水瓶、三叉、卍等は、人は佛教の象徴とするが、實は獨り佛教に限るのでなくして、一般の印度思想の表現であると力説してゐる(第七二三圖)。

要するに印度建築の發生は物質的よりは寧ろ精神的、即ち宗教的動機より出たものと解せられ、其の發達は宗教的信仰の發達に伴ふものと認められぬことは無い。

第五節 印度建築の特性

斯くて印度建築は殆ど徹頭徹尾宗教的である。寺院神祠は勿論、非宗教的建築と雖も亦た必ず何分の宗教的意味を有してゐる。印度神祠の建築には往々極めて空想的なる外觀を有し、細部の手法には煩雜濃厚言語に絶するものがあり、他國人から見れば殆ど常識を失つてゐるかの如きものが少なくないが、これ等は何れも宗教に對する熱狂的信仰から出たので、決して單純な表面裝飾又は建築藝術觀から出たのではない。一の彫刻も一の繪畫も一の文様も皆何等かの宗教的意義を有せぬものは無い。是の故に印度建築を批判して徒らに狼雜を極むるものとするが如きは大いに誤つてゐる。苟くも印度の宗教を解し、印度人の宗教に對する心理状態を察知するにあらざれば、即ち印度建築を了解することは出来ない。

印度建築は竹又は木から發生して漸次に石とに移つた。其の構造は主として楣式であるが拱も亦賞用した。併し拱は形の爲めの拱であつて構造の意味は無かつた。拱が構造の目的に轉用されたのは恐らくは回教渡來以後であらう。併し拱の使用と同時に穹窿及び球蓋も亦た使用されたが、勿論水平堆積の構造に由つたのである。

軸部は最初は柱本位であつたに相違ないが、漸次に壁柱兩本位の混用となつた。酷しい暑熱を遮斷する爲めに

は壁は重厚であり、窓は少く且つ小さく、従つて壁面が多くなり、壁面は斯くして彫刻や繪畫を以て取扱はるべき運命に歸した。

建築は既に太古から多層のものがあつたやうである。例之ば祇園精舎の如きも始めは七層であつて、後に五層に改造されたと云ふ傳説があり、遺物から觀ても、例之ば前二世紀のパールフト Bahut の塔の玉垣其の他の物件の表面彫刻に二層又はそれ以上と認むべき家屋の形が現はれてゐる。其の各層には必ず欄干があり、柱、窓、拱、戸、軒廻り、屋根、屋根飾等の手法まで歴々として辨じ得るのである。吾人はこれ等から推測して、古代印度建築の全豹を窺ふことは左まで困難でないと思ふ(第九八六・九八七圖)。

要するに印度建築は、其の種類例之ば佛寺、神祠、宮室、廟墓の何れに論なく、皆共通一貫の主義、一定の様式手法に成るもので、即ち印度主義 Hinduism を以て統一されてゐる。其の大體の氣分は寧ろ複雑濃厚で神秘的靈氣が漂ふが如く、埃及や西亞の直截簡明で老成なるに比して著しく異なるものがあり、希臘、羅馬の清秀典雅なるに對して全く別種の行路を取るものである。其の規模は案外に偉大なものではなく、形が外に發散せずして内に結集するが如き氣分である。廣表の大では、カンボチア Cambodia のアンコール・ワット Ankor Wat や爪哇のブロ・バドル Buro Badur、南印度のマテラ Madura 及びスリ・ランガム Sri Rangam の祠堂などが最大と稱せられ、遺趾としては中印度の那爛陀精舎や、錫蘭の摩訶毘訶羅などが有名な大伽藍であるが、これとても世界一流の大規模ではない。高さに於いても錫蘭の無畏山の塔、健駄羅のベシ・ワルの迦賦色迦の塔の四十丈と稱するも

のが最高らしく、これも未だ世界に誇る丈の數量ではない。只だ彫刻では最近佛國の印度佛教藝術史の權威フシエ A. Foucher 氏に由つて發表されたアフガニスタンのバミヤン Bamian に於ける摩崖の巨像は其の高さ五十三メートルと稱し、支那の四川省嘉定の巨像の約二百尺と共に、蓋し世界最大の作の一つであらう。

印度建築は其の物質的容積に於いては未だ世界に誇るに足らぬが、其の様式の奇異なる點に於いては世界の建築界に嶄然として異彩を放つものである。

それはおひ／＼各論に於いて説明するところであるが、世界の何處にも類似のものを求むることが出来ない。殊に其の細部の手法に至つては曩にも縷述した通り、一線一條、一事一物みな宗教的信念から出たもので、卒爾としてこれを觀れば猥雜を極めたものの如くであるが、仔細に觀察して行くに従つて其の真相が解せらるゝと共に、或る強烈なる印象を感受し、終に魅殺されずんば止まぬものがある。

印度建築の價値の大なる部分は此の點に在つて存するものと思ふ。

第二章 佛教建築

第一節 總論

佛教に就いては前章にも略述したが、教祖釋迦、本名瞿答摩・悉達多 Gautama Siddharta は中天竺の迦毘羅衛(今

涅槃羅國の南境)に生れ、十九歳にして出家し、諸處を彷徨して、難行苦行を重ねた後、尼蓮禪那河 Nairanjana で身を清め、佛陀伽耶 Buddhagaya の菩提樹の下で成道し、それから鹿野苑(今のヘナールメの北郊サルナト Barnath)で最初の説法を試み、諸所を巡錫して歩いたが、就中舍衛國 Sravasti の祇園精舍(Jetavana-Sangaraha 即ち祇多園精舍)に最も長く留まつた。其の後彼は巡錫の途次拘尸那揭羅 Kusinagara の林野の中で病歿した。彼の徒弟は釋迦の教義を敷衍し潤色して、終に一大宗教の形に仕上げたのである。

此の教義を宣傳し、教祖を禮拜する爲めに起されたものが即ち佛教建築である。即ち佛教建築は佛教が亞育王に由つて宣傳されて以來始めて大成した筈であり、其の以前には特に佛教固有の建築として見るべきものは認め難い道理である。勿論釋迦在世の時代に於いて、既に諸處に説法に必要な道場や、徒弟を收容する爲めの宿舍等が起されてはゐたが、これは未だ佛教建築と特名する迄に異彩を發揮してをらなかつたと想はねばならぬ。此の種の道場に關しては、釋迦時代以來五山即ち五個所の重要な精舍(Dangaraha 又は Vihara)が數へられてゐる。それは祇園精舍、竹林精舍、大林精舍、誓多林精舍、那爛陀精舍であると云ふ説もあり、別に異説もあるが、兎も角これが支那日本の五山の淵源である。

元來精舍の梵語 Dangaraha は僧伽藍摩と音譯されてゐるが、元來 Danga 即ち衆と Araha 即ち園の合成で、意譯すれば衆園の義である。即ち「衆徒に法を説く學園」と解すべきで、最初は露天で説法を試みたのが漸次にバラックの中で講話するやうになり、更に進歩して堂々たる永久性の堂宇を現出するやうになつたのであらう。僧

伽藍摩は略されて僧伽藍となり、更に略されて伽藍となつて今日に至つたので、元來音譯であるから文字に意味は無いのである。

昔から佛教伽藍の濫觴は祇園精舎であると云ひ傳へられ、法顯の佛國記にも其の訪問の記事があり、玄奘の大唐西域記に其の廢殘の有様が記され、又祇園精舎の圖と稱する怪しげなものも傳はつてゐる。尤も近頃現場の發掘が著手されたから、早晚往古の規模が闡明せらるゝかも知れぬが、今日のところ未だ真相は分らない。鹿野苑精舎は今過半發掘せられ、壘々たる遺趾が地下から發見されつゝある(第七三三圖)。併しそれは勿論釋迦時代のものではなくして多くは西曆六七世紀以後のものである。又那爛陀精舎の遺趾も目下發掘中で、建築物の基礎も數多發見されてゐるが、其の全豹はまだよく分らぬのである。此の精舎は第五世紀頃の創立で、玄奘三藏が訪問した時は全盛を極めてゐたので、印度初期の伽藍の規模ではない。

斯様な譯で、佛教伽藍の規模は、釋迦時代のものは勿論、其の後の時代に於けるものも未だ完全に分らない。今日分つてゐるのは其の部分的のもので、所謂悉堂伽藍の整備した規模配置等は分らない。文獻からも遺趾からも充分に突き止めるところまでは行つて居をらぬ。僅かにサーンチー Sauchi の佛跡が今日最もよく保存されてゐるに據つて、古代の伽藍の概念を得るぐらゐなものである。

序に茲にパールフートの遺跡から發見された玉垣の浮彫を紹介する(第九九六圖)。これは祇園精舎建立の緣起を現はしたものである。祇園精舎創立の由來は、舍衛國の富豪須達長者 Sudatta 即ち給孤獨 Anathapindika が釋

迦を迎ふる爲めに道場を建立せんことを思ひ立ち、舍衛國の王子祇多太子 Jeta の庭園を、其の庭園に布き詰めただけの黄金を以て購ひ、こゝに精舎を造つたので、始めは七層の巨宇であつたが後世鼠が蠟燭を銜へ出した爲めに火災を起して燒滅したので、五層に改築されたと云ふ傳説がある。圖の中央に瓶を持つて立つてゐるのが須達長者、向つて左の端に合掌してゐるのが祇多太子、其の傍の四人は從者、下に二疋の牛が今黄金を滿載した車を挽いて來て休んでゐる。牛の上には一人の男が帳簿を取扱つてゐる。牛の右の男は車から黄金を下してゐる。其の隣の男は黄金を肩にして運んでゐる。其の上の二人の男は黄金を地に布き列べてゐる。樹木が生ひ茂つてゐる間に建物が見える。此の彫刻は西曆前百八十年頃のもので、即ち釋迦滅後僅かに三百年に過ぎぬのであるから、これに由つても祇園精舎建立の傳説の確實に近いことを想はしめる。

要するに佛教伽藍の由來はほゞ上述の如くであるが、さて伽藍の規模は如何なるものであつたか、勿論前陳の如く決定的には知り難いが、幾多の遺例及び傳説から推測して、伽藍の中心は即ち塔であつたことが認められる。塔は元來梵語の Stupa の音譯である。正しくは卒堵婆、或は蘇輪婆などと書くが略して塔婆と書き、更に略して塔と書くのである。意譯しては墳と云ひ或は高顯と云ひ、其の他尙ほ色々な譯語がある。要するに塔は元來佛陀の墳である。傳説に従へば、釋迦は生前に遺言して、自分の墳墓は、下に袈裟を布き、其の上に鐵鉢を伏せ、其の上に錫杖を立てた形にせよと言つた。彼がクシナガラで涅槃に入り茶毘に附せられた後、八ヶ國の王が其の舍利を分けておのゝ自國に持ち歸り、釋迦の舍利を藏めた上に、彼の遺言に従つて墳を築いたのが塔の始で

あると云ふ。併しこれは勿論無稽の傳説で、塔は釋迦に始つた譯ではなく、太古から印度に發達した墳墓の型であるに相違ない。又其の型の約束は如何なる意味があるかは、猶ほ疑問の存するところであるが、今日多く信ぜられる學説は次の如くである。

今普通の古代の塔(第七二四圖)を見るに、其のプランは圓形であり、下に數段の壇がある、これを基壇と名づける。これは供養の際に僧徒が列を作つて此の段を繞る爲めであると云ふ。壇の上にほゞ半球體の墳が築かれる、此の中に舍利が藏せられるので、此の部分を塔身と名づける。其の上に、塔身の頂に四角な盤即ち露盤を置き、中心に棒を立て、これに幾層かの傘形の圓蓋が装はれる。盤以上を相輪と名づけるが、梵名 *Usha* でこれを音譯して刹とも擦とも云ふ。傘蓋は元來帝王或は高貴の人を保護する爲めに其の頭上に捧げられる物であるが、茲では佛舍利を保護する意味に於いて、しかも特に篤く保護するが爲めに幾層を重ねるのである。斯くて塔の形が必然に一種の約束に従つて出来るのであるが、ハヴェル氏は塔身の半球體は即ち一般建築の球蓋と同じ起原から發生したので、土を盛り上げる結果、期せずして自然に半球狀の形になると解するは誤つてみると説いてゐる。

塔は又墳墓以外にも造られた。例之ば何等か重要な地點を標示する爲め、或は何等かの記念の爲めにも作られるので、必ずしも常に舍利を藏するのでは無い。此の原型が佛教の弘布と共に各地方に傳はり、其の地方特殊の要求に由つて其の型が改竄され、終に無數の種類を生ずるに至つた、それは何れ各論に於いて説明するのである。

佛教伽藍は塔を中心とし、これに附屬して若干の建築を具備する。先づ敷地の入口に門があり、門前に石柱が立てられた例がある。中央の塔の周圍には石の玉垣が繞らされ、門を備へるを正式としたらしい。塔の附近に僧房があり、別に *Chaitya* (支提) とて舍利塔を安置してこれを禮拜する建築があつた。佛堂は古は無い。それは印度に於いて佛像を造る風習は、遅く西曆第四世紀初頃から始まるので、それも西北境の健駄羅から傳習したものと考へられてゐる。尙ほ僧房は始めは僧徒の起居の建物であつたが、後に其の内に佛像を安置するの風を生じ、漸次に其の設備が發展して終に僧房が一轉して佛堂となつたと認むべき類例が澤山ある。此の外鐘堂の存在してゐる例もあり、大門中門を備へたものもある。勿論印度系に屬する各地方に於いて、それ々々規模配置に異同がある。以下地方分類の式に由つて順次に説明して行くのである。

第二節 印度本部

茲に所謂印度本部とは狭い意味の英領印度を指すので、錫蘭、迦濕彌羅、健駄羅地方、涅槃羅、ブータン等は除外される。但し英國直屬以外の所謂 *Native Territory* は此の内に包含せられる。要するに印度本部は佛教建築の發祥地であり、印度の南端部以外には殆ど全部に於いて佛教建築の遺跡を見る。今其の實例を列擧するのであるが便宜上縦に建築物の種類を分ち、横に其の年代を區劃して行くのである。建築は一般に、石柱、門、玉垣、塔、支提 *Chaitya*、僧房 *Vihar* 等に分類され、其の年代は第一期(自太古至アンドラ朝)、第二期(自グプタ朝至戒

日王朝)、第三期(戒日王朝以後)の三期に区分される。

其の一 石 柱

石柱は梵名スタムバ *Bambha* 又はラート *Lat* と云ふ。元來亞育王が誥文を刻してこれを其の領土の邊境に建てたもので、後には佛教伽藍の門前又は塔の傍等に標柱として建てられるやうになつたらしい。但し石柱は佛教專有のものでなく、闍伊那教にも印度教にも其の適用を見るのである。

石柱は原則として丸い一本の石であり、上部に行くに従つて次第に其の太さを減する。柱の上に鐘形の柱頭を載せ、更に其の上に象、獅、馬、牛、輪寶等を載せた例がある。石柱の大なるものは途中で石を繼ぎ重ねたものもある。表面はよく磨かれ其の上に銘が刻せられる。

古代佛教が隆盛であつた時は、大伽藍には殆ど必ず石柱があつたらしく思はれるが、今は残存するものが甚だ少い。玄奘三藏が祇園精舍を訪問した時には、門前に一對の石柱があり、一方には牛、他方の柱頭には輪寶があつたと記されてゐるが、今は共に影を止めない。現今最も完全に保存されてゐるものはビハル及びオリッサ州のラウリア・ナンダンガルフ *Lauriya Nandangarh* の亞育王の石柱で、立派に亞育王の誥文の銘が残つてをり(第七二五圖)、頂には獅子が載せられてゐる。大さは柱の最大直徑二呎十一吋、高さ三十二呎九吋半であるが、此の邊が普通の大さである。

其の他有名なるはアラハバード *Allahabad* の石柱で、亞育王の銘の外、サムドラグプタ *Saudragupta* (西曆三

四五—三八〇)の追銘、及び莫臥兒朝のジャハンギール *Jahangir* (西曆一六〇五—一六二七)の波斯文の銘があるが、惜しむべし頭部が缺損してゐる。

此の外断片的に現存してゐるのは尙ほ十點以上あると思ふ。就中第七二六圖に示す三點は美しい柱頭の獸形であり、其の下の臺の文様が頗る暗示に富むものである。サーンチーの塔の傍に残るものも亦た四獅の美しい柱頭である。

支那の近代の華表は普通圓又は八角の石柱で、其の頂に何等か靈獸が載つてをり、其の調子が非常に印度の石柱に似てゐる。六朝時代南朝の陵墓の前に建てられた石柱はやゝ趣を異にするが、頂の獅、其の下の蓮蓋、其の他の部分に石柱と共通の意味が看取せらるゝ。恐らくは彼此の間に何等かの交渉が有るのであらう。

其の二 門

門は梵名 *Torana* トラーナである。伽藍の入口や塔の玉垣の間に開かれた一種の門で、實例としてはサーンチーに五口ある外、佛陀伽耶に廢殘せる一口がある。カルカッタ博物館にはパールフートの門が陳列され、ラクナウ *Luknow* 博物館にはムトラ *Mithra* 發見の門の殘片がある。尤も後者は闍伊那教に屬するものと考定されてゐるが、形に於いて同式である。

サーンチーの大塔の周圍に東西南北の四門があるが實に興味多い遺蹟で、夙に宗教家や藝術家に由つて研究されてゐる。卷頭に掲げてゐるのは其の北門で(第七二一圖)、最も完全に保存されてゐる。其の他の三門も大體の

意匠構造に於いて同型であるが、南門が最も古く(西暦一〇一一)柱頭に四獅があり、一體に手法が堅實である。北門はこれに次ぐもので柱頭に四象があり、其の上に三本の横材を束の上に架けた手法は圖に見るが如く、其の裝飾的意匠の濃厚にして煩瑣なることは到底茲に説明し切れぬのである。其の裝飾の材題は何れも佛教の教義に基づくものであり、一々深い意味を有するのである。就中釋迦の本生譚及び釋迦を代表する物件は最も注目にする。當時はまだ佛像を彫刻するの風が始まらぬので、佛の代りに象、菩提樹、鐵鉢、佛足、塔、輪寶等を對象として禮拜したので、象は佛の誕生を、菩提樹は成道を、鐵鉢は巡錫を、佛足は佛の立つた姿を、塔は涅槃を、輪寶は設法を、それ〴〵代表したものと考へられてゐる。此の北門に其の數例が現はされてゐるが、技巧の點から見ても實に優秀なものである。

東門はこれに次いで造られたので、其の意匠は北門によく似てゐるが力が弱い。門は最後に出來たので、柱頭には短軀肥肉の四人の像があるが堅實の精神は失はれてをり、其の他各部の手法も前者の如き雄健の味は無い。此の外サインターには尙ほ一口の門がやゝ離れて第三の塔の前に殘存してゐるが、これは大塔の西門と同工異曲である。

パールフートの門は其の玉垣と同時代即ち西暦前百八十年の頃と認められるので、遺物中最古に屬するが其の手法は最も雄健で、柱頭の四獅の力は殊に優れてゐる。

斯の様式に屬する門は恐らくは第一期に限りて行はれたらしい。第二期以後には大いに其の形式を變じたのであらうが惜しい哉實例が無い。佛陀伽耶の大塔に屬して一口の廢殘した門の下半部のみが立つてゐるが、柱の断面もサインターの如く單純な直角形でなくして、變化ある多角形であり、柱頭にも動物や人物は無くして、只だ肘木の一種のみがある。恐らくは第二期のものであらうが具體的に明示することが出来ない。

要するに門の實例は、第一期に於いてはサインターに於けるものが其の絶好の代表物で、意匠の奇巧、製作の精緻、共に驚歎に堪へざらしめる。此の様式は時と共に變遷し、佛教の衰頹と共に減亡したが、これから暗示を得たと想はれる實例は印度教の祠堂にも見える。尙ほ門の原語トラーナと日本のトリキ(鳥居)と少しく似てゐるのみならず、其の形に於いても若干類似の點があるので、トリキの言語をトラーナに歸せんとする説もあるやうであるが、これは頗る危険なる臆説であると思ふ。

其三 玉垣

凡そ伽藍、塔、僧房等の周圍には石の玉垣が繞らされたものと想はれる。殊に塔の周圍には特殊の意匠を施した立派な玉垣が造られたことは多くの實例の示すところである。

玉垣は普通笠石、格、貫、及び地覆より成り、最古と覺しき實例は比較的簡素であるが、時と共に修飾が加はり、パールフートの玉垣に至つて最高潮に達したと思はれる。南印度のアマラヴァチの玉垣は既に第二期に入るのであるが、餘りに繊細に過ぎて却つて威力を失つたかの觀がある。

玉垣の構成は、先づ地覆の上に密に格を樹てる。格は四角、扁平なる四角、又は隅切りの四角の断面を有し三

本の貫を通す。尤も貫は格を貫通するのではなくして、只だ格に大入れに嵌入してある。貫の断面は多くは銀杏形又は蛤形である。笠石は肩を丸めた角材を普通とする。玉垣は多くは門と相伴ひ、門柱と連絡するが、或は別に「留め柱」を有する場合もある。此の各部の材は表面には、例に由つて佛教に關する種々なる物件が彫刻されること猶ほ前記の門に於けるが如く、又或は單に文様が彫刻される場合もある。文様とても、或は蓮或は動物などで、畢竟矢張佛教關係のものである。

實例として、サーンチーの大塔及び佛陀伽耶の大塔の周圍の玉垣の一部は、亞育王時代と考へる人もある。サーンチーの大塔の玉垣は、其の無裝飾にして堅實なる點から見ても最古の實例であらう。西曆前三世紀の始めと見る説は確かであらう。サーンチーの第二の塔の玉垣には、蓮や靈獸、靈鳥等の彫刻があるから、やゝ後れた時代であらう。西曆前三世紀乃至一世紀の間と見て差支なからう。佛陀伽耶の玉垣は恐らくは西曆前一世紀のものであらう。

パールフートの玉垣は西曆前百八十年頃と推定されてをり、最も美しい實例とされてゐる。既に本篇第一章に於いてもこれを引合ひに出したのであるが(第九八六・九八七圖)、更に茲に又第七二七圖を紹介する。圖の右端は垣の留柱で高彫の女夜叉が現はされてをり、三本の貫及び格には蓮花が彫刻されてゐるが、其の蓮が殆ど一々皆圖案を異にしてをり、しかも一々皆甚だ巧妙である。尙ほ笠石にも甚だ古勁なるから草及び人物の彫刻を以て充塞されてゐる。

アマラヴァチーの玉垣はグプタ朝に屬するものと考へられ、西曆第四世紀の初頃(西曆三二五—三五〇)と實はれてゐる。其の大部分は英國博物館に持ち去られ、現場には若干の破片のみが残されてゐる。パールフートの玉垣と同型であるが、これには既に佛陀の像が見え、遙かに健駄羅の影響を示すものとして重要視されてゐる。普通の宮室や閣樓等に於いて、二層以上の周圍に欄干が繞らさるゝ場合に於いて、其の欄干の手法は殆ど全く以上の玉垣と同型であることは幾多の彫刻の上に於いて看取せらるゝ。但し此の場合は極めて簡單で何等特殊の裝飾は無いやうである。

要するに玉垣は比較的重要ならざる一種の建築の附屬物に過ぎざるの觀があるが、印度に於いては甚だ興味ある一科をなすのである。それは其の建築的性質よりも、寧ろ其の表面に施されたる彫刻及び文様の爲めである。吾人はこれに由つて印度の歴史、宗教史、古代印度の風俗等の研究上多大の資料を得るのである。

其の四塔

塔の實例の最古のものはサーンチーの大塔である。これは亞育王が造つた八萬四千の寶塔の一つであると傳へられ、其の年代は西曆前二百年頃と認められてゐる。大塔の附近に尙ほ五つの小塔があるが、其の第二第三の塔は、共に西曆前一世紀乃至二世紀のものであり、第三塔は舍利弗及び目犍連の舍利を藏するものとされてゐる。大塔は、露盤以上破壊して形を失つたのを最近に補充したが、其の補充に由つて大いに原形を誤想せしむるの憾がある。

大塔は基壇の直徑約二百二十尺、地上露盤の下まで五十六尺であり、塔身の丈は、その半徑よりも短い比例になる。其の恰好は第七二八圖に見る通りで、始め煉瓦を以て築かれ、後に石を以て装はれてゐる。

第七二三圖中、右方に見ゆる塔は鹿野苑の塔である。これは年代が未だ確定されてをらぬが勿論第二期に屬するもので、一般に西曆第六七世紀頃と考へられてゐる。圖に見るが如く、形の比例が著しく高くなり、基壇の徑九十三尺に對して塔身の頂まで百二十八尺である。露盤以上は消滅して少しも分らぬ。此の塔も煉瓦造であるが表面に石を貼附し、それに美しい文様が刻されてある(第七二九圖)。近頃クシナガラに涅槃塔が発見され、又那爛陀精舎の遺跡から塔の基壇が発掘されたが、後者は基壇が圓形でなくして方形である點や、彫刻の性質等から見て、恐らくは第二期の末期か第三期の初期頃に屬するものと思はれる。

第三期の實例としては佛陀伽耶の大塔を特筆せねばならぬ(第七一八圖)。元來こゝに亞育王が塔を創建したが後世幾度か改造補修されたらしい。玄奘三藏の紀行には

精舎高百六七十尺下基面二十餘步……精舎故地無憂王先建小精舎後有婆羅門更廣建焉……

とあるが、現在の大きさと殆ど同じである。圖に示す如く、四角な壇の中央に大塔が聳え、四隅に各小塔が立つてをり、其の様式は著しく印度本來の塔とかけ離れてゐる。これは第十四世紀に緬甸人が改修した結果であると云はれてゐる。兎に角、後世に至るに従つて塔の丈が高くなり、基壇は四角に變ずる傾向を有する。また此の大塔の壇の内院には、降魔成道釋尊の像が安置されてゐる。

大塔の附近には無數の供養塔があるが、小は二三尺から大は一丈に出入する程度のもので、多くパーラ朝に屬するものである。即ち第十二世紀頃から尙ほ以下に降るものもある。第七三〇圖は其の一例であるが、これが印度佛塔の最後の好型である。打ち見たところ、丈けが著しく高く滿身に裝飾が施されてゐる。基壁は几帳面を取つた方形で、刹形によつて高く上に延び、其の上に圓筒狀の塔身が立ち、四方に甍を鑿ちて其の中に佛像が安置せらる。露盤の上には九輪が立てられてゐるが輪の數は不定である。必ずしも九つではなく、それ以上のものが少くない。

要するに第一期の塔は形が簡明で丈けが低く、第二期に至つて漸く複雑になると同時に彫刻が適用され、第三期に至れば基壇は方形となり、塔身に佛塔が造られ、斯くて塔の性質は墳墓から一轉して佛堂に變ずるが如き傾向に在る。

其の五 ヴィハラ Vihara (毘訶羅、精舎又は僧房)

ヴィハラは狹義には單獨の僧房であり、廣義には綜合的の精舎又は寺院である。元來佛刹伽藍に於いて、これに奉仕する僧徒の居住する建物又は佛教講習の道場であつたのが、おひ／＼に變化して終に佛像を安置する佛堂又はこれを中心として、若干の附屬建築を抱括する寺院にも適用されるやうになつた。

今日現存する實例は殆ど總て石窟であり、只僅かにサンチーに廢殘せる架構的の實例を見るのみである。勿論鹿野苑や那爛陀精舎等の遺趾の發掘によつてヴィハラと認むべきものが發見されつゝあるので、今後おひ／＼

此の種の實例が世に紹介されることと想はれる。

架構のものも石窟のものも、其のプラン及び設備に於いては別に相異はない。それは簡単に言へば一人乃至二人の僧が起臥するに足る丈の小さな四角な室の連続である。其の最小の場合は只一人が辛うじて横臥し得る丈の小室一個である。元來印度の僧の生活は極めて簡易なもので、身に一片の布を纏ふ外衣服を要せず、食は野生の果實を取り又は人に食を乞へば足る。家財も道具も一切無くても済むので、只だ夜間就眠の場所を得ればよいのである。此の最小のヴィハラがやゝ發達すれば七八尺四方位になり、一方入口を開き、三方は壁を繞らし、二人共住なれば二つの寢床を設備するのである。更に發達すれば斯くの如き小室が一直線に數個連続して並び、前に共同の廊下が設けられる。尙ほ更に發達すれば十數若くは數十の小室が中庭を圍み、中庭に面して四角に配置せられ、中庭に通ずる共同の入口が作られる。さて其の組織は、二層又は數層の高さに繰り返へされたらしく、一つのヴィハラに數百の僧が住ふ場合もあつたかも知れぬ。第七三二圖は石窟ヴィハラの数例を示したもので、簡より繁に進むの順序を説明するに宜しい。房室の數が増加するに従つて中央の廣間が大きくなると同時に、天井を支へる爲めの支柱が増加するのを見るのである。尙ほヴィハラが發達するに従つて廣間の奥の處に特に佛像を安置すべき設備の現はるゝのを見るのである。此の種の建築は併しながら佛教以來發達したと斷言することは出來まいと思ふ。印度に於いては已に太古から民衆の群住する場合には、此の式に由る共同建築が行はれてゐたと考ふべき理由はある。

架構ヴィハラの唯一の實例と稱せらるゝサーンチーの遺構は、一直線に數個の室が連続した部分が残つてゐるが其の全約は恐らく尙ほ不明であり、年代も不明であるが、大凡西曆第五六世紀の頃に屬するものと認められる。石窟ヴィハラは例は可なり豊富である。其の最古のものは孟買の東南近距離に於けるバジヤ及びベドサの遺跡であらう。共に西曆第二世紀に屬する。バジヤのものは直角形の中室の二方に房を排列したものであり、ベドサのものは底を圓めた中室の周圍に、十二の房を配置したものである。其の各房には入口があり、其の上に印度拱及び欄を刻出した丈で何等の裝飾もない(第七三三圖)。

孟買の東北近距離にあるナーシク Nashik はゴダヴァリ Godavari 河の上流に臨み古來宗教的靈地と稱せられてゐるが、こゝに小丘の半腹に沿うて多數の石窟があり、其の内若干はヴィハラである。ヴィハラ的重要なるものは三個ある。第一は第十號窟でナハバナ・ヴィハラ Nalavana Vihara と稱し西曆一百年頃のものであるが、ほぼ正方形の中室の二面に房を配置し、正面に椽を設け、椽の柱には例の波斯式の柱を並べてゐる(第七三三圖)。第二は第三號窟で、ガウタミプトラ精舎 Gautamiputra と稱し、西曆凡そ三百年と考定されてゐる。これは前者と殆ど同型であるが、前面の椽の柱の波斯式がやゝ崩れ、柱頭の鐘形などは其の特殊なる八字形の曲線の輪廓が悪化して殆ど壓縮された球の如くになつた(第七三四圖)。第三は第十八號窟でヤドニヤ・スリ精舎 Yadhya Sri と稱し、西曆四百年頃と認められる。これは中室の左右に房が配置され、奥の壁に内陣が穿たれ、其の中に釋迦及び脇士の像が刻出され、柱の手法も已に波斯型を脱して純印度式に變じてゐる。これ等のナーシクの諸例は印

度に於ける波斯型の柱の歴史を物語ると共に、佛像彫刻出現の年代に就いて参考資料となるものである。

石窟ヴィハラの實例中最壯大且つ優秀なるものはハイダラバード Hyderabad 領のアジャンタ Ajanta の一群である。アジャンタの石窟は夙に其の壁畫に由つて世界に喧傳され、我が法隆寺の壁畫の研究には毎度引き合ひに出されるのである。併し壁畫を有する印度建築は獨りアジャンタの窟寺のみでなく、重要な建築には多く壁畫が施されたかと想はれるが、アジャンタのものはそれが最も好く保存されてゐるのである。石窟の配置は第七三五圖に示すが如く、馬蹄形をなして流るゝ急湍の懸崖を廻り、安山岩の絶壁に鑿成されてゐるので、其の主要なるものが二十七個ある。訪客は順路東から西へ進むやうになつてをり、便宜石窟に此の順に従つて第一號から第二十七號までの番號が附けられてある。此の中で、第九、第十、第十九、第二十六の四窟が支提であり、其の他は全部ヴィハラであるが、其のプランは圖に示すが如く大小廣狭一ならず、房室の配置も互に均しくない。これは年代が區々である爲めであり、様式手法もこれに準じておのゝ異なるものである。

年代の研究は未だ確實に決了されてをらぬが、ヴィハラの最古のものは第八、第十一、第十二及び第十三で、西曆百年乃至二百年と推定され、第十四、第十五、第七はこれに次ぐもので、第三四世紀頃と認められ、第十六から第二十までは又これに次いで第五六世紀、第一から第六までが其の次で同じく第六世紀の終期、最後に第二十から第二十六までが第七世紀に屬すると認められてゐる。此の中で最も好く保存されてゐるものは、第十六、第十七及び第一、第二の四窟であり、壁畫も可なり鮮明に見える。第七三六圖は第二號窟の前面であるが、彼の

ナーシクの實例に比較して著しく變化したのを認めることが出来る。波斯式の柱は茲に一變して印度化され、柱頭の動物は群像となり、鐘形は或は押し潰されて扁平となり、或は全く影を失つた。軒廻りは精緻なる彫刻を以て充塞され、佛像も隨處に現はれるのである。内部は、中央の廣間を繞つて僧房が配置されてゐるが、正面には特殊なる手法に成る内陣とも云ふべき一室が作られ、其の中に佛像が安置されたので、即ちヴィハラは同時に佛堂となり了つたのである。

壁畫の作法は、先づ柱、天井、壁其の他各部の表面に粘土に牛糞を練り合せたものを以て、厚さ二分乃至三分位の厚さに塗り、其の上を白土を以て仕上げ、其の上に繪畫又は文様を描いたのである。白土の成分は何であるか予は未だ知らない。畫は佛傳の外、當時の事蹟や風俗もあり、頗る興味が多いものである。文様には花文や幾何文や、縦横無盡なものがあつて、一々説明することが出来ない。第七三七圖は寶相花の一例であるが、其の意匠は甚だ優秀であり、線の働きが流暢潤達で少しも滯滞するところが無い。

アジャンタに次いで重要な石窟の遺構はエローラ Ellora である。エローラは矢張りハイデラバード領に屬し、アジャンタの西南近距離に在る。大體南北に亘る小丘の西腹に沿うて、長さ約二千米突の間に斷續して大小無數の石窟が鑿たれてゐるが、南から數へて重要な窟に番號が附けられてゐる。其の中第一號から第十三號までが佛教に屬し、第十四號から第三十號までが印度教に屬し、第三十號から第三十三號までが闍伊那教に屬する。

佛教に属するものの中で、第五號のデルワラ精舎 Dhewara が最も顯著である、西暦六百五十年頃のもので、規模頗る壮大である。併し、エローラに於いて最珍とすべきものは第十一號のド・タル Dotal 及び第十二號のチン・タル Chintal であらう。兩者共に三層の石窟で、内部に階段に由つて昇るべき設備がある。多層の構架的精舎の傳記は屢々これを見るのであるが、多層の石窟の精舎の實例は獨りエローラに於いてのみ見ることが出来るのである。第七三八圖は第十二號窟の前面である。此の第三層は殆ど全く佛堂としての設備であり、第二層以下に僧房が設けられてある。第七三九圖は第三層の内に佛像が安置された有様を示すものである。

エローラに於ける實例は中印度佛教建築の最後の運命を語るものである。年代は第七世紀の末葉であらうか、窟内の彫像及び裝飾的手法は既に著しく印度教化され、建築としての様式は繊細に陥り豪宕なる氣魄を失つたかの觀がある。玄奘三藏は第七世紀の初に中印度の諸國を歴訪して佛教の衰微、伽藍の廢頽を見て頻りに嘆聲を漏すと同時に、天祠即ち印度教の祠堂の隆盛なることを語つてゐるが、成る程と頷かれる節がある。

其の六 支 提

支提は又制底とも音譯され塔廟と意譯された例もあるが適當の譯語とは思はれぬ。寧ろ舍利殿と譯した方がよいかと思ふ。何となれば支提は元來其の内に舍利を藏する小塔を安置してこれを禮拜する建築物であるからである。勿論後世小塔は舍利を藏せざるものになり、別に又始めから舍利を藏せざる塔を置いたのであると云ふ説もあり決定的の斷案は下し難い。又支提を基督教の會堂に比する説もある。それは支提のプランが殆ど會堂に均し

いのみならず、衆徒が此の殿内に會して小塔を供養禮拜する趣が教會堂に酷似する點があるからである。此の小塔は特にダーガバ Dargaba と名づけられてゐる。

支提には構造的のものと、石窟との二種あること猶ほ精舎のごとくであるが、構造的の遺例は甚だ少い。勿論近頃おひひに發見されつゝあるが、それも完全に支提の規模を示すものではない。第七四〇圖の(一)(二)(三)は其の例であるが、第一のサンチーの支提は、第七世紀頃のものと考えられ、其の現状は第七二八圖に見るが如くである。後部の半圓形の部分はダーガバを安置した處、前部の柱の並んでゐる處は禮堂である。禮堂の柱は今十本残存してゐるが、其の手法殊に柱頭の舟肘木のやうな手法は初期の印度建築には見當らぬところである。外觀は不明であるが察するところ第七四一圖のテール Tail の遺構に見るが如く、ダーガバの在る後部の屋根が高く切妻を現はして聳え、禮堂は一段低く前に接してゐたと思はれる。

テールはハイダラバード Hyderabad のナルドルグ Naldurg 地方に在る。其の遺構は第七四〇圖の(二)の如きプランで明かに支提から出たものである。勿論今日は印度教の神祠に轉用されてゐるが、古代の支提建築を考へべき好資料である。第七四〇圖の(三)は今より三十四年前マドラス州 Madras Presidency のキストナ Kistna 地方のチュザラ Chuzala に於いて發見されたもので、後世模様替へをして印度教の神祠としたのであるが、其の始めは佛教の支提であつたと想像されてゐる。

此の他尙ほ佛教の支提から變化したものと認むべき印度教の神祠が二三知られてゐるが、それは後章に述べる

ことにする。

石窟の支提は其の遺例可なり豊富である。其の原始的性質を示すものはビハル及びオリッサ州のガヤ Gaya 及び王舎城の附近に發見されてゐる。第一に有名なるサッタパニ Sattapani 窟は舊王舎城の附近にあり、第二回の結集 Convocation が茲に行はれたと云ふ。勿論これは自然の石窟に手を入れたもので、未だ支提の體裁は備へてをらぬが、支提に最初の暗示を與へたと考へる説もある。

ガヤの北十六哩にバラバール Barabar と云ふところがあり、小丘の壁面に多數の石窟が穿たれてゐるが、其の最古の窟には亞育王の十二年即ち西曆前二百五十年の銘がある。即ち印度に於ける最古の建築的遺物と稱すべきもので、第七四〇圖の(四)は即ち其のプランであり、名づけてスダーマ Sudama 窟と云ふ。窟は前後兩室より成り、後室は殆ど圓形であるが、こゝにダーガバが置かれたと考へれば、これこそ支提の最初の實例と見ることが出来る。此の他亞育王の十九年の銘の在る窟もあるが、これは只だ直角形の一室で支提の形ではない。今一つロマス・リシ Romas Rishi と云ふ窟がある。年代の銘はないが恐らくは亞育王時代であり、殊に興味多いのは、其の入口の拱の手法で、第七四二圖に示すが如く、印度固有の尖拱、其の内輪に沿うて母屋を暗示する小片の配置、其の内の拱の輪廓に沿うてスツープと象の彫刻、其の下の入口が著しく下に開き上に狹まるの狀、何れも亞育王時代の建築の標本として殊に注意すべきものであり、第七四一圖のテールの切妻はこれと比較して其の由來を知ることが出来る。

以上は原始的支提であるが、其の大成せるものは第七四〇圖の(五)に示すが如きプランとなり、其の狀基督敎の會堂の如く、堂内は列柱によつて三分に區分され、中部の奥にダーガバが安置される。中部の天井は側部よりは一段高く、若しも構造的支提であればクリーアストリー Orianthory から光線を採るのであるが、窟寺であれば只だ正面の大窓からのみ採光する。正面には入口を穿ち、其の前に、若しも大規模であれば別に椽を設けたり更に其の前に廣場を取つたりする。要するに構造的でも石窟でも、其の主義に於いて差の無いことは猶ほ精舎のごとくである。

さて斯くの如く大成した支提の實例は悉く石窟のみであるが、次に其の重要な數例を列擧して見よう。

第一にバジヤ Bija の支提は孟買の東南鐵路經由で八十八哩にある。プランは型の如く内に二十七柱あり、柱は八角で著しく内に向つて傾斜し、柱面に輪寶卍等の佛敎の表號が彫されてゐる。尙ほ柱に佛に關する繪畫を施した形跡があるが剝落してよく分らぬ。ダーガバは美しい輪廓で上に二重の露盤があるが、其の上の傘蓋は失はれてゐる。正面の入口の部分は全く缺損してゐるが採光用の上の大窓はよく保存され、印度拱、母屋等が完全に残つてゐる。大窓の左右に堂屋形の附加物が見えるが、これにも拱や持送や欄が見える。但し何處にも人獸草花等の彫刻が見えないのは此の建築の年代の甚だ古いことを示すものである。恐らくは西曆前二百年ぐらゐに溯るのであらう(第七一三・七四三圖)。

第二はベドザ Beda の支提で、これはバジヤの東南約六哩にある。プランは第七四〇圖の(五)に示す通りで

殆ど完全に保存されてをり、第七四三圖に見るが如く、其の入口の前に整列する四本の柱は波斯印度式の絶好の標本である。正面採光用の大拱窓の手法、其の下に見える入口の上の小拱等何れも型の如き手法に成る。第七四四圖は其の内部で、ダーガバは餘程丈けが高くなり、露盤の上に相輪の棒が淺つてゐるが傘蓋は失はれた。柱はバジャの支提と同じく八角造りで内方に傾斜し、輪寶、蓮花、卍等の紋が彫刻されてゐる。此の支提は西曆前二百乃至百五十年頃のものとして考定されてゐる。

第三はナーシク *Nasik* の支提である。ナーシクは孟買の東北鐵路經由百二十二哩にあり、ゴダヴァリ *Godavari* 河の上流に接し、古來宗教上重要なところである。町の西南四哩半の郊外に小丘の半腹を一文字に繞つて多數の石窟が鑿たれてゐるが、其の第十七號窟が支提である。プランは定式に由り、柱は十八本である。其の前面は第七四五圖の如く、入口の小拱と採光の大拱と相重つてゐる點は普通であるが、壁面彫刻に拱と欄の外に波斯印度式の小柱やスツーパー等が見えることや、内部(第七四六圖)のダーガバの丈けが更に高くなり、塔身の形が球體に近くなつたことや、柱は八角であるが傾斜がやゝ少くなつた上に柱上に四角な盤が加はつたこと等によつて年代のやゝ下ることを感知せしめる。天井の形も、中部が穹窿で側部が半穹窿になつてゐるが、古い例では側部の天井は水平である。柱に銘が刻してあるが、これに由つて其の造營が西曆前百二十九年であることが證明されると云ふことである。

第四はアジャンタの第十號の支提である。柱は三十九本であり、八角に造られてゐる點は古式であるが、ダーガバの塔身が著しく球體を示すのはやゝ新式の氣分である。柱面に佛像が描かれゐるのは或は後世の加工であらう。結局此の年代はナーシクの支提よりやゝ後れるものと推定せられる(第七四七圖)。

第五は同じくアジャンタの第九號支提である、これは内部に二十一柱が立ち、其のプランは珍らしく直角形である。中部の天井は穹窿で、側部は水平であり、柱は八角で礎盤も柱頭もないところから見ると、第十號支提と年代に於いて大差は無いと見られる。兩者共に西曆第一世紀と見られてゐるが、予の觀るところでは如何にしても西曆前第一世紀のものと思はれる。

第六はカールラ *Karla* の支提である。カールラはバジャの北方七哩の地點にある。これは總ての支提中の最大にして最善なるもので、柱は三十九本ある。第七四八圖は其の前面で、入口の前に一本の石柱がある、三十二角で上に四頭の獅が立ち、其の頂に寶輪があつたらしい。採光の大拱窓には木造の遺構が今も現存し、内部(第七四九圖)は波斯印度式の柱が儼然として立ち並んでゐるが、其の柱頭は已に著しく印度化して、象の上に群像が騎つてゐる(第七五〇圖)。中部の天井には力強い肋骨が刻出されてゐるが、此の肋骨と直角に木材を入れて格天井の形とし、格子は色彩文様を施した痕跡が見える。

ダーガバは比較的丈けが低い、これは形の大なるが爲めである。總じて構造物は規模が大なれば大なる程丈けが低く、小なれば小なる程高くなるのは一般の性質である。露盤の上に九輪の棒が立ち、一枚の木造の傘蓋が残存してゐるのは實に珍らしい。恐らくは唯一の傘蓋の實例であらう。支提の外壁の裝飾は最早拱と欄ばかりで

はなく、複雑な彫刻を以て充たされてゐる。それは男女の像や象の形で、即ち年代の稍々下ることを示すものである。今日の調査では、西暦前七十八年と認められてゐる。

第七はカネリ Kanheri の支提である。これは孟買の東北二十哩にある大支提で、其の内部は第七五二圖の如く、大體の調子がカールラに似てゐる。但し彼に比すれば柱頭の意匠なども更に印度化して波斯印度式に特有なる線の力が失はれてゐる。年代に就いては未だ確説を聞かぬが、カールラよりは二百年以上も後代に下るのであらう。これを第二世紀の終と見るは當然であらうが、第六世紀と見る説は恐らくは當らぬと思ふ。

第八はアジャンタの第十九號支提である。これは第五世紀に屬するもので、プランに奇は無いが其の體裁は既記の諸例に比して著しく違つて來た。第七五二圖に見るが如く、其の十五本の柱は波斯印度式から出て、今や全く印度化したつたかの觀がある。ダーガバに至つては、其のプランが舊來の圓形から一變して几帳面を取つた方形となり、基壇から塔身の下部へかけて龜が作られ、其の中に佛像が安置されてある。塔身は半球から變じて、殆ど全球に近くなり、露盤上の三重の傘蓋は重々しい球蓋狀となり、更に其の頂に小球と小露盤が載せてある。要するに、ダーガバは舍利塔から一轉して佛龕となつたので、同時に複雑なる表面裝飾としての彫刻が現はれ出した。

第九はアジャンタの第二十六號支提である。第七世紀の始めに屬するもので、支提建築の最後の様式を示すものである。第七五三圖は其の内部であるが、二十七本の柱は第十九號支提よりも更に纖弱となり、柱上の小壁は

微細を極めた彫刻を以て充塞されてゐる。ダーガバは純然たる佛龕となり、塔身は扁平となりて龜の屋蓋の如き意味となつた。尙ほ注意すべきは、堂内に釋迦の涅槃像の彫刻のあることである。涅槃像が中印度に於いて何時から作られたかはよく知らぬが、實例の示す處ではこれ等が最古に屬するものと思ふ。

第十はエローラの毘首羯磨 Visakama 支提である。これも第七世紀と認められてゐるが、前者よりも更に新しいやうである。其の前面には第七五四圖に見るが如く、上の採光窓にも下の入口にも例の印度固有の拱は消滅し、印度教建築に見るが如き奇異なる手法となつた。内部は第七五五圖の示すが如く、ダーガバの佛像は益々發達し、三尊佛が主體となり、塔身は壓縮されて蜜柑のやうな形となつたのである。斯くて支提は完全に佛堂となりつたのである。

以上の諸例に由つて支提建築變遷の歴史は略ぼ明瞭である。試みにこれを概説すれば左の如き順序となるのである。

- 一、プランは始めは單純なる一室で、其の奥にダーガバを置いたのであるが、一變して室内に列柱を立てて中部と側部とに區分するやうになり、更に入口の前に廊又は前庭を作るやうになつた。
- 二、構造は、始めは入口及び其の上の採光窓に印度固有の拱を作つたが、末期にはこれが消滅した、天井は中部が穹窿で側部が水平であつたが、後には側部が半穹窿となつた。
- 三、柱は始めは八角形で、礎盤も柱頭もなく、やゝ内方に傾斜してゐたが、これは純印度式と解せられる。波

斯印度式の柱は、始めは入口の前の廣場の前に現はれたが、後にはそれが室内に用ひられ、漸次に印度化したのである。尙ほ此の柱が先づアラビア海に近い地方に現はれ、時と共に内地に入りつゝ其の形を變じたのは興味ある現象で、これやがて波斯傳來の系統を物語るものである。

四、ダーガバは始めはスツーパーの形と同様であつたが、時と共に塔身が球形に近づき、プランは圓より變化して方形又は多少複雑なる形となり、九輪の傘蓋は一種の彫刻的裝飾となり、基壇に龜を作つて佛像を容れるやうになると同時に塔身は退化し、終に屋蓋の如き意味のものとなつた。

五、裝飾は始めは見るべきものなく、只だ外面に拱と欄を刻したのみである。これは畢竟佛教の表號として用ひたので表面裝飾としての目的ではなかつた。其の後時と共に彫刻が増加し、動物、人像、から草、拱其の他複雑なる材題が反覆して賞用され、終には全表面が殆ど完膚なき迄に彫刻を以て充塞さるゝに至つた。

以上は西曆前三世紀から第七世紀に至る間の支提の變遷であるが、第八世紀頃から佛教は事實に於いて滅亡したので、支提建築の實例も亦た影を失つたのである。

第三節 錫 蘭 Ceylon

錫蘭は梵名シムラ Simhala で獅子國と意譯される。シロンは其の轉訛である。併し土人は自國をランカ Lanka と呼んでゐる。ランカは錫蘭語(Sinhalese)の島の義である。島には釋迦が巡錫し來つたと云ふ傳説があ

るが勿論無稽であり、錫蘭を釋迦の誕生地と稱するに至つては虚妄も亦た甚だしい。錫蘭の歴史はマハーワンス Malavansa の記録に由つて窺ひ知るのであるが、既に西曆前五世紀の頃からアマラダブラ Anuradhapura (阿闍羅陀補羅)が王都として榮えてゐた。デヴァナムビヤ・チッサ Devanampiya Tissa (天愛帝須)王の代に亞育王の王子・ポンタ Mahinda (Mahindra, 摩訶陀)が佛教弘布の爲めに渡島し、次いで王女サンガミッタ Sangamitta (Sam-gamita, 僧伽密多)が菩提樹を携へて渡來し、これより錫蘭は佛教國となつたのである。西曆七百六十九年頃印度のイラバル Marabar 人の壓迫に堪へずして、王都はポロンナルワ Polonnaruwa に遷されたが、プラクラマ・ハナー Prakrama Bahu 王(西曆一一五三—一一八六)の時は國威甚だ隆盛であつた。其の後國運振はず、第十四世紀に王都はカンデー Candy に遷つたが、小邦分立の姿で統一されなかつた。西曆千五百五年葡萄牙人が東征し來り西曆千五百九十六年に全島を奪ひ、次いで西曆千六百五十八年和蘭人が來てこれを侵略し、西曆千七百八十二年英國人が全島を占領して今日に至つたのである。即ち錫蘭の建築史は當然三期に區分せられる。第一期はアマラダブラ時代、第二期はポロンナルワ時代、第三期はカンデー時代である。其の宗教は今日も尙ほ佛教が主であるが、印度教も亦た少からず流布してゐる。

其の一 アマラダブラ時代

アマラダブラ時代の建築は中印度の移植であるから、佛教伽藍の性質、規模、構造、形式すべて彼に準じたものであるべき筈であるが、これに地方的色彩が加はつた爲めに彼我若干の相異を見るのである。現今舊都の遺跡

は、東西約二哩、南北約四哩の廣きに亙つて點々散在してゐるが、其の種類は、佛塔を中心とする伽藍、獨立の僧院、佛牙殿等である。

伽藍の規模は今日完全に保存されてゐるものが無いので、確實には分らぬが、略ぼ其の大體を推知し得る。大伽藍に在つては、巨大な塔即ち地方名ダーガバ Dagaiba が四角な壇の上に立つて伽藍の中心となる。中印度では支提内の小塔の事を特にダーガバと稱するが、錫蘭では塔は總てダーガバと云ふ。壇の正面登り口に鐘架の有る例がある。壇の前に參道があり、中門が其の途中にある。參道の入口には大門がある。參道の附近に隨所に僧房がある。これは中印度と同じくヴァハラと稱する。中印度の支提に比すべきものは蓋しダラダ・マリガワ Maligawa Maligawa であらう、これは佛牙殿と譯されるので、佛舍利を奉安して禮拜する堂である。小規模の伽藍ではダーガバの周圍に幾重かの列柱が繞らされてゐる。これは其の上に木製の梁を架け何等かの方法によつて掩蓋を施したものと考へられてゐる。次に實例を擧げてこれ等の建築の説明を試みるのである。大伽藍の實例の第一はルワンツェリ Ruwanvelli である。西曆前百二年から七十八年の間にダタガマニ Dutthagamani 王が建立したもので、其の規模は第七五六圖に示すが如く、塔身の直徑約二百五十二尺の大塔は南北四百七十五尺、東西四百七十三尺の土壇の上に屹立してゐる(第七五八圖)。土壇の面には象の半身像が行列してゐる。塔の周圍には元來聖僧等の立像が駢列してゐたのであらうが、今はダタガマニ王と四人の僧の像がある。基壇は三成であり、階段によつて登るべく、段には錫蘭獨特の剝形及び裝飾がある。塔身以上は破壊して舊觀を失つたが、大體に於いて中印度

の塔と同型であることは、土壇の上にある小古塔によつて推知する事が出来る。塔の前面に今小堂があり、土壇の登り口に一對の鐘架があり(第七五七圖)。其の前方約百尺の處に中門趾があるが、柱式五間四面のプランで前後に向拜があつたらしい。大門は三間の壁式である。なほ此の大塔の基壇の一部に壁畫が残存してゐるが、其の調子はアジャンタのものに似てゐる。附近のヴァハラは總て甚しく荒廢して原形を知り難い。

次は無畏山 Abhayagiri である。西曆前八十八年にワラガム・バフー Valagama Bahu 王の建立にかゝり、第五世紀の始めに支那の法顯三藏が親しく訪問して其の記録を傳へてゐるので特に有名である。これは恐らくは印度系第一の巨塔であり、其の基壇の直徑は約三百六十尺で、約五百九十尺四方の壇上に峙ち、全高は元來二百七十尺に達したものと推定されてゐるが、今は相輪の上半が缺損してゐる。法顯は此の塔を高さ四十丈と記録してゐるが、當時の尺度を以て測ればこれに近いのである(第七五九圖)。塔は中心から特製の煉瓦を以て充實して積み重ねたもので、これに要した煉瓦を以て厚さ一呎、高さ十呎の壁を築くとすれば、其の長さは英國の倫敦からエチンバラまで續くと計算した英人がある。兎に角實質の多大なる點に於いては埃及の大ピラミッドに次いで世界第二位にゐると云はれてゐる。予の實測によれば、露盤は七十九尺四寸四方、相輪の下部の直徑四十六尺六寸である以て其の大を想ふべきである。塔の基部に壁畫の痕跡があるが鮮明を缺く。ヴァハラ若干これに附屬し、三間三面の中門も其の趾を残してゐる。祇園寺 Jetavanarama は西曆二百七十五年にマハーセナ Mahasena 王の建立にかゝり、其の規模は無畏山と殆ど同様であるが、實測の結果によればこれよりもやゝ大きいといふ。只だ荒

廢が甚しいので詳細は考へ難い。現今半ば折れた九輪の頂まで地上二百四十五尺、露盤七十五尺四方である(第七六〇圖)。塔の土壇の前には七間四面の中門がある。

此の他ミリシウエチ *Mrisiveti* の大塔はダタガマニ王の創建で基壇の直径百七十一尺あり、大體に於いてルワンウエリとよく似てゐる。

以上は大伽藍の實例であるが、別に小規模の伽藍の實例が數多ある。其の最古のものはツパラム *Tuparama* 塔であり、西暦前二百五十年天愛帝須の創建にかゝると云ふが、現在の建築は後世の修築を経たものであらう(第七六一圖)。其の輪廓は中印度の塔とやゝ其の趣を異にし、塔身は半球體よりもやゝ半楕圓體に近い。大さは直径三十一尺、高さ五十四尺であり、周圍に四列の柱が繞らされ、其の柱は八角のものと四角なものがあり、柱頭は中印度に其の類例を見ざる特殊の意匠に成るものであり、上端に柄の造り出しがあるのは蓋し木造の梁を架ける爲めであると推測される。

イスラムニ *Isurumuni* 塔(第七六二圖)はダタガマニ王の建立であり、其の形式は殆ど前者と同様である。

ランカラマ *Lankarama* 塔(第七六三圖)は西暦二百二十一年の造營で、基壇の直径四十五尺七寸五分、周圍に四匝の列柱があるが、其の意匠は前者に均し。

ミヒンタレ *Mihintale* はアマラダプラの東方約八哩にあり、マヒンダの道場であつたので、マヒンダから轉訛した名である。こゝに一群の塔があるが第七六四圖は其の小塔で、二匝の列柱を有し、其の大なるものは直径百

六十尺もあるが露盤以上は缺けてゐる。

マハーヴィハラ *Mahavihara* は元來マヒンダの本道場で、西暦二十二年に九重の精舎が造られたが、マハセナ王が二百八十五年これを五重に改築したと云ふ。法顯の佛國記には城南七里に在り三千の僧が居ると録されてある。現場は第七六五圖の如く二百五十尺に二百六十尺の幅員の建物に、縦横四十本即ち總計千六百本の石柱が密に立つてゐたのが、今は若干缺けてゐる。柱は約一尺角であるが要所には大柱が立つて居る。二重以上は木造であつた爲めに今残存してをらぬのであらう。多層の精舎の事は中印度の祇園精舎の傳説にも知られ、また今日現存の實例もある。

佛牙殿即ちダラダ・マリガワ *Dalada Maligawa* の現場は第七六六圖の如く、荒廢せる殿趾の上に多數の石柱が残存してゐるが、其のプランは略ぼ確實に考へることが出来る。第七六七圖は予の踏測にかゝる複原的規模であるが、何處にか中印度の支提と類似の點があるやうである。第七六八圖は菩提樹院の入口の門である。三間三面で、今石柱のみ残つてゐるが、其の柱頭に木製の栱が尙ほ存してゐるのは極めて興味ある事實である。門内に三重の壇を築き、其の頂に菩提樹が植ゑてある。即ちサンガミッタが中印度から將來したものの後身である。

錫蘭には諸所にボクナ *Pokuna* と稱する貯水池がある。これは石を以て築かれた立派な建築的性質の作物である。元來錫蘭は水に乏しいので各町村に大抵此のボクナを造り、一年中の雨水を貯へ、飲料にも、沐浴にも、洗濯にも、皆此の水を使用するのである。第七六九圖は其の最も完美なるものの一例である。

アマラダブラ時代の建築に共通する特殊の手法の最も顯著なるものは階段であらう。段の最初の踏石は半月形をなし、其の表面に同心圓弧を以て幾條の帯を劃し、其の内に靈獸や、から草の薄肉彫刻を配置したもので、英人は、これを月石 Moon Stone と名づけてゐる。月石の左右には欄の親柱の代りに碑狀の留石を建て、其の表面には必ず精巧なる二天の彫刻が施される。留石の後には欄の代りに曲線形の袖石が置かれる。錫蘭の剝形もまた一種特別で中印度の如く深刻強烈でなく、彫刻も繪畫も總て悠暢な處がある。西曆第五世紀の遺物と稱せらるゝシギリ Sigiri の摩崖の如きはアジャンタの壁畫と同式であるがこれに比して優るとも決して劣るものでない。

其二 ポロンナルワ時代

ポロンナルワの遺趾の大部分は今調査たる樹林荆棘の裡に封鎖され、僅かに南北一哩半、東西半哩ばかりの部分が開拓されてゐるが、こゝに十數個の重要な遺構が散在してゐる。其の殆ど總てがブラクラマ・バブー時代に屬すると考へられてをり、建築の性質はアマダブラ時代に比して餘程變化してゐる。次に若干の實例を擧げてこれを解説して見よう。

塔の實例として第一にランコッタ塔 Rancot Dagaba (第七七〇圖) を擧げる。直徑百八十尺に餘る大塔であるが甚しく荒廢してゐる。全體の調子はアマラダブラのものと同様であるが、基壇の裾に小さい房室が並んでゐる點は緬甸の塔と共通の意味がある。別にキリ塔 Kiri Dagaba がある。これは直徑百二十三尺くらゐで、前者と殆ど同様である。

ワッテ・ダゲ ヲtte Dage (第七七一圖) は小塔の周圍に二匝の列柱を繞らし、更に其の外に壁を繞らした奇妙な建築である。殊に第一匝の列柱の間に佛像を配したのは新奇である。要するに、これアマラダブラの小塔の系統を傳へたものとして重要な實例である。

ヴィハラは僧房として存するものと、佛堂に進化したものとある。ガル・ヴィハラ Gal Vihara は石窟の佛堂に若干の僧房が附屬したものと解せられるが、甚だしく荒廢して規模の全豹を知り難い(第七七二圖)。こゝに露出してゐる涅槃像は丈四十五尺に達し、立像は二十五尺ばかりである。僧房は貧弱な小宇で言ふに足らぬ。

純佛堂はアマラダブラには見えなかつたが、こゝには好例がある。其の一は祇園寺であり(第七七三圖)、今は散々に荒れ果ててゐるが、本殿、前殿、向拜(假りに斯く名づく)の三區が縦に連続したプランは明瞭である。本殿は其の奥に高さ五十尺に近しと思はるゝ佛像があるが、天井は潰滅してゐる。外壁は三層の觀を成し、壁面の手法は既に著しく繊細に陥つてゐる。

ヘチ・ヴィハラ Hetti Vihara も亦た佛堂である。其のプランは第七七四圖に示すが如く、本殿と前殿とより成り祇園寺のプランと同工である。本殿には本尊と脇士が立つてゐる筈であるが今は無い、但し天井は尖拱狀の穹窿であることは第七七四圖に併せ示すが如くである。第七七五圖は其の側面で、壁面は祇園寺よりも更に繊細である。第七七六圖は佛牙殿である。其の壁面の手法の殆ど全く南部印度教式即ちドラヴィダ Dravida 式であるに由つて、此の建築がポロンナルワ時代の最後の遺物であることを想はしめる。ポロンナルワの初期にはまだ印

度教建築の感化はない筈である、中期以後漸次にそれが濃厚になつて來たとすれば、此の點から觀て遺構の年代の大體を知ることが出来るのである。

第七七七圖はサート・マール・プラサダ Sat Mahal Prasada と稱する高層の精舎又は宮室である。字義から見れば七層である筈の處、現形は六層であるのは何故か、最上の一層を失つたとも思へぬのである。方二十八尺四寸の小建築で、内部には居室の設備もない點から考へれば精舎又は宮室としての實用にはならぬものであらう。只だ大いに興味あることは、此の遺構に由つて彼のアマラダプラのマハーヴィハラや、中印度の祇園精舎等が最初七層であつたと云ふ傳説が必ずしも虚構でないと思はしめられることである。なほ南部印度教式に見る多層の殿堂や支那古代の塔との關係に就いて何等か暗示が與へられるかの如く覺ゆるのである。

其三 カンデー時代

カンデー時代の建築の遺物に重要なものは多く無いやうである。それは葡萄牙人や和蘭人が侵略の際に破毀された爲めであらう。假令若干の遺例があつても、其の多くは様式手法共に著しく衰へ、南部印度教式の猥雑な氣分が浸潤した爲めに純佛敎的な重厚な性質は失はれたのである。

實例の第一は有名なるカンデーの佛牙殿である(第七七八圖)。元來此處の佛牙は眞正のものとして喧傳されたのであるが、西曆千五百六十年に葡萄牙人がこれを持ち出し、ゴアで焼燬して仕舞つたので、今日殿内にあるものは象牙製の模造品であるが、其の形は鱗の齒に酷似してゐると云ふ。そは兎に角佛牙殿の建築は惡趣味のドラ

ヴィダ式で、殆ど論ずるに足らぬものである。圖の右にある小塔は猶ほ能く古式を保つたものであるが、某僧の墓であると云ふ。圖の左なるは佛牙殿に附屬する最近の堂である。

カンデーの北十六哩にアルヴィハラ Aluvihara がある。こゝに石窟寺が二つあり、各々其の中に涅槃像を安置し、諸菩薩と覺しき幾種の像がこれに配せられ、窟の入口の前には廂が造られ、内部に色彩文様がある。年代に就いては詳なる説を聞かぬが、カンデー時代の初期即ち西曆第十四五世紀若しくは其の後と想はれる。アルヴィハラは北方二十八哩なるダンバラ Dambala には五つの石窟寺があるが、何れも涅槃像を本尊としてをり、第一及び第三窟の像は長さ四丈に達する。内外の手法裝飾文様等何れも趣味の低下を示し、第一窟内には印度教の最高神の一なる毘濕拏を合祀してゐるを以て見るも、如何に印度教の浸潤の大なるかを知るべきである。建築の年代に關しては未だ確説を知らないが、恐らくはアルヴィハラと相距ること遠くないと思ふ。

第四節 健 駄 羅 Gandhara

其の一 地理と歴史

健駄羅とは西北印度の信度河とカブール Kabul 河の合流する附近の地に與へられた地名であるが、其の境域は時代に從つて移動してゐる。法顯の所謂健駄陀衛國と、玄奘の所謂健駄羅國とは共に均しく Gandhara を指すのであるが、其の位置は符合してをらぬ。併し兎に角現今のヘシヤワル Peshawar (西域記の希路沙布邏)を中心とし、

スワット(Swat)及びブネル(Buner)地方を包括する地方であると見て大差はない。

ガンダーラの歴史は東洋歴史家の興味を以て研究しつゝあるところで、今日なほ若干未解決の點があると思はれるが、大體に於いて略ぼ闡明せられてゐる。始めマケドニア(Macedonia)の歴山大王が東征の時長驅して印度に入り、パンジヤブを蹂躙して引き上げた後、希臘人が今の露領トルケスタン及び阿富汗國に殖民して、バクトリア(Bactria)(大夏)國を建てたが、やがて印度に侵入して所謂印度バクトリアの大王國を立てた。其の首府はガンダーラのタクシラ(Taxila)(西域記の咀叉始羅)であつた。これが印度藝術と泰西クラシック藝術と觸接した第一歩である。タクシラは西暦前百七十年頃、エウクラチデス王(Eucratides)の築設にかゝると云ひ、兩來約百年繁榮を見たが、西暦前八十五年頃、塞王朝(Ser)の爲めに侵略された。

是より先き支那塞北の大月氏が匈奴に逐はれ、漸次に西に轉じて前漢の武帝の頃遂に葱嶺を越えて今の露領トルケスタンに入つた。當時此の邊はバクトリアの領土であつたが、大月氏はこれを併合して一大王國を建てた。大月氏には五つの部屬があつたが、其の中の貴霜(Kushana)が最優勢で全部を統一し西暦五十年頃終に印度に侵入してパンジヤブの全部を占領した。貴霜朝の諸王の中で殊に有名なのは即ち迦賦色迦(Kanishka)であり、佛敎興隆と寺塔建立に全力を竭した。其の領土はパンジヤブ及び今の西北境州の全部、阿富汗及びトルケスタンの大部分に及び、首府はヘンジャウルであつた。カニシカの年代に關しては曾つて學者間に激甚なる論争があつたが、今日のところ西暦百二十三年乃至百五十年頃と云ふことに落著してゐる。

兩來約三百年を経て國運漸く衰へたところ、南からは中印度のグプタ朝から壓迫され、北からは慄悍なる嚙嚙(Ephthalites)(又 White Huns)の襲來に遇ひ、堂塔伽藍も大部分は破壊された。斯くて大月氏は西暦五百五十年頃には滅亡し、嚙嚙も六百年頃に戒日王の爲めに驅逐されたのである。されば第五世紀の初年に法顯が來訪した時には堂塔も伽藍もなほ多く殘存してゐたのであるが、第七世紀の初期に玄奘が訪問した時は、ガンダーラ國は既に滅亡し、無數の建築物は殆ど全く荒廢に歸してゐたのである。

要するにガンダーラは元來地理的名稱であるが、後に國名となり、其の國に發生し發達した特殊の藝術は所謂ガンダーラ藝術として東洋藝術史上に異彩を放つに至つた。其の分布の範圍に關しては未だ的確に決定し難いが印度に於いては信度河の流域全部に亘り、阿富汗國に於いては信度河の支流に屬する流域全部、及びアム・ダリア(Amu Daria)の一部の支流流域を占め、露領トルケスタンに於いては未だ探檢が遂げられてをらぬやうであるが、必然其の東半部に遺趾が埋藏されてゐるものと見ねばならぬ。支那トルケスタンに於いては既に諸處に於いてガンダーラ系の遺物が發見せられ、其餘波は支那内地の遺趾に於いても顯はれてをり、更に我が日本に於いても其の痕跡を認めることが出来るのである。

其二 健駄羅建築の特性

以上の史實から考察して、ガンダーラ建築の性質が、印度と希臘との合成であるべきことは想像するに難くない。即ち夙に希臘印度式(Greco-Indian)の名を稱せられた所以であるが、其の遺跡を精査して見ると、其の様式

は決して希臘印度式と云ふが如き單純なる稱呼を以て云ひ盡すべきものでない。成る程、建築の殘片の中にはバクトリア人が其の祖國希臘から習得したと考ふべきコロント式及びイオニア式の柱頭が発見され、殊にコロント式は到る處に賞用されてゐる(第七七九圖)。イオニア式は目下タキシラから只だ一個発見されたのみである(第七八〇圖)。尤も此の外に中印度のバトナ即ち古へのパトリプトラ(華子城)からもイオニア的手法を加味したべルセポリス型とコロント型を混ぜたやうな柱頭が現はれてゐるが(第七八一圖)、これは恐らくは孔雀王朝に於いてアンチオキア朝の叙利亞王國傳來のものであらう。ドリア式の柱頭は中印度にもガンダーラにも未だ発見されてをらぬ。元來亞細亞方面の希臘殖民は好んでイオニア式を用ひたので、コロント式は餘り使はなかつた筈であるのに、ガンダーラに於いてはコロント式が賞用されて、イオニア式の甚だ稀なるは何故であらうか。これは大に考ふべき事であらう。尙ほ又ガンダーラに於けるコロント式の柱頭を見るに、其の大體の形狀は希臘乃至羅馬のもの如く秀清に非ずして甚だ鄙野であり、アカントスの葉の作り方も、泰西クラシックの老熟なるに似ずして一種の稚氣を帯びてゐる。これを希臘式と呼ばんよりは寧ろ東羅馬式と云ふの妥當なるを覺ゆるではないか。

ガンダーラ建築の手法の他の特點は、彼のコロント式の柱と相伴うて古代波斯式の柱の賞用されてゐることである。即ち柱頭に雙獸の彫刻を載せ、其の下に鐘形乃至球狀を装置し、柱礎にも略ぼ同様の手法を施したもので、遙かにベルセポリスやササの遺構を想はしめるものがある(第七九二圖)。これは夙に波斯印度式 *Persos Indian* と稱せられ、古代波斯から傳來したものと解せられてゐる。印度固有の手法としては、例の印度拱欄等が反覆して

現はれ来る。拱には單葉拱と三葉拱とあるが、此の三葉拱がガンダーラに特殊なものである。

其の他薩珊朝の波斯 *Sassanids* の手法も見える。それは剝形に施された鋸齒狀の帶紋や、表面裝飾の文様等である。ガンダーラ地方の古塔の内から、印度バクトリア、薩珊、大月氏等の貨幣が頻りに発見さるゝに由つても此の地方の藝術が甚だ複雑なる元素より合成されてゐることを察し得るであらう。

以上列記した種類の外に、其の所屬の尙ほ詳ならぬものが若干ある。例之ば彫刻の殘片に往々見るが如き女人柱 *Carvate* は果して印度であるか、或は西亞であるか、將た希臘であるかの確に斷定することは困難である。

又第七九二圖に見るが如き梯形の楣或は凸形の *Entablature* の如きも、ガンダーラ建築の一大特色であるが、其の起原に就いては容易に決定し兼ねるのである。其の他微に入り細に互つて、陸續として這の種の問題が生じ来るので、悉くこれを解決するにはなほ長き研究を要するのである。

要するにガンダーラ建築の性質は決して「希臘印度式」と云ふが如き單純のものではなく、また「希臘及び波斯印度式」と云ふが如き分明なものでもない。薩珊の分子も、東羅馬の元素も、叙利亞方面の干涉も見え、何處とも決定し難いものもある。しかもこれ等の元素が必ずしも渾然として化學的に融合して一大様式を成すにあらず、却つて雜然として機械的に混合してゐるかの觀がある。畢竟ガンダーラ建築は必ずしも藝術として成熟したものでもなく同時に亦た優秀と稱すべきものと思はれない。其の價値は寧ろ東洋史、東洋文化史、佛教史、佛教藝術史等の方面に於いて顯著なるものがあるのである。

其三 健駄羅の窠塔婆

ガンダーラ建築の遺物の主要なるものは勿論佛教伽藍と佛塔である。此の地に佛教の傳來したのは亞育王時代であることは疑を容れぬ。西域記によればガンダーラ地方の佛跡の多數は亞育王の建立と稱せられてゐるが、勿論悉くこれを信する譯には行かぬ。印度バクトリア王國以來タキシラを中心として佛教藝術の榮えたことは想像に難くないが、實例の遺存するものは殆ど總て大月氏以來のもので、其の以前に溯るものは未だ的確に證明されてをらぬと思ふ。大月氏の迦膩色迦王は無数の堂塔を建立したと考へられてゐるが、就中最大なるものは首府希路沙布遷に建てられた大塔である。西域記によれば塔の周圍一里半、層基五級、高百五十尺、其の上に二十五層の金銅の相輪を起て如來の舍利一斛を以て其の中に置いたとある。佛國記の記事も大體これに符合し高四十丈とある。蓋し錫爾無畏山の塔と共に佛塔の最大なるものであつたと思ふ。曩に此の塔趾から佛舍利が発見されたので、記録の正確が保證されたのであつた。

ガンダーラ塔の遺趾はおひ／＼発見されつゝあるが、其の重要な數例を擧ぐれば、ヘンシャルの西なるハイバル峠 *Khalibar* のアリ・マシッド *Ali Masjid* と云ふ處に數基の遺跡がある。第七八二圖は其の一例で、四角の基壇の上に圓い塔身が立つてゐたのであるが、基壇の方形はガンダーラ塔に慣用の手法である。基壇は幾層に區劃され、各層にはコリント式又は波斯式の柱を立て並べ、柱の間に佛像が安置されてある。

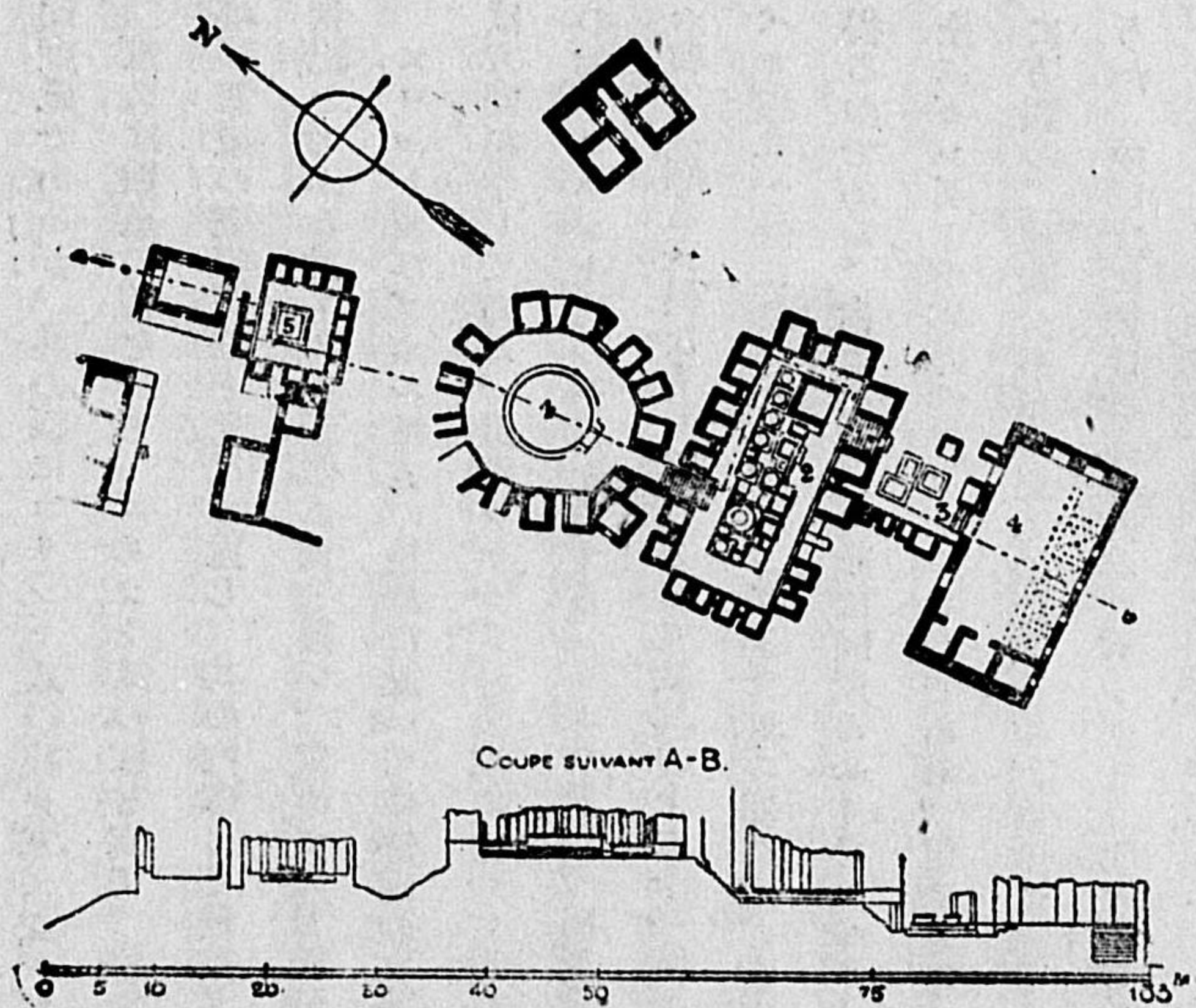
第七八三圖はラワルピンチ *Rawalpindi* の東南に當るマンキアラ *Mankhara* の塔で、四角の基壇の無いのは中

印度風であるが、其の面にコリント式の柱を立て並べた點はガンダーラ式である(第七八四圖)。塔身の下部にも二重又は數重の帯を分ち、コリント式の柱を立て、佛像や文様を入れるのは、ガンダーラ塔の特性である。此の塔は基壇の直徑百五十九尺に達し、其の内部より発見されたる貨幣によつて、創建は迦膩色迦時代、外装は第七世紀と考ふる説もあるが俄に信じ難い。定めて大月氏滅亡以前の作であらう。

スワット及びブネル地方の遺跡に就いては佛國のフシエ *A. Foucher* 氏の著書に若干紹介されてゐるが、基壇は方圓相半してゐる。最近タキシラの發掘に由つて発見されたクナラ *Kunala* 塔は隅を缺いた方基であり、例の如くコリント式の列柱を有する(第七八五圖)。同所發見の雀離塔 *Jaulian Stupa* の周圍にある小塔の中(第七八六圖)は頗る奇異なもので、方基五級其の上に十一輪の刹を立て、刹の上部には水煙、寶珠等の意味ありと認むべき道具が装はれてゐる。ガンダーラ塔の刹は殆ど常に缺損して不明であるが、此の實例によつて多大の暗示を得るのである。尙ほ第七八七圖は同所のモラ・モラツ *Mora Moradu* 精舎内の小塔であるが、これは最も完全にガンダーラ塔の性質を示すものである。但し基壇は方形でなくして圓形である。元來ガンダーラ塔には基壇に方圓の二種類がある。想ふに圓基は中印度の直系であり、方基はガンダーラ地方に於いて特發したものであらうか、中印度に於ける方基の塔はガンダーラよりは遙かに後れて發生したもののやうである。

ガンダーラ塔の分布に關して重要な資料の一は、第七八八圖の信度地方ダウラトプール *Dawalpur* の塔である。即ち信度河の下流にまでガンダーラ藝術の流布されたことを示すものである。

其の四 健駄羅の精舎



マジャールのリガ精舎のプラン

ガンダーラの精舎に就いては既に久しき以前から世に紹介されたものに、ユサフザイ Yusufzai (カプールの河北の平野、パシヤールの東北)地方のジャマルガリ Jamalgarhi, タクチバニー Takht-i-Bahi, シャバーツガリ Shahbazgarhi, カンマシール・スマット Kashmir-Smat, サンガオ Sanghao 等があり、就中始めの二ヶ處は殊に有名である。然るに最近タキシラの發掘に由つて、こゝに更に重要な精舎が發見された。それは英人の所謂ジャンチャル・テムブル Jandial Temple と稱する佛堂、クナラ塔等の諸建築を包擁するもので、僧房は中庭の周圍に小室を配置した型である。即ち中印度の精舎と同工異曲である。

上圖はジャマルガリのプランであり、第七八九圖はタクチ・バニーのプランであるが、兩者共通の性質が明かに現はれてゐる。即ち兩者共に小丘の半腹に築かれ、其の中心はスツーパーであるが、前者は圓基であり、後者は方基である。スツーパーの周圍に空地を取り、其の外壁に小室が駢列してゐるが、これは皆小佛堂である。此の一區の外に略ぼ長方形の第二區があり、中庭を圍んで亦た小室が並んでゐる。これも佛像を入れたものである。次に其の前に第三區がある。同じく中庭を圍んで小室が設備されてゐるが、これは僧房である。タクチ・バニーの場合には更に第四區とも稱すべきものが附屬してゐる。シャバーツガリの精舎は甚しく敗殘して全豹は知り難いが大體に於いて同型である。

ガンダーラの精舎が悉く以上の例と同型であつたか否かは未だ斷言し難いと思ふが、少くとも此の型に屬するものが多かつたのであらう。此の型は中印度の精舎とは著しく趣を異にするやうであるが、抑々ガンダーラに於いて獨創的に造られたのか、或は何處にか暗示を得たのであるか、これ等の問題は中印度の精舎が十分に闡明せられた後に解決せられるのであらう。

第七九〇圖はタクチ・バニー精舎の現場である。近く見ゆる方形の壇は塔基である。其の周圍の小室は三葉拱の切妻と、同じ外輪を有する球蓋と交番に並んでゐる。これはガンダーラ建築の慣用手段であると思はれる。遠く第二區と第三區の荒廢した有様が見える。材料は悉く綠泥片岩の小片を積み重ねたもので、硬質の巨石は用ひられてをらぬ。建築も何れも小規模で、巍々たる高閣も堂々たる巨殿も見えない。ガンダーラ藝術も迦膩色迦王

時代には偉大なるものがあつたが、其の後國威の衰ふると共に藝術も萎縮したのではあるまいか。前記の精舎は何れも西暦第五六世紀の頃と考へられてゐる。

建築の手法は今現場に於いて見るべき遺例は無いが、印度諸處の博物館等に收藏されてゐる建築彫刻に由つて其の大體を知ることが出来る。第七九一圖に於いては、例の球蓋と切妻の佛龕を縦に交番に並べてゐる。第七九二圖に於いてはこれを横に並べてゐる。其の中央の切妻の下には佛陀の坐像があり、像の左右には波斯型の柱があり、其の外に左右菩薩の像がある。尙ほ柱上には羅馬式のコンソルを有する *Entablature* があり、其の上に更に印度式の欄を見る。此の種の彫刻は實に無數であり、仔細に點檢すれば殆ど遺憾なくガンダーラ建築の細部までも知るに足るのである。第七九三圖は最も美しい球蓋の一例である。コリント式の柱の上に満面裝飾を以て覆はれた形式は好個の建築の模型と見ることが出来る。

其の五 健駄羅彫刻

ガンダーラ藝術に於いて最も興味あるものは蓋し彫刻であらう。それは藝術としての美的價値の大なるが爲めには非ずして其の史的及び佛教的價値の爲めである。ガンダーラ藝術は印度と泰西クラシクとの混和であることは殊に彫刻に於いて明瞭に現はれる。其の彫刻の材題は多くは佛傳に關するものであるが、中印度及び他の地方には見當らぬ場面があり、佛教研究者に取つて重大なる資料となるのである。

元來佛像彫刻の創意者はガンダーラのバクトリア人であり、中印度に於いては遅く西暦第四世紀の始め頃から

これを傳習したと考へられてゐる。尤もハヴェルの如きはこれに反對してゐるが反對の根據を確立する實證に乏しい。バクトリア人は希臘の殖民であるからクラシク彫刻の素養を有してゐる。其の素養に由つて佛像を造つたので、佛像の面相や體格が印度人には似ずして、或る程度に於いて希臘人に似るのである。造像も大月氏全盛時代には、傑作も大作もあつたやうに思ふ。アフガニスタンのバミアン *Bamiyan* の磨崖の大佛は高さ百五十尺に及ぶと報告されてゐるが實に世界の巨像である。或は迦膩色迦時代の作ではないかと想ふ。後世の彫刻は概ね小作で精巧なものもあるが粗末なものもある。クラシク趣味に富むものもあり、印度趣味の現はれたものもあり、必ずしも畫一的でないが、只だガンダーラ風と云ふ氣分で統一されてゐると云へる。

第七九四圖は菩薩の像であるが先づ其の態度が印度的でない。頭髮は波形で螺形でない。眉は半月形でなく、眼との距離も比較的近い、眼は寫實的の形で半眼でない。鼻筋が通つて峰に平らな幅があり、印度佛の鼻峰が一點に尖つてゐるが如くでない。髯は全く寫實的である。以上の手法によつて、其の面相は著しく歐人の型にはまるのである。服装も印度風とは大いに異なる。纏衣の巻きつけ方が中印度の菩薩と違ふ。たゞ璣珞や腕輪、頸輪等は彼此大同小異である。

ガンダーラの佛菩薩の像は大體斯くの如きものであるが、勿論此の外にも風の變つた例が少くはない。併しそれ等の解説は問題外に逸するの誹を免れないから、茲には只だ釋迦八相中の二三の例を舉げて、此の節を終るとにする。

第七九五圖は「誕生の釋迦」である。或る小塔の基壇の周圍に造られた佛傳の一つであらう、コリント式の柱の間に群像が嵌入されてゐる。中央に脚を交叉し、右手を舉げて無憂樹に取りすがり左手を侍女の肩にかけて立つてゐるのが摩耶夫人である。其の右の脇腹から半身を露はしてゐる嬰兒が釋迦である。侍女の一人がそれを受けてゐる。即ち釋迦の母摩耶が藍毘尼園に於いて釋迦を産むの場面である。

第七九六圖も同様小塔の佛傳の一つで、釋迦が家を出でて婆羅門を訪ひ教を乞ふ場面であるが、此の圖は其の左半で、婆羅門が山中の小屋に隠棲してゐる有様であり、右半は釋迦が立つて彼に對話してゐるのであるが、柱には缺けてゐる。婆羅門は多分阿羅々仙人とか迦羅々仙人とか云ふのであらう。面白いのは仙人の小屋である。草や木を束ねて球蓋状の小屋を作り拱状の入口を開き、屋根は木の葉を以て掩ひ、頂に押へとして何やら石の如きものが載せてある。これ畢竟此の地方の原始的建築を暗示するものであらう。

第七九七圖はナットウ *Nattu* と云ふところの「上の精舎」から発見された涅槃の場面の彫刻である。釋迦がクシナガラで涅槃に入るの光景は大體どれも類似のものである。

第五節 迦濕彌羅 Kashmir

其の一 總 說

迦濕彌羅は印度の北境ヒマラヤの表裏に跨る地方であり支那に於いて古へ麴糵と稱した處である。東洋史家は

これに就いて別に議論を有するが、今は便宜これを紹介しない。此の地にも亞育王時代に佛教が弘布されたと稱するが眞偽は保證し難い。併し大月氏時代には確實に其の領土となり、佛教が流布された。迦膩色迦王は此の地に於いて佛典の第四結集を行つた。玄奘が健駄羅から此の地に來た時には幾多の伽藍が儼存してをり、彼は二ヶ年の歳月を此の國に送つたのである。此の緣故から迦濕彌羅は唐に臣事した。其の後幾もなく、佛教は衰へたらしく、これに代つて印度教が勢力を得、舊來の佛教建築の様式は印度教の祠堂に轉用された形跡が明瞭である。然るに第十三世紀末から回教が侵入し來り、其の結果印度教の建築は或は破壊され或は自然に廢滅に歸したるもあるらしく殆ど完全に殘つてをらぬ。佛教建築の遺跡に至つては未だ嘗つて正確なるものが發見されない。既往に於いて佛跡の發掘も數次試みられたが、何時も不成功であつた。曾つて首府スリナガル *Srinagar* の東北三十哩のバラムラ *Baramula* 附近なるジャイエンドラ・ヴァール *Jayendra Vihar* と云ふところへ佛塔を發見したと云ひ、それは西曆五百年頃の物であると稱せられたが、其の眞相はよく分らぬ。又スリナガルの東南約三哩のバンドレタン *Pandretan* 附近でも佛跡らしい物を發見したと云ふがこれも孟浪不確である。

今日殘存する印度教の祠堂は、其の様式手法から見れば明かに健駄羅の系統を傳へたもので即ち古への佛教建築であるべきことは想像に難くない。其の特色と云ふべきは、第一に多量のクラシック氣分を有すること、隠然オーダーの組織を示すのである。即ち圓柱にはフルーチングを具へ、柱頭にはドリリア式乃至ピザンツ式の系統に屬すべきものがあり、其の上に破格ながらエンタプレチアと認むべき部分がある。但し柱の間隔は柱徑の三

倍半に達し希臘のアレオスタイルに相當する。次に注目すべきは、迦濕彌羅建築の切妻は必ず等邊三角であることである。予の實測した一例は正確に等邊三角であり、其の他も殆ど正しい等邊三角であつた。そして此の切妻が二重に重なり合ふ場合が屢々ある。拱は健駄羅と同様三葉拱が多く、稀に純印度の尖拱もある。屋根は鍛葺で二重になり、其の勾配は切妻と相關聯して六十度に近く頂上に小さい實頂がある。時として屋根に小さい切妻の窓形が附けられる。刳形は大體印度系であるが、また少しくこれに異なり大に發達してゐる。材料は總て石墨雲母片岩で、切妻でも拱でも一律に水平に積み重ねたものである。第七九八圖は以上の諸項を示すもので予の實測又は觀測にかゝる。

以上の奇異なる特性は明瞭に健駄羅建築の一分派であることを語るもので、畢竟健駄羅から印度河の支流を溯つて、ヒマラヤ深く入り込んだものに相異なる。唯だ茲に注意すべきは、此の種の現存する地域は獨りジュラム *Jelam* 河の流域即ち迦濕彌羅本部に限ることである。今日の迦濕彌羅は、本部ジャムー *Jammu*、ギルギット *Gilgit*、ラダーク *Ladakh* の四部に大別されてゐるが、ジャムーは中印度的、ギルギットは多少韃靼的、ラダークは全く西藏的で、本部獨り獨特の様式を保つてゐるのである。

迦濕彌羅建築の年代に就いては實に曖昧なるものがある。迦濕彌羅の國史ラージャータランギニ *Rajatarangini* に記す處と最初の探検家ジュネラル・カンニングハム等の主張する處と、ジェームズ・ファーガソンの論ずる處と、殆ど常に一致しない。甚しきは其の間に一千年の隔りがあるのは寧ろ滑稽である。其の何れが正しいかは

容易に判斷し兼ねるので、茲には姑らく彼等の説を紹介するに止め、妄りに私見を加へないことにするのである。

其二 實 例

實例の最古なるものはジュラムの上流、イスラマバード *Islamabad* から程近い谿間のブムジ *Bumji* 又はブムジ *Bumzi* と云ふ處にある石窟で、入口に等邊三角の切妻と三葉拱とを具へてゐると云ふ。年代は恐らく西曆第一乃至第二世紀であると云ふが、若し果して然らば、印度全體に通じて極めて重要な遺跡でなければならぬ。次にスリナガルの東南三十四哩にあるマルタンド *Martand* の祠堂は迦濕彌羅第一の大規模であり、同時に第一の好建築である。其のプランは第七九九圖に示すが如く周圍に長方形の廻廊を繞らす、其の長さ二百八十尺、廣さ百七十三尺、正面に大門を開き中院の中に祠堂がある。祠堂は前殿本殿左右翼殿より成り、長さ六十三尺、廣さ三十六尺である。現状は第八〇〇圖の如く散々に荒廢してゐる、右に見えるのが祠堂で左にあるのが大門である。第八〇一圖は祠堂の正面、第八〇二圖は廻廊の内面である。何れも屋根が缺けてゐるが元來三角形の鍛葺根があつたものに相違ない。祠堂の屋根として當然四個のピラミッドが並び聳えてゐた筈で、其の最高のもは七十五尺ぐらゐになる勘定である。圖に由つて重厚なる壁の表面の彫刻、刳形三角の切妻、三葉拱、柱のフルーチング柱頭、其の他の細部を看ることが出来る。

年代に就いては、ラージャータランギニによれば西曆七百二十五年から七百六十年まで王位に在つたラーターチチア・ムクタービーダ *Lalitaditya Muktapida* の造營にかゝるといふ。祭神は日天であると云ひ、廻廊の柱の

八十四本は十二宮に七曜を乗じた数であるから印度教の思想を示すのであると云ひ、中院は最初水を湛へたもので祠堂は水中に立つてゐたので、即ち龍神保護の爲めにしたのだと云ひ、諸説紛々として要領を得ない。

次にスリナガルの東方十九哩のバイエッチ Payoeh 又はバイエル Payer に最も完全に保存された小祠堂がある(第八〇三圖)。

これに由つて迦濕彌羅建築の特性は殆ど遺憾なく知悉せらるる。カンニングハムは西暦四百八十三年乃至四百九十年と指定したが根據が無いらしく、ファーガッソンは第十世紀以後と言ふがこれも餘りに獨斷的であると云ふ。祭神は日天としての毘濕拏であると云ひ、入口の楣に梵天、毘濕拏、濕婆、ツルガ Durga の彫像があり、堂内にはリンガム Lingam 即ち男女兩根接合の象形が安置されてゐる。

此の祠堂は僅かに八尺四方の大きさで、四方に入口があり、元來水中に立つてゐたかの如くである。迦濕彌羅の祠堂は多くは水中に立つてゐたのであらう。それは次の實例に由つて證明さるゝと思ふ。

それはスリナガルの東南三哩にあるパンドレタン Pandrethan の祠堂(第八〇四圖)で、現に約百二十尺四方の池の中央に立つてゐる。水深は平時に於いて約四尺であり、即ち龍神の棲み場所と稱せられてゐる。祠堂は十八尺四方であるが可なりよく保存されてゐる。年代はバルタ Partha 王の時(西暦九二二—九三二)マハーデーヴァ Mahadeva を祭る爲めに建立したといふ。

アヴァンチプール Avantipur の祠堂はスリナガルの東南十八哩にあり、アヴァンチヴァルマ王 Avanti Varma

(西暦八五四—八八三)の建立と稱せられ南北二祠ある。共に荒廢を極めてゐるが、南祠の門はなほ残存してゐる。形式手法前記の例と同じである。

パタン Patan の祠堂はスリナガルの西北十七哩に在り、シャンカラヴァルマ Sankaravarma (西暦八八三—九〇二)の建立であるといふ。其の祠堂は第八〇五圖の如く、例に由つて大破してゐるが、なほ明かに特色を示してゐる。

バニヤル Banigar の祠堂はスリナガルの西方五十三哩にあり、年代不明である。カンニングハム等は西暦第一世紀と云ひ、ファーガッソンは十一世紀頃と云ふ。マルタンドの祠堂とよく似て稍々これよりも小であり、廻廊は長さ百四十五尺、廣さ百二十尺、祠堂は二十六尺四方である。第八〇六圖は祠堂及び其の後の廻廊を示すもので他の例と殆ど同工である。

此の外にも尙ほ數個所に實例があるが、何れも同工異曲である。以上の諸例は何れも目的に於いては印度教の神祠であるが、建築的性質は健駄羅系に屬し更にこれよりもクラシツク的手法に富む點がある。恐らくは古代迦濕彌羅建築はヒマラヤに産する木材を以て造られたので、切妻や屋根の形状勾配などは地方固有の木造の形から出たのであらう。現に近代の木造の回教建築や住家にも上記の祠堂の形式の倣を存するものがあり、中には佛教的意味を傳へたらしく思はるゝ手法さへも見えるのである。

第六節 西 藏 Tibet

其の一 總 說

西藏は古來吐蕃、土伯特、圖伯特等と書かれ、支那歴史上に隱顯してゐる。其の民族は蒙古族で五胡十六國の亂に活躍した氏、羌は西藏族である。成漢の李氏、前秦の符氏、後秦の姚氏はそれである。唐の太宗の時吐蕃國王棄宗弄贊(チンレンツツツ)(双贊思甘贊スロツツツツツ)が朝貢したので太宗は文成公主を嫁がせた。西藏に此の時から支那系佛教藝術の曙光が現はれたと云はれてゐる。棄宗弄贊は又涅婆羅王の公主を娶つたので、印度の文化が涅婆羅を介して西藏に傳來した。斯くて西藏文化は當然印度と支那との混合であり、其の建築も亦た兩者の折衷の如き性質を有する。

別に又信度河を溯つてラダークから西藏内地に侵入した健駄羅及び迦濕彌羅系の一派がある。これは今日比較的顯著でないが、其餘波は隱然現今に傳へられてゐると思ふ。

宗教は元來西藏に固有なるボン教 *Bonpa* があるが重要でない。重要なのは即ち喇嘛教 *Lamaism* で其の起原に就いては専門家の間に諸説があるが、畢竟印度教と佛教と混合したものが更に西藏化されたものと解し得ると思ふ。元の忽必烈が西藏の八思巴 *Pa-sa-pa* を迎へて國師とし、大いに喇嘛教を尊崇したので、元と西藏との關係は重要となつた。明の成化の頃宋略巴ソウリョクパなる者出でて黄教を唱へた。舊來の喇嘛教はこれに對して紅教と云ふが、これは次第に衰へ、今日は黄教獨り盛大である。國氏は何れも熱狂的喇嘛教信徒であるが爲めに教主は次第に勢力を得て終に事實上の主權者となり、所謂政教一致の實現を示してゐる。教主は二人あり、一を噶喇喇嘛と云つて前藏を統治し、拉薩ラサの布達拉ブダラに住ひ、他を班禪喇嘛バンゼンラマと云つて後藏を統治し、日喀則リカゼの扎什倫布ツァシレンブにゐるの

である。

喇嘛教藝術は即ち西藏藝術であり、苟くも喇嘛教の在るところ必ず西藏藝術が在る。其の分布は意外に廣大であり、先づ西藏、青海を中心とし、南は涅婆羅、シッキム *Sikkim*、ブータン *Butan* に至り、東は支那本部全體に普及し、更に遠く滿洲に及び、内外蒙古の全部を蔽ひ、其餘波はシベリアの一角に侵入してゐる。新疆方面も亦、其の圈内に屬するのである。斯くの如き廣大なる地域であるから、各地方の建築も亦一律でない。ヒマラヤ以南は印度趣味が強く、支那方面は支那趣味が濃厚であり、蒙古地方は又支那を模倣してゐるのである。併し何れの地方に於いても、何處かに一種の西藏味を含むことは、當然とは云ひながら興味ある現象である。

要するに西藏藝術は一面に於いて印度系であり、他面に於いて支那系である。これを何れの系に編入するも差支ないが、茲には便宜上印度系として取扱ふのである。其の特色は以下各論に於いて實例を擧げつゝ説明することにする。

其の二 塔

西藏建築を便宜上塔と伽藍及び宮室に分けて説明する。塔は多くは寺院の附屬物であるが、また獨立する場合もある。

西藏塔はチ・オーテン *Chorten* (*Choeften* 又 *Chorten*) と云ふ。佛舍利を藏する場合の外單に伽藍表示の爲めや、佛像安置の爲めに立てられ、或は門の上に標識として立てられる。塔の形式は全く特異であり、西藏以外に類例

がない。即ち基壇は方形で上下に剝形をつけた臺の意味を示し、塔身はプランが圓く、外形は上に開き下につばみ、肩の張つた姿で、底部に數重の剝形から成る臺がある。相輪は露盤、請花、層輪、蓋、寶頂の意味を有する道具から組み立てられるが、必ずしも一定の規則は無いらしい。層輪も少きは七、多きは十三に及び、九の數を固守してをらぬ。蓋の手法も甚だ區々であり、寶頂には日月を象るものや小寶塔を象るものもある。塔身に龕を作つて佛像を安置するのは後世に屬する。要するに大體の輪廓は何れも同一の方針に従ふもので、一見して西藏式即ち喇嘛式の氣分を直覺せしむる。此の形式の起原に就いては未だ學說を聞かぬのであるが、西藏人特殊の趣味に由る創案と見るべきであらう。

實例は、西藏内地に無數の小塔があるやうであるが、未だ偉大なる巨塔のある事を聞かぬ。却つて支那に於いて大小、煩簡、變化自在の意匠を見るのである。第八〇七圖はラダークの首府Lepchiの一伽藍であり、小丘に倚る一群の建築が伽藍であり、前に屹立するのが喇嘛塔である。第八一四圖、第八一七圖に於いても伽藍附屬の小塔を見るが、何れも同型である。たゞ塔身が著しく退化したのを見るのである。

支那に於いては主として揚子江以北に實例を見る。江南に於いて予は僅かに鎮江と武昌とに發見した丈けである。廣東方面には終に一も見ることが出来なかつた。これに反して北支那には、殆ど到る處に實例を見るのである。蓋し支那に於ける喇嘛教藝術は蒙古發祥の元や滿洲發祥の清に由つて保護されたので、何れも北部支那が勢力の中心となつた爲めであらう。其の無數の實例中試みに數點を擧げて見よう。

第八〇八圖は山西省五臺山の南山極樂寺の小塔である。著しく支那化してをり相輪の過大と塔身の下のつばみが激しいのが目につく立派な標本である。次に同所の大塔院寺の塔(第六一〇圖参照)は明の萬曆の建築である。全高二百七十尺と註せられ、堂々たる雄姿は恐らくは世界第一の大喇嘛塔であらう。茲にも過大なる相輪の形を見るが、全體頗る洗鍊された意匠である。

第八〇九圖は北京城内西苑の永安寺の塔である。清初の建築で、よく西藏の原型を保つてゐる。第八一〇圖は北京紫禁城内寶華殿の内に藏せられた佛具としての喇嘛塔である。相輪が發達して支那式の七重塔となつたところに面白味がある。即ち、これ喇嘛塔と支那塔との中間に位するか如き状態に在る。會つて或る英國の建築家が、支那の多層塔は畢竟印度のストーパの相輪が發達し塔身が退化して消滅したものであると唱へたが、此の實例を見ると彼の説も強ち附會であるとも言へぬのである。併し此の問題に就いては予は別に説がある。

此の外幾多の實例は茲に省略するが、滿洲にも多くの好例がある。奉天城外の東西南北の四寺に於ける四塔は其の最好例であらう。北京を中心として其の附近にも觀るべきものは可なり多し。

其三 伽藍及び宮室

西藏の佛刹は、其の様式手法共に宮室と同型であるが故に、茲に一括して取扱ふこととする。第八一一圖はラダークのレー市の景であるが遠く見える巨宇は伽藍であり、近く見ゆる群小宇は民家であり、其の構造規模に精粗大小の別はあるが様式は一貫して相均しい。即ち其の材料は泥、甎、又は石であり、これを積み上げてや、目

立つ程の傾斜を有する平板なる壁を築く、屋根はすべて水平である。壁面には各層に直角形の窓を穿つ。層数は家の大きさに比例して、單層より五六層にも達するが、多層のものは多くは傾斜地に建てられるので、前面と後面とは大いに層数を異にする。直觀した感は城塞の如く、又埃及乃至西亞の古建築の如く、更に或は又現代の高層建築の如く、人をして奇異の想に堪へざらしむる。然も一瞥したところでは印度系らしくも無く、支那系とも見えす、クラシック系とも覺えない。嶄然として全く別種の趣味を發揮してゐるところに限なき妙味がある。

然も一たび其の細部の手法を検すれば、意外にも各方面の原素が現はれ來り、人をして送迎に違なからしめる。第八一二圖はラダーク地方アルチ Aulhi のスム・ツァグ Sam-Tsang 寺の細部である。胴蛇腹を以て上下兩層を分ち、上層には迦濕彌羅式の等邊三角の切妻の中に三葉拱を入れ、其の内に佛像が安置されてゐる。切妻の尖端に獅面がある。切妻と切妻の間に三聯柱があるが、此の柱こそ西藏式の特徴を備ふるもので柱頭の手法は何處かにビザンツ的の氣分が見える。柱の上には齒形飾 Dentil が通り、其の上の小壁 Frieze の中から怪獸の「持送り」Consol が出てゐるところは餘程健駄羅にも似てゐる。下層の中央なる柱の柱頭は頗る興味あるもので、大體の調子はビザンツ的であるが中央に何やら佛像がある。此の柱頭の型が單純化され變化されたものが普通の小建築に慣用されてゐるのである。

第八一三圖はレーの王宮の狻猊門と稱するもので、門の彫刻に狻猊が並んでゐるのである。此の門柱はフルーチングの代りに胡麻殻造であり、柱頭は第八一二圖の型のを十文字に組み合せた結果、宛も支那系の料拱の如き

手法となつたのである。垂木が三重に出てゐる點も支那型に似てゐる。しかも此の柱、柱頭、軒の手法は亦た一面に於いて印度系たるを失はぬのである。兎に角クラシック、印度、支那の三系が西藏に於いて合一したと云ふことは明白なる事實となつて茲に現はれたのである。ラダークの一寺院に於ける僧侶が舞樂の裝束を著した姿は寫眞(第一二九八圖参照)の通りであるが、其の後に見える柱、柱頭の拱、丸垂木は第八一三圖を單純化したものである。

西藏本部の伽藍建築に關しては幾多の旅行家の見聞録や寫眞等が發表されてゐるが、遺憾ながら建築家の探檢報告は見當らぬ。従つて其の真相は充分に明確でないが、略ぼ要領は得られると思ふ。第八一四圖は布達拉に於ける噶喇喇嘛の伽藍の寫眞で、例に由つて丘腹に築かれた多層建築で中央本殿の屋上に純支那式の亭が併立してゐるのは奇觀である。前面に塔及びドーリン Dorjig と稱する石柱が立つてゐる。これは中印度の亞育王の石柱から出たものであると想はれる。第八一五圖は甚だ不完全であるが、此の伽藍の平面圖と稱せられるもので、中央の中院を圍んで、左右に多くの房室があり、奥に内陣らしい設備がある。正面入口の左右各二た間には四天王の像を容れてあると想はれる。甚だ隔靴搔痒の憾はあるが、尙ほこれを以て此のプランが中印度のヴィハラから出たことを察知するに充分である。

茲に此の伽藍の説明の不備を補ふべき屈強の好實例がある。それは支那の熱河に於ける清朝の離宮に在る布達拉廟と稱するもので、其の全景は第八一六圖に示すが如く、殆ど全く西藏の直寫である。

予は未だ其の現場を見ないのであるが、兩者の寫眞の比較に由つてこれを知ることが出来る。但し西藏伽藍は

熱河の廟に比して一段と壯觀である。

第八一七圖はシガツェの扎什倫布伽藍の見取圖であるが、前者と同工異曲である。此の伽藍に就いては瑞典の
スウェン・ヘチン Sven Hedin の旅行記 Trans-Himalaya に記載されており、一讀の價値はある。

支那に於ける喇嘛教伽藍は無數である。其の外貌は一見純支那式のやうであるが仔細に點檢して見ると、周漢
以來の傳統以外に一種の西藏的手法を發見する。第八一八圖は北京北郊の西黃寺の噶喇喇嘛廟であるが、其の上
層の柱が既に純支那的でなく、大料の形に至つては全く西藏式である。其の上の拱も西藏氣分がある。更に其の
上にアーキトレイズとフリーズとを重ね、齒形飾を並べた手法には隠然クラシックの殘影を見るではないか、要
するに支那固有の料拱の組織を用ひてをらぬ點に注目すべきである。斯の類の手法は滿洲蒙古の喇嘛建築にも傳
はつてゐる。第八一九圖は内蒙古陶代屯の喇嘛廟で其の一例である。

西藏式墳墓の一例として茲に前記黃寺の内にある班禪喇嘛の墓を擧げる(第八二〇圖)。これは清の雍正帝の時
班禪喇嘛が巡錫し來つて北京で死んだ爲めに此の墓を造つたので、其の形式は著しく支那化した西藏塔である。
此の塔の基壇に班禪喇嘛の傳記の浮彫がある。

終りに喇嘛藝術に實用されてゐる八寶の文様を附記して置き度い。八寶とは蓋、魚、罐、華、蝶、長、傘、輪
で、第八二一圖は甚だ稚拙であるが、上から順に八寶を畫いたものである。これは何れも喇嘛教にとつて最も重
大なる表號であり、佛具として佛前に供へたり、彫刻、繪畫、文様として各種の宗教的藝術に適用されてゐる。

現に奉天の北陵は清の太宗の陵であるが、其の隆恩殿の欄間に八寶が嵌装されてゐる。以て如何に清朝が喇嘛教
を崇敬してゐたか、否これに耽溺してゐたかを想はしめる。

更に西藏彫刻に就いて一言を費し度い。西藏の彫刻特に佛像は亦た一種の癖を有する。印度の莊重、支那の悠
揚に對してこれは執拗とでも云ふか、引締つた筋肉、細い胴、凄味の漂つた面相、精巧なる技工と相俟つて嶄然一
派を成すものである。西藏藝術に就いては尙ほ言ふべきものが甚だ多いが、茲にはこれを縷述するの邊がない。

第七節 涅 婆 羅 Nepal

涅婆羅はヒマラヤの南斜面に互る國土であり、其の位置が中印度と西藏との間に介在する關係から、又其の民
族が元來蒙古種である點から、其の建築も亦た印度と西藏の中間にある。又其の材料がヒマラヤ特産のデオダル
・パイン Deodar Pine と稱する松の一種が豊富である爲めに、茲に木造建築が發達し、其の形式は當然或る程
度に於いて支那系に類似のものとなるのである。宗教は現今喇嘛教よりは寧ろ印度教が主要である。涅婆羅の歴
史は便宜上省略する。それは主として中印度との交渉であるからである。西藏及び支那との交渉は、唐の太宗の
貞觀年間王玄策が西藏涅婆羅を経由して印度に使した時、涅婆羅の兵を率ゐて内亂を平げたことがあり、近くは
千七百九十年涅婆羅が西藏と戦つた時、支那は西藏を助け、印度は涅婆羅を助けたことがあり、千八百五十五年
にも西藏と戦つた。要するに涅婆羅藝術は西藏印度の中間とは言へ、多く印度に傾いてをり、同時に幾分極東の

調子を帯びてゐるところが面白いと思ふ。

涅槃羅建築には三種の型があると云へる。第一は佛塔型、第二は所謂コスタカル Kostakar 型、第三は木造多層型である。

第一の佛塔型は勿論中印度から傳來したものであるが、涅槃羅に於いて特殊の改竄を受け他に類例の無い一種の様式を作つた。首府カトマンヅー Katmandu の附近なるスワヤムプーナート Swayambhūth の大塔は其の最好例である。塔身までは別に異状はないが、相輪が甚だ奇である。先づ露盤の四方には必ず佛の眼眉及び白毫を刻む。九輪以上の調子は寧ろ西藏塔に似てゐる。此の相輪が涅槃羅塔の第一の特色である。

第二のコスタカルはスワヤムプーナートの大塔の前に見える建築でやゝ西藏化した佛塔を、四角な建築物の上に載せた形と見ても、又はピラミッド形の上に縮小した重層の堂の上に涅槃羅式の塔を置いたものと見ても差支ないので、これは佛堂として造られる。

第三の實例は第八二二圖バタン市の大街の右の方に見えるが如き建築で、一見多層塔の如くであるが、實は塔でなくして印度教の祠堂である。多くは石と軀で壁體を作り、深い軒及びこれを支へる斜の材は木材である。注意すべきは此の數層の深い軒の線は水平であつて少しも反轉はない。只だ其の隅端の處に、強く人の目を上に引き向けるが如き手法が施されてゐるので、これに由つて軒の隅が、動もすれば垂れ下つて見える錯覺を矯正してゐる。屋根の頂に相輪は無いが一種の寶頂がある。壁面や軒の支材等に甚しく猥雜なる彫刻を施すものがあるが、

これ等は印度教祠に普通の事である。此の種の實例の最好なるもの一は、バトガオン Bhatgan のデヴィー・パウリーニー Devi-Bawani 祠である(第八二三圖)。五重の塔の如き恰好もよく整ひ、前面階段の兩側に對立する石人石獸は、元來印度の靈獸を整列したのであるが、不思議にも支那の陵墓に見る石人石獸の排列と似てゐるではあるまいか。

第八節 緬甸 Burma

其の一 總説

緬甸は支那の魏晉に傳と云ひ唐に驛國と云つて入貢した。緬と云ふ名は宋以後の事である。ブルマと云ふ稱呼は恐らくは Brahma (梵覽摩)の轉訛であらうと云はれてゐる。

緬甸の古代の歴史は明確でなく、且つ甚だ紛糾してゐる。要するに固有の民族は蒙古種で北から入り來り、印度系の民族が南からイラワチ Irrawadi 河を溯つて入り込み、終に混血したのであるらしい。傳説によれば、亞育王の時、ソノ Sono, ウッタロ Uttarō の二人を此の地に派遣して佛教を弘布せしめたと云ふが、兎に角古代に於いて印度文化が南より侵入した事は確かである。今マルタバン Martaban の北四十哩のタウン Thattu に佛塔の遺跡があり三級の壇の上に塔が立つてゐるが、これが彼の布教使の造つた最初の塔であると云ふが眞偽は知らぬ。文化はイラワチを溯つてブローム Prone が中心となつた。ブロームは釋迦滅後百一年に建設され、西曆百七

年まで繼續したと云ふが遺跡は發見されてをらぬ。それから更にイワラチを溯つて中心はバガン Pagan に移つた。バガンは西曆百七年から始まり永く繁榮を見たが、千二百八十四年に元の忽必烈の爲めに滅ぼされ、緬甸は一時元の領土となつた。其の後緬甸は再び獨立し、都をイワラチの上流アヴァに建てた。時に千三百六十四年である。それから千七百八十三年にアマラプラ Annapura に遷都し、千八百五十七年にマンダレー Mandalay に遷都したが、千八百八十八年に英國に併合せられた。

宗教は全國を擧げて佛教獨り行はれてゐる。國內到る處に佛塔の林立し、僧院の臺を並べてゐるのを見る。或る町村に於いては民家の數よりも堂宇の數が多いくらゐである。其の建築は一種の全く特異なる様式を具へ、殊に其の裝飾的手法は極めて濃雜で煩縟であるが、これ即ち宗教に對する熱狂的信仰の表現に外ならぬ。此の様式の成立に關しては、大體三つの素因を認めることが出来る。第一は印度傳來の原型で、これが主體となる。第二は西藏、涅槃羅等から入り込んだものと觀るべき特殊の風貌、第三は國民固有の理想に基づく趣味である。

緬甸建築は歴史的に見て二大期を劃することが出来る。一は前期で、バガン時代の終までを包み、二は後期でアヴァ時代以後を含む。此の兩期の建築は可なり鮮明に其の性質の推移を示す。以下實例に由つてこれが説明を試みる。

其の二期

前期の實例を集めたバガンの遺跡は延長約六哩、幅約二哩に亘り、イワラチの東岸に約一千の寺塔の殘骸があ

る。第八二四圖は其の最古の型を存するもの一つで、中印度の塔に幾分西藏氣を加味したものの如くである。バガンの古建築中最も壯大なるものは三つある。一はアナンダ・バイヤ Ananda Paya (西曆一〇五七—一〇八五)、二はタピニユ・バイヤ Tapinyu Paya (西曆一〇八五—一一六〇)、三はガウダパリン・バイヤ Gaudapalin Paya (西曆一一六七—一二〇四)で、何れも同工異曲の型に成る。バイヤは塔の意である。第八二五圖はガウダパリン塔であるが、四角形の二層の堂の上に塔を冠した型と解すれば、涅槃羅のコスタカルと同系に屬することとなり、塔の基壇が發育して二層の堂となつたとすれば西藏塔に近いものとも解せられる。堂内には縦横に通路を設け中心に四方四佛の像を置くのである。アナンダ塔は全高百八十三尺、タピニユ塔は二百一尺、ガウダパリン塔は不詳であるが約二百尺と見て差支は無し。

別にボチ塔 Bodi がある。これは二層の堂の頂に五塔を立てたもので、恐らくは中印度の佛陀伽耶の塔を模範としたのであらう。

其の三期

前期に於ける伽藍の配置に就いては予は未だ的確なるものを知らぬが、後期に入つてより其の實例の示すところ由つて明瞭に知る事が出来る。即ち伽藍の中心は必ず常に塔であるが、此の塔に二つの種類がある。一は中印度の古代の窣堵婆と同意義のもので、中實の塔である。これはセチ Stupa と名ける。中印度のチューチヤと同意語原であるらしく、主として舍利を藏するのである。二は前記のバガンの三大塔の如く、下部が堂の性質となり

其の中に佛像を安置し、其の上に塔を立てた意味のもので、これをカラギヤウシ・カン・パイヤ Kalagyaung-Kan-Paya と稱してゐる。

此の中心の塔の附近に種々なる堂宇が配置されるので、其の主なるものは第一に幾多の小パイヤである。これは或は單純なる舍利塔式であり、或は佛堂式である。別にパイヤウット Payawut と稱するものがある。これは多くは單層で、陸屋根のものもあり塔を冠したものもあるが、純然たる佛堂である。パイヤサット Payahat と云ふものは、第八二九圖に示すが如き木造多層の塔様のもので二層乃至九層である。此の形式は緬甸獨特で甚だ奇巧であるが、目的は塔ではなくして主として塔又は佛堂の前に立てられる禮堂の性質である。伽藍の境内には以上の外鐘架、又は鐘堂がある。鐘架は二本の柱の上部に貫を通し、それに鐘を架けるので屋根は無い、但し二本の柱の頭部には擬寶珠又は複雑なる裝飾が施される。又タグンチン Tagundin と稱する高い木桿が立てられ、其の絶頂に多くはガルダ Garuda (迦樓羅、金翅鳥)の像を載せ、木桿の脚元を支へる爲めに二本又は四本の控柱を設け貫を以て貫通する。控柱の上には寶珠、或は二天、又は四天に相當する彫刻が立つ。更に又傘が置かれる。これはシャン Shan 民族から傳習したと云はれてゐるが、勿論眞偽は不詳であるが、石の柱の上に金屬製の傘蓋が冠せられたものである。今日緬甸の佛堂内を見るに、佛像の上又は左右に普通の傘がさしかけられてゐる。此の傘を永久的材料を以て造り、戸外に建てて佛に奉獻するものであらう。更に又境内に往々石彫の露佛があるが、予の知る範圍では高さ一丈五尺以上のものは無い。尤も涅槃像ではペグー Pegu に天然の岩丘より刻出した百八

十餘尺の巨像がある。伽藍の入口に巨大なる一對の獅子(シンチ Chinchi)を置く例もある。第八二六圖は其の好例で、これが緬甸式の獅子であり、高さは約三十尺餘である。

以上記述の型に由る後期の伽藍は、其の實例甚だ多く、殆ど枚擧するに苦むが、就中其の最も整備せる最も偉大なる最も重要なものは、ラングーン Rangoon のシュウエダゴン Shwedagon である。本來シュウエ・チ・クン・セチ Shwe-zi-Kumba-Ceti と云ふべきで、其の姿は第八二七圖の如く、塔の全高三百七十尺と稱せられる。元來釋迦の毛髮八本其の他の貴重品を埋藏する舍利塔で、創立は遼遠にして知るべからず、爾來修造に修造を重ねる間に、次第に大きさを増すと同時に様式を變へ、西曆千七百七十六年以來現今の姿となつた。即ちこれが緬甸獨特の塔の姿で基壇、塔身、相輪が相癒著して凹曲線の輪廓を作り、上に向つて鋭く尖るのである。其の全體は黄金を以て蔽はれてゐる。シュウエ・ダゴン Shwe-zi-Dagon は黄金の意であり、緬甸の巨塔は總て黄金を以て覆ふ風習であるから、塔の名にシュウエを冠するものが澤山あるのである。緬甸の財政窮乏に陥つた原因の一つは、國家が幾多の巨塔を屢々修築して其の都度多量の黄金を費すが爲めであると云はれてゐる。

第八二八圖はシュウエダゴン塔の基部であるが、茲に注目すべきは基壇の隅角に埃及のスフィンクスを聯想せしむる一種の人面獅身の彫刻である。緬甸でマヌシハ Manushia と云ふが人獅の意であると云ふ。此の彫刻は緬甸の各種の工藝品にまで適用されてゐるが、其の起原に就いては未だ確説を聞かぬ。或は西亞地方と何等かの交渉があるのかも知れぬ。

ペグーのシュウエマウダウ Shwemadaw はシュウエダゴンに次いで重要なものである(第八三〇圖)。ペグーは西暦五百七十三年に建都されたので、此の塔は其の當時の創立であり、第十六世紀に今日の姿となつたと云ふ。全高三百二十尺と稱するが、其の様式手法は殆どシュウエダゴンと同一である。

ブROOMにも類似の例がある。シュウエサンダウ Shwasantaw と稱し、全高百八十尺、基壇の周圍に八十三の龕子がある。創立は不詳であるが第十八世紀に入つて既に三回の修造を経てゐる。

やゝ異つた型の例にはラングーン市のスレー Tower 塔と稱するものがある。第八三一圖に示すが如く、其の輪廓は前記の諸例と同型であるが、只だこれは下から上まで八角形であり、従つて自ら別様の感を與へる。

更に又異なつた型を示すものはマングレーの附近にある所謂四百五十塔である。これは緬甸最終の王の父君ミンドン・ミン Mindon Min が西暦千八百五十九年に建てたもので、四百五十の小塔が並んでをり、各塔に一切經を刻した版が藏せられてゐると云ふ。第八三二圖は其の中心の大塔であるが、其の輪廓がやゝ前記の諸例と違ふ。此の外寧ろ中印度の古式に近い形のものも稀にはあり、其の種類を細別すれば、尙ほ擧ぐべき事もあるが、大體に於いてシュウエダゴンの型を以て緬甸後期の型を代表することが出来る。

其の四 僧房・住家

僧房建築は頗る異彩あるもので、外國の感化よりは寧ろ自發の性質に富むものと認められる。それは全然チーク材を以て構築したもので、其の特色の大部分は、屋舎の配置と屋根の形と裝飾的手法とにある。屋舎の配置は

第八三三圖に示すマングレーの王妃院を以て最も好例とする。先づ地上に高く床を作つて、これをキムピン Kyabin と名づけ、これに登る階をフレガ Hoga と云ふ。床のプランは其の上に造られる房室のプランに準ふ。房室は床の一端にバウガ Bauga 即ち二層の倉庫あり、次に三層の僧房あり、次に二層の住職の室あり、次に八層のバイヤサットがある。其の全體の外観は第八三四圖の如く、大小高低の調子が如何にも面白く、僧房とバイヤサットの關係は我が古代伽藍の金堂と塔との如くである。屋根は必ず切妻で直線であり、軒の線も直線である。一見切妻も軒も曲線狀に反轉してゐるが如くに見えるのは、裝飾的彫刻の爲めである。此の彫刻に就いては第八三五圖に示すところがやゝ明瞭であるが、これはラングーンの某僧房である。彫刻の題材は多くは龍、迦樓羅、一種の奇怪なる姿勢の人像、極めて煩はしく纏れ絡まりたる唐草等にて、それが何れも上に向つて閃き上がが如き勢を示し、棟の兩端、軒の隅、破風の尻等に於いて、一段と力を籠めて細く鋭き尖端が上空を突くのである。此の性癖が何處から出て来たかは知らぬが、緬甸主義とでも言ふのか、何に由らず此の氣分が現はれる。佛陀の頭、國王の冠等は勿論、殆ど總ての日常器具にまで現はれる。

緬甸の王宮はナンダウ Nanda といふ。第八三六圖はマングレーに残存する謁見所であるが、其の材料、構造、形式、裝飾等は全然前記の僧院と同一である。其の筈である、國王は同時に一國の最高の教主である。彼の玉座は殆ど佛の須彌壇と同型である。ナンダウの配置は今全豹を知り難いが、其の主要部分は大體第八三三圖の僧房の如く高い床の一端に九層のバイヤサットが立ち、次に三層の謁見所があり、それから三字の房を隔てて御座の間

がある。要するに僧院と王宮の間に建築的に見て毫も異なるところは無い。
 緬甸の住家、殊に北境雲南に近い邊の住家には我が國上代の住家と共通の手法が見えるのは面白い現象である。
 此の地方の緬甸人はシャン族と酷似せる風俗慣習を有してゐるやうであり、シャンの作る家は我が國の伊勢皇大神宮や出雲大社の形式に酷似してゐる關係から考へて、日本と緬甸との間に何等かの交渉があり得べき事を暗示する。此の問題に就いては茲には深く論ずる事を遠慮し、只だ予の寫生にかゝる北方緬甸のバーモ Bhamo 附近に於ける甲の民家のプランと、この民家の外觀を示して讀者諸君の参考に資するに止め度いと思ふ(第八三七圖)。

第九節 暹羅 Siam

其の一 總 說

今日の暹羅の地域は支那史に所謂扶南又は眞臘の大部分を占むるが、一部は林邑又は占城の領域であつたことがあるやうである。勿論扶南、林邑等の民族は暹羅人の祖先ではなくして南方から移住した異族であると解せられてゐる。暹羅人は本來タイ Ethai(自由の義)と稱する西藏緬甸種族で、雲南方面から南下し來つたと云ふから其の根源は恐らくは支那の西邊に在るので、漢民族に壓迫されて移動したのであらう。タイは第十世紀頃メナム Menam の上流に建國し、ソコタイ Sokotai に都した。それから漸次にメナムを下つて眞臘即ち東甬塞を驅逐し、第十四世紀の始めにプチーボ Puchibo なる者國內を統一して都をアユチア Ayuthia に奠めた。併し國運は餘り

隆盛でなく、兎角内憂外患が絶えず、現に第十七世紀の始めには我が日本の山田長政が國政に參與してゐる。西曆千七百七十一年に緬甸に滅ぼされ、千七百七十八年に漢人鄭昭これを再興し、バンコック Bangkok に都して千七百八十六年清の封冊を受けた。爾來東は佛國から壓迫され、南は馬來半島が英の勢力範圍に歸し、西北も英から脅威されてゐる有様である。

宗教は純然たる佛教である。元來扶南、林邑方面の佛教は印度の功德鎧 Guntayama が錫蘭を経て西曆四百十年頃林邑に入つたのを最初の記録とする。當時の林邑の範圍は詳に知り難いが、今日の安南の北部を除く全部、交趾支那、東甬塞の一部を總稱するのであらう。西曆四百八十年頃に僧鎧 Daghavanna が扶南に佛教を弘めたところがあるが、扶南は今の東甬塞を本土とし、暹羅の大部分を包括するのであらう。扶南は即ちフノム Phnom で丘の意であらう。東甬塞にはフノムを冠する地名が甚だ多い。現に今日の首府もフノムベン Phnompenh である。爾來印度の高僧が屢々此の地方を訪問し、佛教の勳化が強大となるに従つて暹羅人も亦た熱心なる佛教徒となつて今日に及んだのである。斯くて暹羅建築の源流は當然扶南又は眞臘にあり、それから一面に於いて著しく緬甸の感化を受け、兩者相混合して今日の暹羅式を大成するに至つたものと思はれるが、現今の暹羅建築は殆ど緬甸と同工異曲であると云ふも差支はない。建築の種類も佛寺、僧院、宮室が主要なものである。次に若干の實例を列挙して見よう。

其の二 實 例

暹羅では佛刹をワット Wat と呼ぶ。元來ワットは伽藍を圍む周壁の意であると云ふが、これは普通厚さ約三尺、高さ十二尺乃至十四尺に達する。此の周壁の中の建物の中で、最も主要なるものは本堂即ちポート Hut と、塔即ちフラ・セチ Pha-Cheti 又はフラ・プラン Phra Prang である。フラ・セチとは印度のストゥーパから出た型で、舍利を藏する爲めの中實のものであり、其の輪廓は緬甸のものに似てゐる。フラ・プランとは中實でなくして中に内陣を作り佛像を安置するもので、形状はストゥーパとは著しく異なり、基壇に相當する部分が異狀に發育して高くなり、塔身に當る部分は大體砲彈の形のやうに丸く細高く頂が丸められ、相輪は極めて簡単に處理される。

此の外附屬の堂宇が若干ある。ウ・ハン Vihan は僧院で、梵語のウ・ハラの轉訛らしい。カンブリエン Kam-brien は禮堂である。モンドブ Mondob 又はモラ・ドブ Moradob は四角な佛堂で立像を安置する。ホ・ラカン Ho-Rakhang は鐘堂であり、ホ・トライ Ho-Trai は經堂である。王宮に屬する伽藍にはチャタムック Chutamak と稱する十字形のプランを有する佛堂がある。これは四方四佛を安置する爲めである。伽藍に池があればこれをサウと名づける。

以上の諸堂宇は必ずしも常に具備するのではなく、又其の數に於いても必ずしも一定してをらぬ。例之ばソコタイのワット・ジャイ Wat-jai には一基のフラ・セチ、二字のポート、六宇のウ・ハン、三字のカンブリエン、一字のモンドブ、十字の小亭子、五基のフラ・プラン、百基以上の小フラ・セチがあると記されてゐる。此の外暹

羅の各地方に移しい佛寺があるが、實例としてはアユチア時代以前に溯るものは先づ無いと云はれてゐる。

第八三九圖はロブブリ Lopburi と云ふ處の小堂である。こゝはアユチア以前の舊市で、元來バラモン教徒の造つた神祠を暹羅人が佛堂に轉用したもので、様式上東甬塞式に屬するものである。暹羅建築の祖先は東甬塞即ち扶南であることはこれによつても親ひ知られる。

第八四〇圖はコーラット Kohat 附近のフ・マイ Phimai の小堂であるが、此の邊は古への扶南、後の東甬塞の領土であつた關係から、斯くの如き東甬塞式の建築が残存してゐるのである。以上二つの實例に由つて、暹羅のフラ・プラン型の源流が茲に在ることを知るのである。

第八四一圖はアユチアの遺構の一例で、中央の大建築はワット・フッタイスアワン Wat Phuttasawan のフラ・プランである。前記の東甬塞式建築から變化して暹羅式に移りつゝあるもので、内院の入口は高く基壇の上におり、階段によつてこれに達するのである。左右の尖塔形の建物はフラ・プランの特殊の場合と見るべく、塔身の砲彈形が錐形になつたものと解することが出来る。

第八四二圖もアユチアの遺構であるが、これは完全に暹羅式となつたもので、前にあるのがフラ・プランであり、後に見えるのがフラ・セチである。フラ・セチの形式は、其の鋭く上に尖る點は緬甸的であるが、相輪に十乃至二十餘の輪をつける點は彼に見ざるところである。

第八四三圖は現代暹羅式の代表的建築の一なるバンコックのワット・チン Wat-Ching のフラ・プランで、規模

は壯大であるが、趣味は著しく低下し、殆ど何處にも重厚勁健の氣魄を見ることが出来ない。

第八四四圖は恐らくは暹羅第一の巨大なるフラ・セチであらう。フラ・トンマセチ Phra-Thommachedi と云ふので、元來眞正の佛舍利を藏する小フラ・セチを、更に此の塔を以て覆うたのであると稱し、全高百十八メートルと云ふ。例の如く緬甸的輪廓と二十八輪を重ねた相輪を有する。

第八四五圖はバンコックのワット・アンマ・リン Vat Anna Rim の鐘堂である。其の屋根が殆ど純然たるフラ・セチの形式であることは注目すべき點である。

第八四六圖はバンコックのワット・ジュエン Vat Juen に於ける佛堂である。前面の一對の獅子、向拜の屋根の形及び其の裝飾、瓦の形及び葺方、建具等に多大の支那趣味の現はれてゐるのは面白いと思ふ。要するに、暹羅式と支那式との折衷と見るべきもので、恐らくは支那人に由つて建立されたる佛堂であらうと思はれる。

第八四七圖はバンコックのワット・スータート Vat Sutat に於ける僧房である。僧房も大體に於いて緬甸と同系であり、切妻の屋根の相重なる姿は殆ど彼と同様であるが、概して屋根は微かな凹曲線より成り、棟飾、破風飾等は緬甸に似てこれよりもやゝ簡單であるやうである。此の僧房の壇の周圍に立つ七重塔は安南邊に見る支那系の塔と酷似してをり、此處にも支那式の侵入を見るのである。

第十節 老 緬 Laos

老緬^{ラオス}は現今佛蘭西の保護國であり、主として瀾滄江と東京及び安南との間に介在する地方を占め、首府はルアンプラバン(良巴米 Luangphabang)である。東京安南では今老緬を哀牢と呼んでゐる。其の民族は暹羅と同族で、均しくタイであるが、タイが雲南より南下してメナム河の流域に向つたものが暹羅となり、瀾滄江の流域に向つたものが老緬となつたのであると云ふ。併し老緬は暹羅の如き著顯なる歴史も文化も有せざる如く、多く世界に知られずして今日に至つたやうである。

老緬の建築に關しては未だ充分に闡明せられてをらず、予も亦た多く知るところが無いが、想ふに重要な建築的實例は無いのではあるまいか。併し二三の報告に由つて、老緬建築にも亦た一種の特色があり、自ら暹羅式以外に一派をなすものであることを推知することが出来る。今試みに數例を擧げて見よう。

第八四八圖及び第八四九圖は共に河内の東洋學院 Ecole Française d'Extrême-Orient の標本室に藏する老緬の小塔である。一は三重であり、一は二重の塔であるが、大體に於いて同型である。此の型が何處から來たものか頗る諒解に苦しむのであるが、勿論林邑系ではなく、又勿論扶南系でもない。寧ろ支那系に近いが、支那系と認める譯にも行かぬ。然らば老緬固有の型と見るのが適當であらう。但し細部に就いて觀れば、其の寶頂は緬甸の塔の頂部に類似の點があり、甍子及び入口の手法には多少眞臘の氣分もある。文様佛像等は暹羅に近いやうであるが、これよりも粗野である。遺憾なのは此の興味多き小塔の出處も年代も不明なことで、此の點が明瞭になればまた研究に一步を進め得ると思ふ。

第八五〇圖は瀾滄江の東岸なるウイエンチャン Viengkang の塔で、恐らく老樁に於ける第一流の大塔であらう。塔の本體は中印度型に近いが寶頂は前記の小塔と同型に屬する。塔の前に在る小堂は暹羅系に屬するやうであるが詳細は不明である。

第八五一圖はチム・ヨン Chom Yong の塔であるが、これは又甚だ異例である。基壇は鼓形をなし、其の上は緬甸型の輪廓を有する手法を以て處理されてゐる。斯くの如き様式は他に類似の例を見ないので、やはり老樁人の創案と見ねばならぬ。なほ第八四八圖及び第八四九圖にも亦た此の塔にも、剝形の帶部又は壁面に五瓣乃至八瓣の花紋が賞用されてゐるが、これは梅花乃至蓮花と認められる。或は老樁の特殊の信仰の表象であるかも知れぬ。

塔の前にある小堂は既に明かに暹羅式である。首府ルアン普拉バンには必ず何等か現代の老樁建築を代表すべきものが在ると想はるゝが、これに就いて未だ知るところなきを遺憾とする。

第十一節 東 甫 塞 Cambodia

其の一 總 說

東甫塞は今佛國の保護國で南榮 Phnompenh を首府とする小國であるが、既往の隆盛は文獻に遺跡にともに顯著である。按ずるに漢の武帝の頃扶南と稱した地方は即ち此處である。後二百年外國の君主が人民を率ゐて入り

來り朝を立つと漢史にあるは、蓋し印度からの殖民を云ふのであらうと云はれてゐる。カンボジアと云ふ地名は古く西北印度の一角に現はれてゐる。此の地方から當地に移住して國をカンボジアと稱したと云ふ傳説は即ちそれであると附會する説もあるがこれは信ずるに足らぬ。第一其の民族は純印度系とは認められず、併し暹羅のタイの如き蒙古民族でもなく所謂クメール Khmer と云ふ特種の民族とせられてゐる。

西曆第二世紀頃此の王朝大いに版圖を擴張し、五六世紀頃から眞臘國として支那に知られ、始めて支那に通じたのは唐の武徳中であると云ふ。宋の趙汝适の撰に成る諸蕃志の中に眞臘の記事があるが、それに由れば首府は祿兀と云ひ、城郭宮室の美觀が特筆されてゐる。併し祿兀が何處であるかは予は未だこれを知らぬ。

西曆八百八十年乃至九百八年、シュリ・ヤシ・ヴァルマン王 Ch Jayavarman の時、今のトンレ・サップ Tonle Sap 湖の西北角に近い邊に大都城を造つたが、これが即ち有名なるアンコル・トム Angkor Tom で大王城の義である。都城は王の名に由つて耶輸陀羅城と稱せられ難攻不落を誇つたものである。

スールヤヴァルマン Suryavarman 第二世(西曆一一二二—一一六二)の時、王城の南に大伽藍を作つたのが即ちアンコル・ワット Angkor Wat で(即ち王城寺の義)、今や世界最大の驚異の一とせられてゐる。眞臘は蓋し此の頃を以て隆盛の極に達したのであらうが、其の後元の忽必烈の壓迫に遭つて其の附庸國となつた。これに就いて面白いのは、元の元貞元年(西曆一二九五)使節を眞臘に派した時、其の隨員の一人なる周達觀が「眞臘風土記」一卷を著し、具さに土地の事情を記述してゐるが、アンコル・トムに關する叙述は甚だ興味が多い。

西暦千三百五十年頃、隣國暹羅が強大となつて壓迫を加へたので、千三百八十八年に、アンコールは放棄せられ、都城はバッサン Bassan に移された。其の後一たび南榮に都し、千五百二十八年にロヴェック Lovéck に移り、千七百三十九年にウドン Udong に遷り、千八百六十六年に再び南榮に都して今日に至つたのである。

土人が自國をカンボチアと稱するのは古都カンブプリー Kambojuri (即ち所在の城の義) から出たので、今其の地をカンブプチャン Kampuchean と云ふのである。カンボチアは古へは甘宇智、激浦只、東甫、吉蔑などと書かれてゐる。

宗教は古へは印度教であつたやうである。佛教の傳來に就いては暹羅の部にも一言して置いたが五六世紀の頃に佛鳴が此の國に佛教を傳へたと云ひ。又錫蘭のドラフラマ・バプー Drakrama Bahu (西暦一一五五) が親交を結んだと云ふから當然佛教の交渉もあつたと思はれる。斯くて今日は佛教本位であるが、若干印度教が混淆してゐるやうである。

東甫塞建築の性質はまた一種異様であり、現代の建築は著しく暹羅の趣味を帯びてゐるが、本來緬甸暹羅の系統でもなく、中印度の系統でもない、今これを數言で竭すことは不可能であるから、次に實例を擧げてこれを説明するのである。

其二 實 例

實例として劈頭に擧ぐべきものは前記のアンコール・トムとアンコール・ワットである。暹羅人の壓迫に堪へずし

て此地を放棄して以來暹羅の領土となつて、徒に荆棘の裡に埋没されてゐたのを西暦千八百五十八年より千八百六十一年の間に佛人ミュオー M. Mohot が瀾滄江邊の探檢の際これを發見して忽ち世界に喧傳され、今や佛國政府の河内東洋學院で熱心に調査してゐる。佛國は西暦千九百二年に至り、斯くの如き世界的重大なる遺跡を暹羅の如き未開國に委ねるに忍びないと云ふ口實の下に、此の邊一體の地を再び東甫塞に編入したので、佛國をして斯くの如き口實を作らしめる程の重要な遺跡である。

アンコール・トムは眞臘風土記に曰ふが如く、四方濠を繞らした一城郭で、其の大きさは濠の外周で約三千三百米突四方であり、入口は東に二ヶ所、西、北、南に各一ヶ所ある。正門は東にあり、濠には不思議な石橋が架けられてゐる。それは橋の欄干が龍の形で、其の龍が九頭の首を直立させて親柱の役目をなしてゐる。龍體は五十四人の犍猛なる力士に由つてかゝへられてゐるが其の姿勢は恰も龍の逸走を引き戻さんとするものの如くである。橋を渡れば城門があり、門の上には五面の巨頭が物凄く立つてゐるが、それは印度教の神である。其の他累々たる巨石、彫刻が重なり合つて奇觀云ふべからず。城内は散々に荒廢してゐるが、其の殆ど中心に當る邊に一伽藍がある。即ちバヨン Bayon と稱するもので、其の規模は四百尺に四百三十三尺と云ふ略正方形をなし、元來五十二基の塔があつたと云ふ。其の殘存する細部や彫刻を見れば、創立當時如何に豪華であつたかを想像し得べく、其の建築の性質も推知せられる。第八五二圖は其の復原圖であり、第八五三圖は壁面の浮彫の一例であるが、右の下には殿宇が現はされ、左には佛像や、飛天や、舞伎の女體などが極めて濃雜に配置されてゐるが、此の氣

分が即ち東南塞獨特のものであることを知らねばならぬ。

アンコル・トムの南門を出て、正南に向うて約千七百米突行けば、街路の東に、西面して立つアンコル・ワットの正門に達する。これも四方に濠を繞らし、其の規模は濠の外圍で、東西約千五百米突、南北約千三百米突である。濠の四方に橋があり、門を備へたのであつたが、今は西の正門だけ残存してゐる。濠の内側には元來壁を繞らしたのである。さて全プランの大體はバヨンと同型で遙かにこれよりも壯大であり、中心に高塔を建て、これを繞つて三匝の廻廊を重ね各匝とも四方に入口を設け四隅に塔がある。就中西面は表通りであるから、參道の設備が他よりも鄭重であり、第二匝廊と第三匝廊との間に縦横の廊を入れて田字形を成し、更に第三匝の外に十字形の壇がある。其の前には參道を挟んで池がある。此の池は元來四方の參道にもあつたのであるが、其の他附屬の堂宇に就いては第一〇〇三圖に由つて大體を知ることが出来る。

茲に最も興味ある一事は、我が國水戸の彰考館に祇園精舎の圖と稱するものが珍藏されてゐるが、これは實はアンコル・ワットの圖である。此の事實は予が偶然に發見したので、これに由つてアンコル・ワットの原狀を考ふべき好資料を得たのである。祇園精舎の圖は第九九圖の如くこれをアンコル・ワットの圖と比較して見ると殆ど寸分の相違がない。其の書き入れの條項も現狀に對比して見て殆ど全く符合するのである。これがアンコル・ワットの圖であることは毫も疑ふ餘地が無いが、然らば此の圖の由來は如何、何故にこれを祇園精舎と誤記したか、やゝ冗漫に互る嫌ひはあるが簡単に説明を加へて見よう。

彰考館の此の圖の裏に一通の文書が貼り付けてあるが、これに由つて此の圖の由來が明瞭である。

其の文字は、

大猷院様御代長崎大通辭島野兼了を被爲召被仰渡候は中天竺摩伽多國祇園精舎へ罷越致見分罷歸可申旨被仰渡兼了奉畏候段御請申上候又被仰渡候は昔より代々の三藏法師天竺へ渡り候へども渡儀難叶多く相果申候如何其方は可參哉と御尋に付兼了申上候は代々の三藏法師共不了管に付多く相果申候其故は大唐より天竺迄之内幾千萬里と申儀難知或は於道惡獸にとられ或は盜賊に逢ひ多く禍に及申候凡日本道百里餘歩行いたし一切人家無御座候依て相果申候兼了罷越候儀は阿蘭陀船に乗船仕罷越候は天竺は不及申あらゆる世界を廻り候ても少しも氣遣無御座候旨申上候其年阿蘭陀船に乗船仕中天竺へ罷越祇園精舎に至り日本の寸尺を以繪圖いたし指上候旨右の序に日本の東海三千里先に大國有之候是は日本に可附國と存石碑を建日本國中と印罷歸申候正徳五年乙未予祖父忠義奉臺命在于長崎之日忠義聞于其土人某氏者(譯士歟)曰嘗聞者大猷院君命大譯士島野兼了者渡于天竺檢閱祇園精舎云實乎否乎答曰實也即示其所摸寫繪圖及書記焉忠義傳寫以家藏是也

安永元年壬辰十一月廿五日

藤原 忠 寄

即ち長崎の通譯官島野兼了なる者が、徳川家光の命により、當時長崎バタヴィア間の定期船に乗つて何處に上陸したかは分らぬが、東南塞に紛れ入りアンコル・ワットを祇園精舎と思つてこれを寫生したのである。勿論當時日本では支那以西を一括して天竺と稱してゐたので、實際暹羅内地に摩揭陀國と自稱してゐた地方もあつたと

云ふ説もある。暹羅人がアンコルを奪つた後此のアンコル・ワットを佛寺に引き直し、これを祇園精舎に擬してゐたことが無いとも云へぬ。然らば島野がこれを中天竺の祇園精舎と信じたのは當然である。

アンコル・ワットに就いては解説を要するものが甚だ多いが、茲には煩を避けて可成これを省略し、數點の寫眞に由つて其の建築の性質を略述するに止め度いと思ふ。

第一〇〇五圖は西の正門内である。左は門の一部で、下部に女神の整列する浮彫を見るが、これは幸福を司る神とせられてゐる。右の堂は島野の圖に寢釋迦と記入してあるもので、涅槃像を安置するものと思はれる。建築の様式は暹羅に似て暹羅に非ず、印度に似て印度にもあらず、柱頭は幾分泰西ドリア式に近く、屋根は彎曲せる輪廓を有し、石を瓦の如くに刻して葺くのであるが、其の瓦當に當るところに龍を賞用するのは特に注目すべき點である。窓の格子は算盤盤の珠を連ねた形で、印度にも無いのではないが、茲には反覆して賞用されてゐる。裝飾文様は暹羅系に近いものが多いやうである。

第一〇一三圖は第三廂廊の隅である。此の廊の内壁には一面に極めて肉の薄い浮彫が施されてゐる。藝術的に、巧妙と云ふには非ざるも、其の精細緻密なことは多く他に匹儔を見ない。島野の圖に「ケホリニ色々ケタモノアリ」「ケホリニイクサアリ」とあるは「ラーマーヤナ」の物語を現はしたものらしく、「ケホリニ四天ヲツナフヒク」とあるは、大海の中に濕縛の化身なる龜が浮び出で、其の上に山があり、山の上に巨神が立つ、龍が此の山と神とを併せて捲いてゐる。其の龍を百七十の諸天と阿修羅とが引き合ふので、これが爲めに神も山も急回轉

して海水逆巻き魚介悉く碎けて死すると云ふ神話である。但し、島野の記入の位置は何れも誤つて九十度づつ向つて左方に回轉してゐる。即ち東廂廊にあるを南廂に、南廂にあるを東廂に記入してゐる。第三廂廊内の田字形の廊に島野は四千體の金佛ありと記入してゐるが、今は約千體である。

第一〇〇七圖は第二廂廊の前面であり、建築の調子が甚だ鮮明に看取される。

第一廂廊の前面は、島野が「石段三十三段アリ」と記入した通りである。但し彼が四隅の塔を五重塔としたのはこれを日本的に誤譯したのである。中央の塔も隅塔も、何重と的確には數へられぬ。第一〇〇六圖に見るが如く砲弾形の塔は細かに層に分たれてゐるが、頂部に近づくに従つて漸く迫り、いつしか化して寶頂となるのである。これが即ち暹羅のフラ・プランの原型である。

第八五四圖は廂内の浮彫、裝飾文、窓の格子をや、明瞭に示したものである。尙、アンコル・ワットに就いては第九九六圖より第一〇一三圖に至る圖版を参照されたい。

アンコル附近には大小幾多の伽藍の遺跡が續々と發見されつゝあり、河内東洋學院から隨時報告が發刊されてゐる。今これを縷述する邊はないが、尙ほ一ヶ所の大伽藍を附加して置き度い。それはアンコルの東方二十哩のベン・メアレア Beng Mealea の祠堂で、第九世紀頃の建築と云はれてゐる。第八五五圖は其の復原的平面圖である。大體に於いてアンコル・ワットと同型で稍々これよりも小さいのである。

前記の諸例に由つて東甬塞建築の特色の大體を知るが、第一其の特異なるプランは元來何處から來たものか、

予は不幸にして未だこれを知らぬ。中印度に求むれば、佛教伽藍の配置には似ずして、印度教の祠堂に多く類似の點を有することは事實である。

東甬塞に於ける土木工事もまた驚歎すべきものがある。例之ばコーラットから東南瀾滄江に至る三百哩の古への國道は悉く石を以て鋪裝され、其の間の川々には美しい石橋が架けられてゐる。今現存するものの一に長さ四百尺、幅五十尺、モルタルを用ひざる水平疊積式の拱の構架に由り、龍の彫刻を以て裝飾されてゐると云ふ。第八五六圖は現に王都南榮に在る橋であるが、欄干が龍身であり、親柱が其の七頭の首であるのは、彼のアンコール・トムの城濠の橋の傳統である。要するに巨大なる石材、それは多くは砂岩石であるが、これを取扱ふ技術は頗る巧妙であり、殊にモルタルを用ひずして堅牢に疊積し、これに煩縟細なる彫刻を施して一種の神祕的な懷疑なる氣分を現はすことは東甬塞藝術の異彩である。

第十二節 占波 Champa

占波チンパの地域は時代に従つて同じからず、支那の周時代の越裳の地、秦の象郡の地、漢の象林郡、後漢以來の林邑は皆占波の故地である。降つて唐には占不勞又は占城と呼ばれ、元には占城又は占八と記されてゐる。明には占城とも占婆とも記録され、今の安南の廣南の新州が首府であつた。成化中占城は安南の黎朝の爲めに驅逐せられ、明に臣事して其の封冊を受けたことがあつた。清朝の中葉の頃に至つて國土全く滅亡し、占城又は占波の名

は消滅したが、其の遺血は今も猶ほ交趾支那方面に他の民族の間に混在してゐるのである。

占波の領域は時代を溯るに従つて其の面積が大きく、北に向つて延びてをり、時代を下るに従つて南に退縮してゐる。周漢時代には今の佛領東京及び支那の廣東までを占領してゐたやうであるが、漸次に漢民族に壓迫されて南下し、安南人が勃興するに及んで更に其の壓迫を受けて益々南下した。其の後西隣のクメール人の侵略に遭ひ、いよゝゝ萎縮して終に滅亡したのである。併し我が奈良朝に林邑の佛僧が渡來して、音樂工藝等を傳へたと云ふから、當時は恐らくは其の隆盛期であつたと想像される。

占波の民族は即ちチャム Chiam であるが、其の系統に就いてはなほ的確なる學說を聞かぬ。或は印度より殖民したものと云ひ、古への中印度の瞻波國は其の故地であると解する説もあるが頗る疑はしい。蓋しクメールと親近の民族であると認められる。近頃坪井九馬三博士は我が日本民族は即ちチャムであると唱へ、これを言語學の上から立證されてゐるが、未だ一般の承認を得るに至らぬ。

これを其の建築の性質から見れば、一面に於いては東甬塞に類似の點があるが、他面に於いては爪哇に近い點もあり、又兩者の孰れにも似ない極めて特殊の様式手法も見える。結局今日のところでは未だ明確に其の所屬を定めることが出来ないが、大體に於いて東甬塞系の一派と見ることが適當であると思ふ。

建築の遺跡は佛國政府の河内東洋學院の調査探検に由つて漸次に發見せられ、其の區域は當初は、今の交趾支那及び安南の南部に限るものと考へられたが、研究の進むに従つて漸く北上し、安南の中部より北部に及び、終

に佛領東京の南境まで到達するに至つた。これも實に占波の歴史を具體的に語るもので、極めて興味ある事實である。

つぎに主要なる實例の二三を挙げれば、第九七九圖はファン・ラン Phau-Rang の廢寺であるが年代は未詳である。其の様式は全く特殊で、既記の各地方の何れにも似ぬのである。四角なピラミッド型の堂の各層の四隅に、スツーパーから轉化したと解すべき小塔を置き、頂上にも同式の蓋を冠し、各層に切妻の向拜を附けた手法で、幾分爪哇の気分を感じしめる。第八五七圖はポ・ロメ Po-Rome の遺構で前者と同工異曲である。長方形のプランに切妻の大根屋を架けた實例は、第八五八圖のポ・クロン・ガライ Po-Klon Garai の遺跡に於いて見るが、實に不思議な意匠である。

以上の三例は兎に角同一型に屬するものと認められるが、此の外にまたやゝこれと趣を異にする別型がある。それは第九八〇圖のミ・ソン Mison の實例の如きもので、大體に於いてピラミッド式であるが、前型の如く奇怪でもなく、猥雑でもなく、彼に比すれば更に爪哇的性質に富んでゐる。第八五九圖は、ヴァン・ツオン Van-Thuong の遺例で、これは前者より一轉してピラミッドの輪廓が曲線になり、段層が細かに刻まれて、層數が明瞭でない點は、寧ろ一變して東甬塞に接近したかの觀がある。

此の外にもなほ若干の異型を見るが、前記は其の主要なるものと認められると思ふ。要するに占波建築は恐らくは最も特異にして最も珍奇なるものであり、一面に於いて爪哇に類し、他面に於いて東甬塞に似てゐることは、

即ち兩地方との密接なる史的關係を暗示するものと思ふ。惜むらくは予は未だこれ等の諸例の年代を的確に知らぬので、彼我交渉の歴史を説明することが出来ないが、何れも西曆第十世紀前後に溯るものであらうと想像してゐるのである。即ち安南の李朝以前で、其の勢力が今の佛領東京以南に延びない時代であらうと推測するものである。

第十三節 爪哇 Java

其の一 總説

爪哇は法顯の佛國記に所謂耶婆提、南北朝の閩婆、唐の阿陵 Kalinga であると言ふが、其の區域は必ずしも今日の爪哇に限られてをらぬとせられてゐる。爪哇の建國は前漢の宣帝元康元年(西曆前六五)と稱する説もあり、羅馬帝政時代に爪哇と交通の記録もあると云へば、其の遼遠なることを知るに足る。尙ほ茲に奇妙な傳説がある。それは西曆六百三年に西天竺のグジャーラー Gūjara の王が自國滅亡の豫感を待たので、王子をして海外に新國土を求めしめた、王子は大船六隻、小船百隻を齎し、四ヶ月間の航程の後一島に達し、茲に土著して建國したのが爪哇であると云ふのである。

此の傳説から爪哇の文化は印度から傳へられ、佛教もこれに由つて弘布されたと解する説も出て來るのであるが、これは信ずるに足らぬとせられてゐる。爪哇には既に古くから印度の移民があり、印度教が行はれてゐたや

うである。法顯は西暦四百十四年の爪哇訪問の紀行に、外道婆羅門興盛、佛法不足言と書いてゐる。尤も法顯の訪問したのはスマトラであらうといふ説もゐるが、當時はスマトラ、爪哇を併せて耶婆提國を成してゐたと見るのである。

爪哇人は元來マレー族であるが、夙に印度及び他の民族と混血したものらしく、文化は勿論印度傳來のものが要素となり、これに地方的色彩が加はつたのである。佛教の傳來は西暦四百二十年頃、印度の功德鐘 Gunavaman を以て嚆矢とする。其の後、七百十八年頃に印度の金剛智 Vajrabodhi が支那へ行く途中、爪哇に留まつて佛教を宣傳し、其の門人不空金剛 Amoghajaya は支那と爪哇の間に往來して佛教を弘めた。斯くて爪哇は一たび佛教國となり、支那と文化の交換もしたが、元の世祖が爪哇を伐つて大いに蹂躪した爲めに一時混亂に陥つた。明に至つて再び支那と親善の交りを結んだが文化は既に下降したやうである。これより先き趙宋の世に回教徒が爪哇に入り込み次第に勢力を扶殖して終に印度教及び佛教を驅逐し、今日に至つては回教が爪哇の全土に行はれてゐるのである。

歐人の始めて爪哇に干涉したのは葡萄牙人で、西暦千五百十一年の事である。次いで和蘭人、英人がこれと競争を試みたが、終に和蘭人の勝利に歸し、千六百二十年、彼はバタヴィア (舊名ジャカトラ *Jakarta*) を根據として經營を進め、千八百十六年以來爪哇は終に和蘭の領土となつたのである。

爪哇の佛教藝術が印度に負ふものであるは勿論であるが、其の建築の様式手法等は中印度に似ず、前節にも述

べた如く占波、東甬塞に似た點もあり、塔の輪廓は幾分錫蘭に近い處もある。其の佛像及び裝飾的彫刻の性質は多くは豐滿端麗で、印度及び印度支那方面に見るが如き枯瘦、冷硬の態度でない。これ畢竟爪哇の風土及びこれに陶冶された國民的心理の發現であらう。爪哇は赤道直下の小島ながら、氣候適快にして、土地肥沃に、國民概ね理肌細膩である。藝術も亦たこれに準じて溫柔であり、意匠に甚だ藝術味の豊なるものがある。たゞ近頃往々極めて煩瑣纖細なるものや、奇怪異形なもののあるのは、即ち會々廢頹的傾向の發露した所以である。

其の二 プロ・ブドル Buro-Budur

爪哇佛教建築の實例中最も古くして、最も重要なものは、勿論世界的に有名なるプロ・ブドルである。其の年代に就いては、或は第七世紀の初半期と謂ひ、或は第八世紀に屬すと曰ひ、更に或は第九世紀に降ると唱ふるもあつて、未だ確實なる説が定まらない。これを斷定することは困難であるが、様式手法の上から考察すれば第八世紀と認めることが穩當らしく思はれる。

其のプランは第八六一圖の上圖の如く四百尺に餘る正方形の隅に、二重几帳面を取つたやうな形であるが、これは印度建築に於ける常套手段で、畢竟印度傳來である事を示すものである。さて其の様式手法は、前圖の下圖に見るが如く、低いピラミッド型に、同じプランを反覆して六段を重ね、更に其の上に三段の圓い壇を重ね、最後に其の頂に大塔を載せたものである。圓壇の上には小塔が繞らされ、其の數は上壇は十六基、中壇に二十四基、下壇に三十二基、合計七十二基であるが、第八六二圖は其の全景、第八六三圖は中央の大塔及びこれを繞る小塔

であるが、何れもやゝ錫蘭塔に似てゐるのは注意すべき點である。

下の六重の段は四方に階を設け、段の外面には全部精巧微妙なる浮彫が施され、段の外端欄干に相當する部分は佛龕、小塔、種々なる彫刻を以て完膚なく處理されてゐるので、其の細部の説明は到底竭すことが出来ない。(第八六四圖)。

プロ・ブドルの價値は其の建築としての様式手法、材料構造の點よりも、寧ろ其の彫刻にあると認められ、或は更に佛教史研究の資料としての點にあるとせられる。建築的に觀れば爪哇建築は中印度式が錫蘭及び後印度を經由し、若干の改竄を重ねて此の地に傳來したもので、眞臘占城に似てゐる點があるのも、暹羅緬甸との關係の見えるのも、錫蘭の氣分が認められるのも、歴史的に當然の現象である。

彫刻は其の藝術的の價値も十分であるが、其の題材、構圖に取るべきものが多い。段の壁面の總延長約五千尺の間に隙間なく施された浮彫の主要なる部分は佛傳であるが、其の他には地方的傳説もあり、其中に現はれたる佛、菩薩以下多數の男女、動物、樹林、殿宇等皆精巧緻密を極め、殊に其の構圖には往々非常によく纏まつたのがある。人像の特色は其の體格の豐滿細膩なること、表情の概ね溫柔なることで、これ即ち爪哇土人の特殊の風貌が型典となつた爲めである。第八六五圖は其の一例である。

彫刻に現はれた佛傳の中には、中印度又は健駄羅に見えない特殊のものもあるといふ。これは佛教史家の最も興味を以て見る處である。

第八六六圖は和蘭政府に於いて公刊したプロ・ブドルの詳細なる實測圖の中から、特にスツーパー及びこれと關係ある裝折や佛具の例若干を抜萃したものであるが、佛教建築史上多大の興味があると思ふ。1、2、3、6、11、は共にスツーパーであるが其の意匠が各自に異なり、殊に8は西藏型になり、2は印度サラセン式の球蓋に變化し、6、11も、これと同様である。即ち印度サラセン式の球蓋は元來スツーパーから發達したもので、決して回教建築の傳來でないといふハヴェル氏の説に對して、有力なる後援をなすものである。4、5、7は佛前の供物である。8も供物であるが、これは明かに蓮華である。9は香を手向けた場面で、香爐から煙が立ち昇つてゐる處である。10はスツーパーが一變して厨子となつたものと解せられるが、其の屋根の形は如何にしても支那系の感がある。第八世紀に於ける爪哇と唐との交渉は既述の如くであるが、此の一例を以て何等か其の消息を説明する資料と考へることが出来るかと思はれる。

其三 自餘の實例

プロ・ブドルを距ること二哩半にチャンヂ・メンヅット Chandi Mendut がある(第八六七圖)。約七十尺四方高さ十五六尺の壇の上に三重のピラミッド型の堂がある。其の下重は四十五尺四方で、内には釋迦三尊が安置されてある。これは佛堂であるから、其の様式はプロ・ブドルとは其の外觀を異にするが、其の手法に於いて共通の意味が明かに見える。年代はプロ・ブドルよりも半世紀以後であると認められる。此の附近にチャンヂ・パウオ Chandi Pawon がある。前者と同型で二十八尺四方、高さ五尺五寸の壇の上に十字形の佛堂が立つので堂の長

廣共に十七尺である。

プロ・ブドルの東方十八哩にチャンヂ・ジャン Chandi Jabang がある。二成壇の上に圓い塔型の堂を立てたもので、始めは五重であつたであらうと考へられてゐる。初重の四方に突出部があり、それが入口であるが、其の上に爪哇獨特の怪獸の如き彫刻がある(第八六八圖)。

プロ・ブドルの東南二十哩のプランバナム Prambanan に七つの重要な佛寺がある。其の最古のものはチャンヂ・ロロ・ジョングラン C. Lolo Jongrang と云ひ、其の外圍は七百二十尺四方で、内に百五十六の小堂があり、内圍は三百六十尺四方で内に六つの堂がある。斯くの如く小堂を配置する方法は他の地方には未だ見ざるところで、其の起原に就いては予は未だ説を聞かない。第八六九圖は小堂の一で、プロ・ブドルの各段上の小龕子と同工異曲である。年代は恐らくは第九世紀の始頃といふ。

チャンヂ・セウ C. Sewu も亦これと同型で、外圍の大きさは四百六十七尺に五百二十五尺の矩形であり、其の中に十二尺四方、高さ二十尺の小堂が整列すること第八七〇圖の如く、中央に四十五尺四方佛堂があり、堂の四方に入口の突出がある。年代は西曆千九十八年とする説があるが大差なきものとされてゐる。

チャンヂ・プラオサン C. Plasam は前者の東四分の三哩にあつて亦た大規模の佛寺である。その他、チャンヂ・ルンバン C. Lunbang、チャンヂ・サリ C. Sari、チャンヂ・カリ・ニン C. Kali Bening 等孰れも伯仲の間にある重要遺跡である。

爪哇の東部にはケヂリ Kediri 及びメラン Melang を中心として、其の附近に夥しき遺跡がある。就中チャンヂ・バナタラン C. Panatarang は最重要である。第八七一圖に示すが如く其の大體の形はピラミッド式で、最下段は八十尺四方、ラーマ・ヤナ及び地方的傳説の彫刻があり、第二段は六十五尺四方で、地方的傳説の彫刻があり、第三段は三十四尺四方で、迦羅樓其の他の怪物が多く現はれてゐる。即ち印度教の趣味が可なり浸潤してゐることを示すもので、第十四世紀の作と認められる。

バナタランには此の外奇異なる實例が二三ある。例へば堂の基壇各面に二頭の蛇があり、それが頭を擡げて昇階段の袖石を成すの類で、蛇即ち龍を濫用するの風が後期に行はれたやうである。メラン附近のツムバン Tum-pang 地方にもチャンヂ・ジャヨ C. Jago、チャンヂ・シンガサリ C. Singasari 等の重要な實例がある。

爪哇の中央なるチェン高原 Dieng Plateau の上、プロ・ブドルの北三十五哩に當るプラン山 Mt. Prahu の麓にも若干の遺例があるが、それは印度教の神祠で、例へばチャンヂ・ビマ C. Bima、チャンヂ・アルジュナ C. Arjuna 等で、中印度のチャルキヤ Chalukya 式に類似の點があり、年代は第十三世紀以後とされてゐる。

島の中央スク Sum にも近古時代の遺例がある。それは第十五世紀の中葉のもので、廢頽的に傾いた印度教の神祠であり、彫刻なども甚だしく猥雑である。なほ爪哇の東に接する屬島バリ Bali にも此の系統に屬する實例があるが、多く説明する程のものでもなく。

第三章 閩伊那教建築

第一節 古代閩伊那教建築

ジャイナ教は其の教義が佛教に似てゐるが如く、其の建築も亦た佛教建築に似てゐる筈であるが、其の古代の遺例に乏しい爲めに、真相は十分に闡明されぬ。今日判明してゐる範圍にては、オリッサ Orissa 地方のウダヤギリ Udayagiri 及びカンダギリ Kandagiri に於ける石窟寺が最古のものである。これは久しく佛教のヴィハラと認められてゐたが、研究の結果ジャイナ教に属することが確められた。ウダヤギリには多数の石窟があるが、就中重要なもの五つあり、其の中には亞育王文字の銘のあるのがある。建築として最も重要なのはラニ・グムファ (王妃窟の義) で、上下二層あり、下層は正面に三室を作り、上層には正面に五個の小室が並び鑿たれ、上下ともに室の前に廊が作られてをり、其の體裁は全く佛教のヴィハラと同型である。第八七二圖は其の一部で、粗略なる技工であるが、入口上の印度拱及び欄の手法が面白く、其の上の彫刻は兩勇士が一婦女を争つて格闘し、勝者が婦を携へて去る物語を一圖に纏めた趣向で、恐らくは此の窟寺と何等かの因縁があるのであらう。

第八七三圖は同處のガリーネサ・グムファ(象窟の義)の前面である。前者と同型のプランであるが、此の廊の柱は印度特有の様式を示すもので、其の頭部に彫刻の腕木を出した手法は實に妙である。昇り段の左右に象の彫刻がある。これ窟の名の由つて起るところであるが、流石に象は印度が本場であり、寫實の妙を極めてゐる。此の窟もラニ・グムファも恐らくは西曆前第一世紀若しくはそれ以前に属するものと認められる。

第八七四圖はカンダギリに於ける最大の窟寺で、アナンタ・グムファ Ananta Gumpā と云ふ。前例と同異曲であるが、其の彫刻の手法が彼よりも幾分精巧に傾いてゐる點がある。併し前者と同年代と見て差支ないと思ふ。

以上の諸窟が佛教に属するもので無いことは、其の何れの部分にも佛傳又は佛に關係ある彫刻物の無いことによつて證明さるゝと謂ふ。尤も波斯印度式の柱頭、蓮、其の佛教建築と共通なる裝飾は多く用ひられてゐる。

聯合州のマトラ Muttra (秣菟羅) から發見された貴重なジャイナ教建築の斷片は甚だ有益なる暗示を吾人に與へるものである。就中、第八七五圖は其の最も顯著なもので、中央のスツーパー、其の兩側の石柱、其の前の石門及び石欄はすべて全然佛教のものと同じである。こゝに注目すべきは石欄上の一對の女人像であり、嬌態をなして陰部を露出してゐる。此の現象はジャイナ教に於いては珍らしくないので、第八七六圖などは其の好例である。これは或るスツーパーに附屬する石欄の殘片である。

其の後のジャイナ教建築には石窟は餘り多くない。これは教義上外氣に觸れ、日光に暴露することを善しとするが爲めで、赤裸々主義も畢竟此の意味から出たのであらう。窟寺の好例は北方ではエローラに在り、南方では孟買州のバダミに在る。エローラには數多の窟寺が並んでゐるが、就中第三十一號のインドラ・サブハ Indra

Saha が最も顯著である。此の窟寺の入口に自然の岩山から刻出した小堂があり、左に石柱、右に象が同じく刻出され、窟室内は第八七七圖に示すが如く、太く短くして力ある柱が立ち並んでゐる。此の柱の様式はアジャンタの佛教窟寺と類似の點もあるが、更に南方印度教式即ちドラヴィダ式にも似てゐる。畢竟其の中間に位するものである。年代は西暦五百五十年乃至六百年の間と認められてゐる。

パダミに於けるものは、第四號窟が最も觀るべきもので、窟内にジャイナの立像があるが、これは南方ジャイナ教式に屬するものであるから、第三節に於いて更に説明する。

古代から第十世紀頃迄の間に於けるジャイナ教建築の遺例は略ぼ上述の如きもので、完備した構造的殿堂や、僧房の實例が無いので、其の真相は十分に分らぬが、要するに本質に於いては佛教建築と同一であり、其の間に様式の區別を立てることは出来な。

而して、第十世紀以後に及んで現はれたジャイナ教建築は、既に完全に一種獨特の様式を大成してゐるのである。

第二節 北方闍伊那教建築

其の一 建築の構造様式

ジャイナ教祠堂として今日に残存するものは、多くは西北印度地方、殊にグジャラーラト地方に集まつてゐるが

其の最古と認めらるゝものも、第十世紀或は第十一世紀と考へられてゐる。紀元前後から第六七世紀に至る極めて少數の石窟建築の實例を見て以來、約數百年を経過してゐる間に、一つの建築の殘影も見ないのは何故であるか、頗る奇異の感があるが、これに對する確なる説明を與ふことが出来ない。印度に於ける第八世紀から第十世紀に至る約二百年は、所謂暗黒時代として、其の真相は未だ充分に闡明せらるゝに至らぬのであるが、此の暗黒時代が一過して、再び光明の世界に立ち歸つた時、印度の建築界の状態は、正に其の面目を一變した。ジャイナ教の建築も亦た何時の間にか一種特殊の様式を大成し、印度教の諸建築と相對峙して、一方に覇を成したのである。

其の様式は、本堂は印度教のそれと同型で、大地から湧き出したやうな、四角な塔のやうな形を成し、微妙なる凸曲線の輪廓を描いて、上に寶頂をいたゞくのである。此の塔狀の堂をシカラ Sikara と稱し、上部の壓縮した球のやうな部分をアマラカ Amalaka と云ひ、更に其の上に寶頂が冠せられる。アマラカは元來果實の名であるが、茲に適用されたアマラカは果實の形から變化したものと見え、其の因縁に就いてはなほ不明である。

シカラの形の成立に就いても一定の學説は無い。或はスツーパーの塔身が高く延びたのであると解し、或は構造上の必要から已む無く斯くの如き形になつたと考へる。即ち四角な堂室の上に比較的小さい石材を以て、梁を用ひずして天井を作る爲めに、壁の上端四方から少しづつ、石材を積み出し、漸次に徑間を狭めて終に一枚石で蓋を施すまでには相當の高さになるのである。凡そ印度建築の構造は必ず石を水平に積み重ねるので、其の輪廓が拱

状であると否とに關係しない。これシカラの形状の必然塔状をなす所以であると云ふのであるが、孰れが正しいかは明白でない。

本殿の前に接して拜殿があることも、印度教の神祠と同様である。普通略ぼ正方形のプランで、其の構造は本殿と同じであるが、屋根はシカラの如く秀高でなくして、低い方錐體をなす。天井の手法は、普通先づ室の四隅に斜に石を架け、同様の手法を反覆して漸次に徑間を狭め、終に最後に一枚石で覆ふに至つて止むのである。其の圖解は第八七八圖及び第八七九圖に示すが如くである。

大なる祠堂に在つては、拜殿の前に更に前殿があり、時としては更に其の前に向拜がある。此の數字は相合して一塊の綜合的集團を組織する。なほ大規模の伽藍に於いては、此の集團の周圍に廻廊があり、廻廊は多數の房室に仕切られ、其の一房室が各本尊を容るゝ一小堂として、屋根に小シカラを有する。此の場合に於いては、伽藍の外貌は宛然シカラの森林の如き奇觀を呈する。

細部の手法の中に就いて、特に奇異なるは柱頭上の持送りである(第八八〇圖)。柱の仕立て方には種々あるが、其の全高の約三分の二の高さの邊に、鐔のやうな覆輪を施し、それから異様な持送りを斜に挺出せしめる。此の持送りが兩方の柱から相對して出る時、一點に相合して天井に接するので、こゝに一種の拱形を作るのである。多くの場合に於いて持送りは甚だ纖巧柔弱な感があつて、構造的意義は無く單に裝飾的使命を遂ぐるに過ぎない。往々又變形を重ねて終に美しい半圓拱を作るものもある。これ等に就いては後に實例に由つて説明するのである。

ある。

裝飾的手法には往々甚だしく猥雜なるものがある。堂宇の壁面、柱、天井等に完膚なき迄に彫刻を施した例もあるが、それ等は多くは教義から出發した信仰的動機に由るものであるが、殊に目立つのは大小無數の男女の人像である。それは多くは半裸體若しくは全裸形であり、其の奇異なる姿勢は人目を惹くに足る。拜殿の天井の内面に賞用せらるゝ舞女の彫刻の如きは其の好例である。から草や幾何學的文様も可なり多量に現はれ、多くは古代印度文様の系統を襲踏してゐるが、既に重厚堅實の精神を失つてゐる。

其二 實 例

實例の顯著なるものはグジャラーラト地方に集まつてゐる。第一はパリタナ Paltana の郊外サトルンジャヤ丘 Satrunjaya Hill に於けるもので、丘の頂に無數の祠堂が群集し、シカラは林の如くに立ち並んで壯觀を極めてゐる。其の最古のものは第十一世紀に溯ると云はれてゐるが、何れも幾度か修理された爲めに、古式は殆ど改竄されてゐる。丘は南北に分れ、北丘に於ける最大の祠堂はアーチナート Adinath を本尊とし西暦千六百十八年に建立された(第八八一圖)。南丘に於ける最も顯著なるものはムラナーヤッタ・スリ・アチスワル Mulanayak Sri Adisvar の堂で、創立は西暦九百六十年であつたが西暦千五百三十年に第七回の改修を行つたと云ふ。

パリタナの西にギルナル Ginnar 山と云ふ死火山があり、其の頂に一群の祠堂がある。就中重要なるは第二十二世のチルトンカラなるネミナート Nemihath の祠堂である(第八八二圖)。西暦千二百七十九年の建築で、圖の

奥の方に見える通り、四角な塔壁の中央に本殿のシカラが高く聳えてゐる。次に重要なものはヴェスツパーラや *stupa* の祠堂で西暦千七百七十七年の建立にかゝり、前者と路を距てて相對してゐる。第八八二圖の前方に見えるシカラは其の本堂であり、其の左右に見ゆる球蓋は拜殿の兩翼に立つ特殊の堂である。向つて右の球蓋の内には高い山を象どつた壇を築き、これをスメラ *Sumera* と稱してゐるが、恐らくは蘇迷盧即ち須彌山であらう。然らば佛教の理想と同じである。第八八三圖は拜殿の天井である。其の意匠の如何に繊細であるかを見よ、又其の人像殊に舞女の特有の姿態を見よ。

同所に又サムプラチ・ラージャー *Sampati Raja* の祠堂がある。其の廻廊の格子は第八八四圖の如く、格間に一々異つた幾何學的文様が嵌入してある。これは多くは何等か教義から出たものらしく、其の内には佛教に共通のものも見える。

ラジュプタナ *Rajputana* 領の南境に近きアプー山 *Mt. Abu* には更に有名なる實例がある。山は海拔五千乃至六千尺に達するが、其の頂上に二群の祠堂がある。一をデルワラ *Dilwala* 群と云ひ、他をアチルガル *Achigar* 群と云ふ。デルワラの方には殊に善美なる實例があるので、これ實にジャイナ建築の最も完備せる最も精巧なるものである。それは次の二つである。

一はウイマラ *Vimala* (維摩) の祠堂で西暦千三十二年の創建にかゝり、其のプランは最も完備したもので第八八五圖に示すが如きものである。全部白大理石を以て造り、内部の彫刻の緻密さは到底これを叙述する事が出

來ぬ。第八八六圖は其の柱の下部の手法を示す一例であるが、これをもつて他を推すことが出来る。二はテジャーバーラ *Tejapala* の祠堂で西暦千九百九十七年乃至千二百四十七年の間に作られたのである。其の規模手法に於いて前者と殆ど同程度のものであるが、彫刻は更に彼よりも微細なるものがある。第七一一圖はジャイナ建築の特有の一なる柱頭上の持送りを示すもので、意匠の奇、技巧の妙は極端まで達してゐると云へる。此の建築は十四年間の歳月と千八百萬ルーピーの工費を要したと云ふ。

アチルガル群の方には特筆すべきものは無い。

セントラル・インディアの北境グワリオル *Gwalior* には又一種の異例がある。これは元來一帯の小丘の頂の平地を城壁を以て繞らし、其の壁内に各種の建築があつたのであらうが、回教徒の爲めに破壊されたので、今はラージャー・マヒパル *Raja Mahipal* が西暦千九百九十三年に作つたと云ふジャイナ祠堂の敗残せる趾を残してゐる。茲に珍らしいのは丘の絶壁に巨岩から無數のジャイナ像を刻出してゐること、五ヶ所に各群像をなしてゐる。其の最も目ざましいのは丘の中央に當つてウルワリ *Urwali* 群と稱する一團である。大小不同の赤裸々のジャイナ像が並んで直立してゐる其の中で、最大の高さは五十七尺である。予の自ら測つたところによれば足の大きさは九尺であつた。即ち現今北部印度に於ける最大の彫像である。其他二十尺乃至三十尺の像は數十ある。これ等の工事は總て西暦千四百四十年乃至千四百五十三年の間に完成されたと云ふ。

カジュラーホ *Khajuraho* はアンラハバト *Allahabad* の西南西約百四十五哩に在る荒廢せる僻地であるが、西

域記に所謂擲枳陀國に比定され、重要な古趾に富んでゐる。こゝに數十の堂宇が散在してゐるが、其の一群がジャイナ教に屬するので、其の最も完全にして最も優秀なるものはパールスワナート Palswanath の祠堂で(第八七圖)、其の外観は本殿、拜殿、前殿、向拜が遞次に高さを減じたるシカラを備へつゝ、互に相癒著して一塊の團集を成すが如くであるが、内部は本殿、拜殿、向拜の三區に別れてゐる。外壁面の彫刻は濃雜を極め、不遠慮なる男女の像に満ちてゐる。現建築は西曆千八百六十年の修繕にかゝると云ふが、其の様式は第十一世紀頃の古式を存するものである。

こゝに珍しい異例が二三ある。其の一はチ・アンサット・ジョギニー Chansat Jogini と云ふもので、長方形の中庭の周圍に六十四の小房が圍繞し、各房各小シカラを備へてゐるのである。他の一はガantai Chantai と稱せられ、長方形の本堂の前面に向拜を附けた形で、頗る奇巧である。一見印度教建築の如くであるが、調査の結果其のジャイナ教に屬することが闡明されたものである。

チットール Chitor はラジュプタナ地方の南部に於ける重要地の一つである。こゝにも一群のジャイナ教建築の遺跡があるが、其の最も觀るべきものは二基の塔である。其の一つは第八八八圖に示すもので、名譽の塔と俗稱せられてゐるが、スリ・アラート Sri Alar の塔と云ふのである。全高七十五尺、其の輪廓は數層に分たれ、一伸一縮の觀があつて甚だ妙である。ジャイナ教の第一祖アチナートを祀るもので、表面に多くの其の像が彫刻せられてゐる。創建は西曆八百九十五年であると云はれてゐるが、其の様式手法から見ると第十二世紀に屬すると

考へる説が正しいやうである。

第二の塔は俗に勝利の塔と呼ばれてゐる。即ち西曆千四百二十八乃至千四百六十八年の間、チットールに都して鼻雄の名を馳せたタンボ・ラナ Kumho Rana 王が、其の戦勝の記念の爲めに建てたと云ふのである。第八八九圖に見るが如く九層の塔で、其の様式は大體前者に似てゐるが、妙味は遠く彼に及ばない。其の高さは百二十尺、廣さ下層に於いて三十尺、最上層まで登り得る設備を有してをり、技巧は勝れてゐるが堅實の觀に乏しい。茲に注目すべきは兩塔共に其の輪廓が一本の柱の調子であることである。アプー山の祠堂の或る柱を擴大したならば恐らくは殆ど此の塔の形となるであらう。兎に角ジャイナ教建築に斯くの如き塔を見ることは極めて興味が多いことである。

此の外にもジャイナ教建築の遺例はなほ少くはないので、記すべきものも若干あると思ふが、姑らくこれを省略するのである。

第三節 南方閩伊那教建築

南方ジャイナ教建築は主としてハイデラバード以南に行はれてゐるが、北方とは餘程調子の異なる處がある。これに二つの種別がある。一をベッタス Bettas と云ひ他をバスタス Bastas と云ふ。ベッタスは全然北方に無いもので、中央に開放せる中庭を取り、周圍に小さい房室を繞らし、中庭の中央に本尊の赤裸々の巨像を立てるので

ある。これはチルトンカラであるべき筈であるが、特にゴーマタ Gomata 又はゴーマテスワラ Gomateswara と呼ばれてゐる。

實例として古來知られてゐるものが三つある。其の第一はマインソル國のストラヴァナ・ベルゴラ Sravana Belgola に於けるもので、現場の自然の巨巖から彫抜きにしたものである(第八九〇圖)。其の高さ五十八呎と稱するから實に印度最大の彫像である。赤裸々の像の足の下から草が生ひ出て、兩脚に纏ひ上り、延びて兩腕に及ぶので、怪相人目を驚かすものがある。第二は南カナラ Kanara のカルカラ Karkala にあるもので、前者と同型であるが高さ四十一呎五吋であり、勿論一塊の石で彫刻したので、工場から現場へ運搬したのである。年代は西暦千四百三十二年と記録されてゐる。第三は同じく南カナラのイエヌール Yenuur にあつて、其の高さは三十五呎である。年代は西暦千六百四年であると云ふ。

前節に述べたバダミの例は、規模は小さいが形に於いては殆ど全く前者と同様である。年代は確實には分らぬが、西暦六百年頃と考ふる説もある。

バスチスは其の建築のプランに於いて北方式と大差は無いが、其の外観は殆どドラヴィダ式と違ふところがなく、壁體は勿論石造であるが寧ろ柱本位であり、軒以上數層を重ねて終に小さい球蓋に終るが、其の輪廓の線は北方の如く曲線をなさずして直線をなすのであり。一體に木造建築が石造に進化したかの觀がある。元來南印度殊にバスチスの實例のある地方はガート Ghat 山系に屬し、山中には樹木が少くない爲めに古代に於いては木

造建築が發達し、それが時と共に變轉して石造になつたものと考へられる。

實例はストラヴァナ・ベルゴラに最好のものがある。こゝにはインドラギリ Indragiri (帝釋山)とチャンドラギリ Chandragiri (月山)との二つの山があり、インドラギリの上には前に述べたヘクタスの巨像がある。インドラギリには十數の伽藍があつて、中には堂々たる大規模のものがある。

バスチスには往々燈柱のやうなものが附屬してゐる。下に基壇があり、其の上に細高い柱が立ち、其の頂に小堂のやうなものが冠せられる。これは佛教建築のスタムバから轉化したもので、ジャイナ教ではこれを厨子の意味に用ひてゐる。即ち頂の小堂の如きもの内には普通ジャイナ教の神が安置されるのである。

バスチスの例は可なり少くない。こゝに掲げたのは孟買州の南端なる、ラッカナンチ Lakkandhi と云ふ僻村にある實例である(第八九一圖)。カシ・ウイシワナート Kashi Viswanath と稱するもので、後に見えるのは頂部の崩れた本殿であり、前に入口が見える。本殿の様式はドラヴィダ式であるが、幾分チャルキア式即ち中部印度教式に類似の點のあるのは特に注目すべき處である。年代は恐らくは第十世紀に屬すると認められてゐる。

ガート山脈を西に下つてアラビア海の邊へ行くと、こゝには又一種特別なジャイナ建築がある。其の最も顯著なる例は、ムーダビドリ Mudabidri にある祠堂で、木造から變化したらしい形の列柱を立て、屋根は二層又は三層のものがあるが、何れも軒が相當に深く出てゐる。其の相貌何處となくネパール建築に似てゐる處が奇妙である。畢竟ガート山が多量の木材を産出するからで、今日も此の邊の家屋は木造のものが多し。祠堂の年代は西

曆千三百年頃であると云ふ。更に奇趣に富むものは同地方グルヴァーヤンケリ Gunrayankeri の祠堂の前の亭子で、臺の上に開放的に四柱を立て其の上に三層の小堂を載せたもので、様式に於いて前者と同じであるが、手法が實に奇巧である。尙ほ此の附近に在る僧の墓も同工異曲であり、三重乃至五重の塔の意味を現はしてゐるが、矢張りネパールの氣分が漂うてゐるが如くに感ぜられる。

第四節 近代闍伊那教建築

回教建築傳來以後、ジャイナ建築もまた漸次に其の感化を受け、近代に至つては、其の外観殆ど回教の會堂に均しいやうなものさへ現はれて來た。此の實例は主として西北印度地方に多いやうに思はれる。

第八九三圖はアーメダバード Ahmedabad にあるハチ・シンの祠堂 Hat Shing's Temple の一部である。今を距ること僅かに八十年前の作であるといふが、其の調子が甚だ輕快となり、古代の厚重さ、實質的強さが著しく減少してゐる。第一に古代ジャイナ教の特徴とした塔型のシカラは著しく變形して其の表面の段層を失ひ、板で張つた箱の如き淺薄な觀を呈し、拜堂の上には葱華形のドームが現はれて來る。柱と柱との間の腕木が接續して完全な拱の形となる。勿論細部の手法に使用せらるゝ彫刻、削形、文様等は依然ジャイナ教固有のものであるが、其の精神は古勁を失ひて著しく柔弱の氣分を示してゐる。要するに技工に於いて洗練されたかの如くで、精神に於いて墮落したのである。

デリには更に新型の例がある、其の入口の向拜には舊式の持送りがあつて、明かにジャイナ的手法になつてゐるが、堂の上には完全なる回教的性質を有するドームが冠せられ、拱も回教氣分が多瓣拱となり、柱頭も多少歐風を帯ぶるが如く裝飾文様も寧ろアラベスクに似たものである。斯くの如きは最早印度建築の主義を去つて回教主義に就いたものと認むべきものである。なほ此の種類の類例は他にも若干ある。

アプー山にも近代的ジャイナ建築がある。これはシカラが明瞭に多層に區劃されたものである。南方ジャイナ教のシカラも多層に分れてゐるが、それでもなほ古典的な意味があつて、シカラの輪廓が保たれてゐる。然るにこれにあつては既にシカラの輪廓が崩れてゐるのである。ブンデルカンド Bundelkhand のソナーガル Sonagari に於ける祠堂は規模の大に於いて顯著であり、第十六七世紀の建立と稱するが、これも外観殆ど全く回教建築の如くである。

以上の諸例は其の道程に於いて均しくないが、其のジャイナ教建築の末路に向ふに於いて其の歸趨を一にしてゐる。

第四章 印度教建築

第一節 總 說